

三商同窓会報

創立80周年記念特別号

都の空は明けたり今

希望は燃ゆる若きわれら

都立第三商業、ここに拠るや

日本の富を担ふわれら

創立八十周年を迎えて
思い出される恩師

仁

初代校長

吉澤 徹



明治七年一月五日生
戌年・丑月・戌日
一流国際人に相応しい教育
「リトル・ゼントルマンたれ」

勇

第二代校長

今村 直人



明治二十四年十二月に二十四日生
卯年・子月・申日
すべて幅広く愛情を持つて当たる
政治家であり 大教育者である
「博愛衆に及ぼす」

智

第五代校長

清田 栄一



明治四十一年十月七日生
申年・戌月・未日
卒業生の顔と名前を記憶され
コンピューター先生と異名をとり
永く教頭を勤められ教育界に
名を轟かされた名物先生
「ベストを尽くせ」

目次

創立八〇周年記念式典	3
創立八〇周年記念式典祝賀会	6
各期活動報告	10
グループ活動報告	19
三商生徒会を顧みる	24
定時評議員会報告	28
平成十九年度会計報告及び二十年会計予算	30
役員名簿	31
運営協賛金明細報告	32
募金のお礼ご挨拶	33
創立八〇周年記念行事会計決算報告書	34
平成二十年度教職員異動者一覧表	35
新任・退任のごあいさつ	36
三商版 私の履歴書	42
時代の証言者	50
エッセイ	54
特別寄稿	64
恩師・先輩を語る	78
訃報	95
府立三商時代を想起する	96
『額田王賞』の受賞にいたるまで	104
新同窓会会則	105
特別会報の発刊に寄せて	106
編集後記	107
広告	108
校歌	118
応援歌	119

創立80周年記念式典



八十年の歩み

本年一月十二日（土曜日）、本校の八十年の歩みは、単に通
過点としてはありますが、やがて一世紀というモニユメント
を目前に透視可能な地点まで到達したことであります。この良
き日に「テイアラ江東」大ホールに於きまして、生徒をはじめ
とし、保護者、教職員はもちろんのこと、多数ご参席ください
ました同窓生の皆様とともに、八十年の重みを嘯締めつつ、幾
多の試練に耐え、それらを克服して、さらに新たな船出を謹ん
でお祝いいたしました。

この記念すべき事業の実行委員長は同窓会長が担当され、第
一部のセレモニー、第二部の生徒による舞台発表会。続き、第
三部の祝賀会とも盛会のうちに挙行されました。

式次第

第一部 式典

第二部 生徒舞台発表
ブラスバンド部演奏 箏曲部演奏
ダンス部 演技
三年五組 ソーラン節

第三部 祝賀会 実行委員長挨拶、
学校長挨拶、来賓挨拶
鏡開き、乾杯、
歓談（獅子舞い）バンド演奏、
PTA合唱団
歴代校長挨拶
校歌、応援歌、万歳三唱

閉会



柴田校長の祝辞



参席者及び在校生による国歌斉唱



平成 19 年度三商祭最優秀賞 3 年 5 組による「ソーラン節」



ダンス部による「宇宙戦艦ヤマト」



箏曲部による「うれしいひなまつり 斗為巾」



プラスバンド部による演奏「ファイアーダンス」「ルパン三世」ほか

創立80周年記念式典 祝賀会



鏡 開 き



乾杯発声 鬼澤副実行委員長

《創立八十周年記念祝賀会》

実行委員長ご挨拶

創立八十周年行事実行委員長 木戸 隆吉

皆様、今日はようこそいらして戴きました。

三商の会でこれだけ一堂に会して、お集まり戴け、和気あいあいにて、これから祝宴会を始めることに大変うれしく思っております。

私は本年二日の日、一般参賀に行つて参りました。畏れ多くも、天皇陛下様には「皆と共に祝うことを嬉しく思います。」と申しておりました。私も同じことですが、皆様と共に祝うことは大変嬉しく存じます。今日は心行くまで皆様と共に祝い申し上げて、三商の八十周年の記念行事、祝賀会が立派に成功して、後世に残るような盛大な祝賀会になることを祈っております。本日はよろしくお願ひ申し上げます。



《創立八十周年記念祝賀会》

学校長ご挨拶

東京都立第三商業高等学校長 柴田 哲

ただいま、ご紹介戴きました第十七代校長の柴田哲でございます。よろしくお願ひ申し上げます。本日は足元のお悪い中、これだけ大勢の方々がいまして戴きまして、誠にありがとうございます。

午前中、式典ということで、一部、二部と。二部から生徒の発表会ということで、あんなに頑張ってくれたことに、実は涙が出てきてしまいました。やはり、こうやって、子供達があれば元気に出来るのは、今日お集まりの皆様のお陰だと思います。

また、高いところから、皆さん申し訳ないのですけれども、三商創立八十周年ということで、同窓会、またPTAの方からも多大なご支援を戴きました。またこれからも一念一石戴かなければならないと思います。そのときにはよろしくお願ひしたいと思います。また、思い出話、これからの話 様々なお話しして戴きながら、そのときにはよろしくお願ひしたいと思います。本当に手短でございますけれども、ご挨拶にかえさせて戴きます。どうぞよろしくお願ひいたします。



創立80周年記念



柴田校長の祝辞





祝賀を彩る獅子舞い
(神田ばやし)



第十期 荻野 文雄
祝賀会に出席し、楽しくひとときを過ごすことができ
ました。偏に会長始め運営に携われた各位のご努力
の賜であり、深く感謝申し上げます。あらためて伝
校に学んだ有り難さを感じました。また、三期の九十
歳・田中徳治さんが元気で談笑されておられるのに接
し、感銘した次第です。先ずはお礼まで。
(二月十三日記)



バンド演奏



各グループの紹介風景



万歳三唱



校歌・応援歌の斉唱

文化祭・八十周年を終えて

七十五期 手塚 三恵子



二〇〇七年の文化祭は、ダンス部とクラス発表であるソーラン節を踊りました。

私はダンス部の部長でした。部長といっても三年生は二人しかいなかったのです、すべて二人で協力してやってきました。コーチも二人いてとて

も恵まれた環境の中でレッスンを受けていました。部長として皆をまとめ、舞台上で踊るのは初めてのことで、何をしたらうまく伝わるかなど、たくさん悩んだり考えたりしました。みんなで夏休み前から少しづつ頑張り、自分たちで考えた振りや音楽も取り入れられるようになりました。本番では、これが最後の舞台だと思っていたので、お友達や先輩も声援をくれ、とてもうれしかったです。

クラスのソーラン節では、金八先生でやっていたソーラン節を参考に、少し手を加えたバージョンで練習してきました。初めの頃は、練習にくる人がいつも同じで、人数が少なく、たくさんしましたが、文化祭が近づくにつれ、みんなの息もあってきました。本番前には、たくさんの人から『楽しみにしています。』といった励ましのお言葉を頂いたり、演技が終了してからは『すぐくかつこよかつたよ。』などお褒めのお言葉を頂きました。

とてもうれしかったです。おかげさまで最優秀賞を獲得することが出来、八十周年記念式典でも演技を披露することになりました。

こうして、八十周年記念式典は、ダンス部の踊りと、クラスのソーラン節を披露することになりました。ダンス部の演技も、クラスのソーラン節も、文化祭のときよりもバージョンアップし、八十周年記念式典の大舞台上に立

てることをとても誇りに思いました。

ダンス部では、文化祭後に二年生に部長が変わりました。文化祭を通して、部の絆が深まり、八十周年への準備も着々と進みました。文化祭のときよりも部員の人数が少し減ってしまったのが残念でした。文化祭で使った曲プラス新しい曲を披露することになったので、立ち位置も考え直したりしました。

クラスのソーラン節では、文化祭のときに照明などの裏方をしていた人たちも踊りに加わり、人数が増え、さらにパワーアップして本番を迎えました。ひとつのものをみんなで作り上げるには、意見のぶつかり合いなどもあり、何度も話し合いをしました。その結果、皆のソーラン節への気持ちは、一つにまとまり、とても熱く感じられました。クラスが一つになり、その気持ちを本番で披露できて最高の思い出になりました。

〜最後に〜

私は、文化祭でも八十周年記念式典でも、ダンス部・ソーラン節の一員として頑張りました。どちらかと言えば八十周年記念式典の方が続けて演技を披露したので大変でしたが、両方とも三年の最後で、八十周年の節目の大舞台上に出られたので最高の思い出になりました。

この発表を通して、ひとつのものを作り上げる大変さや、やり終わった後の感動や、踊ることの楽しさに気づきました。とてもよい経験が出来たことが非常にうれしいです。こういう気持ちに慣れたのは、周りにいてくれた友達や先生方や家族が支えてくれたからだと思います。

私は、卒業後、保育士になるために短期大学に入学します。高校生活の最後に、とても良い経験ができたことを忘れずに、素敵な大人になって行きたいとおもいます。

各期活動報告

十期やそじ会

第十期 荻野 文雄

学窓を同じくしてから星霜七十一年、大方は第一線から退いた。日本の人口は戦後生まれが七割を超え、昭和も遠くなった。われわれは徴兵最期の壮丁として大日本帝国の崩壊に遭遇した。戦争の悲惨さ、飢餓の恐怖も体験した。戦後の復興に夫々の分野で働いてきた。余生は、大正生まれの下町育ちらしく、粹に、おおらかに、さわやかに生きたいものである。

第五回十期やそじ会、本年五月二十三日（金）正午、同期、古田泰治郎君経営の神田淡路町、割烹「萬代」で開催した。神田川を隔て秋葉原電気店街が国際的な若者の町として賑々しいのに対し、此処淡路町、須田町界隈は古い東京の情景と風味を伝える蕎麦屋、小料理屋、洋食屋、汁粉屋が軒を列ね、落着いた情緒が漂う。

荻野が司会。世話人福田 猛君挨拶、欠席者の消息が伝えられる。殆んどが本人か連れ合いの病患が欠席の理由。加齢と共に避けられない道だ。母校創立八十周年記念の校歌、応援歌のCDを聴く。越中島の青春が甦る。小西康義君の乾杯音頭

で開宴。さすがに酒量は衰えたが懐旧談に花が咲いて談論風発。座が盛りあがる。二時、神田明神氏子総代の山田澤三君の堂に入った手締めで閉会。

出席者 十七名

飯島武敏、石丸豊多郎、石川喜一郎、岩崎功、加瀬善太郎、神谷恭正、小池善四郎、小西康義、柴田榮一、平野欣二、福田猛、古川恵一、古田泰治郎、帆足誠、松下義雄、山田澤三、荻野文雄、畏友 山崎順三君を悼む。

十期の論客、山崎順三君が一月十日に永眠した。三商、横浜高商を通して秀才、恩師清田榮一先生の信頼が厚かった。三商会計人会、木鐸会の同人。十期の記念碑「十期会報」を発起し、十一年間、編集、制作の主幹であった。三十六号まで発行し、他期に類を見ない同期の絆を深めたのは、偏に君の熱意と、十期会世話人福田猛君のバックアップに依る。亦、われわれが活字世代の人間であり、激動の昭和に生きた証しを記録として残したい思いがあったからである。君は帝国海軍主計少尉として朝鮮の鎮海基地での終戦体験を寄稿した。小生は原稿の収集と会報の配布を担当し、編集を補佐した。追ってパソコンの名人の五島彪君が加

わった。葛飾東金町の山崎家には複写機が備えてあり、会報の印刷、製本を三人で作業した。一仕事を終え、閑談するのが楽しみだった。独居の君はそれを喜んでた。帰りは金町駅前の赤提灯に寄って、君は飲まないのに酒呑みの小生と五島君に付き合ってくれた。好漢山崎順三、天国で愛妻をと比翼の鳥になられた乎。



十七期会

飯田 幸男

行事報告

一泊旅行

平成十九年六月四日 箱根「ホテル箱根ゆあ強羅」泊。今年も加齢を考慮「安・近・静」旅行を実施。明星ヶ岳を眼前にのぞむ閑静でモダンな宿で透明な温泉に浸かり寛いだ一夜を過ごした。参加はいつものメンバーの十名。夕食後はカラオケで腹ごなしの後、幹事部屋に落ち着き飲み直し、在校時代の昔話に時間を忘れ、話が弾んだ。翌朝食後次の再会を約して帰途につく。

グルメの会（暑気払いを兼ね）

昨年から飲めない会員が集まれるようにとアルコール抜きで、美味しいものを食べる会を企画。今年も八月二十六日母校に近い佐賀町華福寿で中華料理を堪能。予想外の一四名参加。加齢とともに飲めない仲間が年々増加。好評につき今年もテレビで放映中の「瞳」にあやかり月島仲通りで「もんじゃ焼き」を企画実施の予定。

校歌祭

十月六日 日比谷公会堂で。伴奏、指揮、不一致でテンポが合わず最悪。終演後、富国生命地下、「萬里」で我が期だけで反省会。参加十三名。ビールの味は格別だったが、次回も今回同様では益々参加者激減が予想される、大改革が必要との意見

が多発した。

忘年会

十二月九日 例年通り三菱養和会巣鴨バルテールで。参加十九名と、今年一番の盛会。大庭、星溝口、渡邊（三）の諸兄久しぶりに参加。特に大庭兄は飛鳥山のお花見以来この一年の無事を喜び、来年の息災を祈りながら、鍋を囲み歓談。

お花見

平成二十年四月六日 新貝兄の企画で前回好評の三鷹国際キリスト大学キャンパス内の桜を一昨年続き観桜。今年は暖冬で開花が早く満開は過ぎていたが、充分堪能できた。我が会は「花より団子ならぬ酒」の口。三鷹駅前の「日本海」で花見酒。参加十四名。大酒盛で一同大満足。

その他

十七期も大半が今年喜寿を迎えた。加齢とともに健康を損ねる会員が増加。幸いにもこの一年も訃報を受けず経過したが、今後も聞かないよう互いに健康に留意して日々を過ごそう。



三商十九期

一九会近況について

前十九期会 会長 木戸 隆吉

三商十九期生有志が月一回十九日前後に、「両国大関庵ソバ店」に集まって会を催そうと始まり、一九会と称し、丁度六十五回目に三十名を超えて集うことができたのを記念してこの写真を紹介します。今から五年五ヶ月前に、会費二千五百円、飲み放題、おつまみに、三点付きセットで、大関庵ご当主同期の「大関守君」の献身的サービスが今でも続いています。友遠方より来る、又楽しからずや 会う度に活性化が働き、若さのホルモンが醸し出され艶がよくなっていくんじゃないかと推測されます。

さて一人一人を紹介すると話は永くなりますが、公認会計士、社会保険労務士、作家、元映画俳優、かるた名人、スケートフィギュアオリンピック選手、ソロバン日本一（昭和二十九年）今は歩く会会長、不動産業、自家営業者、インターネット指導者、カラオケ講師、三菱銀行支店長、三井信託銀行で活躍した方、三菱マテリアルの五人就職し揃って定年退職し、退職金と年金によって悠々自適な方々、中には日銀の入社を断って魚河岸で活躍した人、この席では在学中、校内珠算競技で、先ほど紹介した日本一の同期生を破って優勝した話も飛び出しました。また、出席者の中に

は、ソロバン一級、簿記一級の方が多いのには驚きました。

都知事石原慎太郎氏と学友の関係で親しい間柄であることも、伺って都立の学校を卒業した者にとつては、大変心強く思っております。まだまだ話は尽きませんが、来年三月ごろには、同期会を開催する予定になっております。これから話に花が咲くことでしょう。

「月々に、酒飲むときも、多けれど、酒のむ酒は、この大関の酒」



恩師今村直人第二代校長、 清田榮一第五代校長の教えと 三商二十期会の開催

第二十期 河原啓介



私たちは戦後日本の経済復興期、昭和二十五年、商業校の名門三商に約四百九十名が入学出来ました。競争率は、約六倍以上でした。(十クラス、女生徒三十二名)

入学式で今村直人校長先生の九州弁なまりの声で、日本の将来は明るい、日本のために勉学に励んでほしい。力強いメッセージは、今でも忘れることが出来ません。

組織経営について、両先生から大変重要なことを学びました。清田榮一先生(当時教頭)は、今村先生を心の底から尊敬なされておりました、今村直人先生は、清田先生のことをこんなにすばらしい先生はいないと、いつも褒めていらつしやいました。組織のトップ同志は、この様な関係であることの大切さを学びました。

清田榮一先生の教えは、色紙に書く言葉は、限りなき前進と最善の努力でありました。

今村直人先生からの教えで、体験としてお教えいただいたことは、将来の人生航路に於いて、一大難漢に合うことがある。どんなに苦しい時でも、さけて通らないで、真正面から勝負してほしい。私心のない正義に立脚した信念に向かつてまい進するとき、いかなることも成し遂げられないことはない。お二人は日本の教育界に於いて偉大な先生であつたと思います。

平成十九年十一月十八日(日)正午から、三商二十期同期会を、錦糸町東武ホテルバント東京で開催し、全国各地から七十七名の参加をいただき、約三時間楽しい時間を過ごすことが出来ました。

初めに逝去なされた恩師、同期の方々に対し全員で黙祷をささげました。

母校八十周年募金につきまして、幹事全員の名前で、全会員に文書で、一口千円以上ということをお願い申し上げましたところ、多数の同期の方々からお申し込みをいただきました。その中には、令夫人から逝去なされた会員の分としてご送金いただいた方もいらつしやいまして、感動いたしました。又、目頭が熱くなつた次第であります。二十期会は幹事の協力で皆大変仲良く、メンバーの中に、オリンピックで活躍された著名な方や、業界で活躍が認められ叙勲を受けられている方や、その他各分野で活躍されている方が多数いらつしやいます。

考えて見ますと、今村直人先生、清田榮一先生を始めとして、多くの先生のお陰で現在があることを忘れず、感謝の気持ちを持ってお教えを守って行く様に致したいと思っております。

感謝



第二十三期 “古希を祝う会”

三組 木島 栄次

“都立第三商業ここに立つや”

江戸の誇りを継げるわれら”

作詞 前田夕暮、作曲 山田耕筰の名曲、三商校歌が、二〇〇八年三月十六日、早春の上野不忍の池に、響きわたり、二十三期生の同期の仲間が、一瞬のうちに、高校生に戻る、そんな瞬間であった。我々、二十三期は、九クラス、その中、男女組が三クラス、進学組みが八組と九組、全学年四八四名程の構成。

二年前、一三名の参加者を以って、五十周年記念会を開催して以来の同期会である。

会の進行役は、定番となっている、元NHKアナウンサーの小堀信夫君（三組）の、未だ現役を彷彿させる名司会の下に、淀みなく進められ、二年前の幹事であった池田実君（九組）が残念ながら、鬼籍に入られたことを報告、併せて古希を迎えられなかった仲間の皆さんに、心を込めての黙祷を捧げて開会となった。

先ずは、代表幹事の鈴木進輔君（二組）の開会の挨拶で始まり、恩師でのご出席は、山田泰義先生（七組を担当）で、八一歳になられた今も、かくしゃくとされ、我々への激励のご挨拶を賜り、恐縮する。そして往年のマドンナ？から感謝の花束の贈呈があり、心なしか顔を赤めておられた様

であった。

いよいよ乾杯の場となり、五組飯沼良充君の音頭により、一気に盛り上がりを見せ、会も佳境に入る。暫く交流歓談の輪が広がり、そして各クラス毎に、壇上上がり、出席者の紹介と近況報告、記念撮影を行い、遠い記憶が一瞬のうちに蘇る、不思議な場となった。その後も広い会場のあちこちに談笑する姿、懐旧話の花が咲いた。

予定された三時間は、瞬く間に過ぎ、冒頭の校歌の大合唱となり、最後に、中締め挨拶を六組の田中公太郎君を以って閉会。又の再会を誓い合いながら各クラス毎の二次会に散った。



三年ぶり「二十四期会」開催

福原 伸行

平成十九年十月二十日、同期生八十二名の出席を得て、第十三回二十四期会を開催しました。会場は両国のザ・ホテルベルグランドとし、恩師吉岡鶴義先生のご参会もいただき、久し振りの懐かしい再会のひとときを楽しみました。

実は、案内状発送後すぐに、出欠の返信を取り纏める作業を進める中で、あまりの訃報の多さに愕然といたしました。ご遺族が「〇〇は×年×月に…」と知らせて下さる訳ですが、私たちの期は三年に一度という周期で同期会を開催しております、前回の出席者が「また、三年後に会いましょう」と決めたことでこの度の会になりました。昭和十三年・十四年生まれの学生ですから六十九歳・六十八歳になります。たまたまそういう巡り合わせの年だったのかとも思いますが、幹事仲間合報告の連絡をする時に「もういやだ」と駄々をこねました。各ご訃報にはお悔やみ文をお送りして、当日のプログラムにも「物故者へ黙祷を捧げる」時間を入れて参会者一同でご冥福をお祈りしました。

今回も卒業以来初めてという会員が何人かいて、それぞれにいろいろな訳があつてそういうことになってしまったことの経緯を聞かされ、大変に感激されて握手を求められたりと、まあ幹事真

利に尽きると言える場面もありましたので、駄々は引つ込めました。

ご来賓としてお招きした吉岡先生のご挨拶はいつもながら若々しく、一回り若い筈の私たちを叱咤激励して下さる趣きでした。例によつて歓談の時間が瞬く間に過ぎて、また三年後の再会を約して散会となりました。

先の案内状に「母校創立八十周年」に対する寄付のお願い文を同封いたしました。止むを得ず当日欠席のお返事を頂いた方々からもご寄付のご送金があり、目標を達成できました。本当にありがとうございました。とうございました。

同期会開催の「三年に一度」という周期には特別な意味はありません。ご多聞に漏れず、二十代三十代の仕事・家庭に追われている時代は、皆が(幹事もメンバーも)同期会どころではなくて、四十代になってやつと、何人かが集まって開催準備に手をつけました。それぞれのクラスは「クラス会」を続けていましたから、各クラス幹事に呼びかけて先ず準備会を開きます。日時・会場の選定、名簿の整備、案内状作成、発送等相当の作業があります。現在はパソコンが活躍してくれませんが、以前はかなり大変でした。

先日、三商同窓会の会合に出席した折に、「新しい期の活動がない」と五十期・六十期代の動向を心配する声を聞きました。これは仕方ないことだと思えます。時期を待たなくはいけないで

しょう。

八十年と言えば大変な時間の流れです。二十四期生の私たちより十年前に誕生(昭和三年創立)した母校三商の来し方は、あの戦争との係わりなくしては語れない部分が大きいです。私たちは戦後八年から十年を経過する時点の三商で三年間過ぎました。世の中は現在のように豊で、華やかではなくて、でも活気が満ち溢れていました。私たちの当時の三商は一学年九クラス、約四五〇名で賑やかな学校でした。私はかなり窮屈な中学時代を送つて来ましたので、自由で明るい校風にすっかり感動してしまい、あれやこれやと顔をつつ込みました。素晴らしい先輩、友人にも恵まれて自分なりに輝いた時代を送れたと懐かしく思い出されます。

母校三商が創立八十周年を過ぎて、百年・百五十年と歴史と伝統に根差した歩みを続けて欲しい、新しい時代の流れの中で更なる繁栄の時を築いて欲しいと願っています。

過日、三商同窓会口座あてに私たち「二十四期会」への割り当て(目標金額)を振り込むことが出来ました。同期会出席者の皆さんもご協力ありがとうございました。とうございました。

次回開催は、また三年後の平成二十二年になります。ご健勝を祈ります。

第二十五期 同期の集い

同期会幹事

井上 嘉久（二十五期評議員）

平成十九年十月六日（土曜日）、「神田一ツ橋如水会館」において開催された。

思えば、昭和五十三年、卒業以来二十年目にして、初めての同期会が催され、以後、四年に一度の割合が、三年に一度となり、近年は、二年に一度の開催となり、この度めでたく十回目を迎えた。

当日は、たまたま日比谷公会堂での校歌祭との催しと重なり、校歌祭メンバーが合流できる五時三十分の始まりとした。

ありがたいことに、この度も恩師「岩永先生」（三組担任）・「中川先生（五組担任）」が、お元氣にご参加くださり、同期のメンバー九十六名共々集いとなった。久しぶりの両先生のお話に、五十年前の生徒の気分を味わった。

「出雲先生（七組）担任」からは、体調不良にて欠席のご丁寧なお便りを頂く。その中に、平成十八年十一月三日に、第三回「三輪山まほろば短歌賞」（作品は別掲しました）の最優秀賞「額田王賞」受賞の一説があり、一同に披露しつつ、喜びを共にした。「母校創立八十周年」を目前に控えた、盛り上がりの中、校歌・応援歌を高らかに唱いあげ、次回、古稀再会を約し、午後八時前に

散会とした。

以上

卒業満五十年 二編

① 当時の思い出

二十五期 磯貝 幸春

卒業して半世紀が経過した。早いものである。当時を思い出してみた。

日本の世相の一部であるが

昭和三十年

・初代三人娘「ジャンケン娘」の

・江利チエミ 美空ひばり 雪村いづみ

・鳩山民主党と吉田自由党が保守合同して自由民主党を結成

昭和三十一年

・石原慎太郎の「太陽の季節」

・三種の神器 白黒テレビ 電気洗濯機 電気冷蔵庫

昭和三十二年

・南極昭和基地

・榎山節考 歳老いた母 田中絹代

・もはや戦後でない、日本国は貧乏でも元気な三商生だった。

修学旅行 五泊（うち行き帰りの二泊は車中泊）

六日 三年生の四月に

二日目 大阪↓神戸↓関西汽船天女丸で淡路島↓

鳴門の渦潮↓栗林公園↓琴平敷島館泊

三日目 金比羅宮↓屋島↓高松↓関西汽船山水丸で瀬戸内海↓神戸↓京都石長別館泊

四日目 京都市内観光↓清水寺↓御所↓金閣寺↓京都連泊

五日目 法隆寺↓奈良市内見学↓宇治↓平等院↓京都↓帰路東京へ（車中泊）の日程であった。



琴平・金比羅宮にて（昭和32年4月25日）

往路の東京↓大阪は車中泊でなんと十四時間五十分も要した。今は「のぞみ」で僅か二時間半である。

携行品一覧に「洗濯ばさみ二ヶ」とあった。これは寺院見学のとき脱いだ靴をとめ紛失防止のため。

貸切列車等ではガス中毒防止に二時間に一回位全窓を開いて換気せよとの注意あり。

当時の思い出の一部であるが、創立八十周年を迎えた母校の良き伝統で学び、それに支えられて卒業しての満五十年は「光陰矢の如し」であった。

次回同期会は古希を迎える来年を予定している。皆が元気な姿で再会したい。

② 絆

二十五期 廣田 豊司

昭和二十五年一月生まれの私は満六十八歳となった。昭和三十三年三商を卒業し、五十年となったが、時を同じくしてペンを置き、サラリーマン生活を卒業した。

ホップ・ステップ・ジャンプと職場を三回変わった。振り返れば生命保険会社、化成品鋳業会社、プラスチック製食品容器製造と、どの会社でも先輩同僚に恵まれ着地出来た。

昭和三十年代は家族も多く、団塊の世代といわれるようになって、今は退職ラッシュとなつ

た。正にこの時代がわれわれの青春であった。東京タワー、皇太子殿下のご成婚、高速道路、東海道新幹線。昭和三十九年十月十日東京オリンピック。この日は体育の日として国民の祝日になっている。遊びでは麻雀が一番ではなかったでしょうか？仲間、先輩とコミュニケーションの場でありました。

同窓会は、各クラス幹事持ち回りで二年毎に開かれ、幹事の方々には感謝しながら参加し、旧交を温めているが、訃報もこのとき知らされ、あの人が、と感無量にて黙祷をささげている。残念なのは当時は女生徒少なく四組迄が男女共学で、五組から九組は男子クラスで、私は三年間七組、六組、七組と男子組であった。クラブ活動は簿記研究部の籍を置いたが会社では経理、財務関係の仕事が続いたので大変役立ちました。家族は男の子二人それぞれ家庭を持ち、孫は四人と皆元気である。国内旅行は全国旅したが、仲良し家族三人と配偶者の還暦祝いの海外旅行を企画して、平成十五年スイス、同十七年イタリアは私達で、同十九年ドイツを旅したのが楽しい思い出として残っています。

今は図書館まで廻り道をして約一時間のウォーキングと読書、たまのゴルフを楽しんでいる。懇意地を迎えられたのは健康に生んでくれた両親に感謝しています。

絆は一人ではまだ半人前でしかないと教えてい



後列左から2人目 廣田豊司さん・前列左 磯貝幸春さん

る。社会で結ばれた職場、人生で出会った家族に助けられて今の自分があると考えている。私は他の人々に対して絆として役立っていたか反省し、これからの人生の道標としたいと思っている。

卒業満五十年アーカイブス

満員電車の中で

二十五期 府川 幸治



「兄ちゃん起きないと遅刻するよ。」と弟が起こしにきた。もう朝か？まだ寝たばかりのような気がする。時計を見ると

六時五十分。あと五分は大丈夫。こんな時の五分は早い。それに引き換え、四時間目最後の五分は長いこと。この頃は朝起きるのがとてもつらい。一、二の三と号令を三回位繰り返してやっと起きる。またあの満員電車に乗るのかと思うといやになつてしまう。帰りなどは自動車の洪水で都電は蹴飛ばされそうである。全く日本は人間が多すぎる。今日もまた人がはみ出そうな電車に乗り込んで。これだけで朝食のカロリーを大部分消費してしまいそうである。既に三時間目の終わりに弁当を食べたくないのである。

しかしもうじきこの線路ともお別れである。それに伴い学生時代とも一生のお別れである。思えば長い十二年間でありました。今でも初めて学校へ行った小学校の入学式を忘れません。僕が行った学校は東京都といっても田舎と変わりない北多摩郡の田んぼの真ん中にありました。当時の教科書は今でも持っています。丁度今の新聞紙

と同じで自分で折って表紙を付したものでした。その日の帰り道、僕は「母ちゃん、教室って大きな黒いカンバンがあるんだね。」といったら笑われてしまったことを覚えています。冬の日などは霜だけで下駄が吸い付いて取れなくなつて泣いて帰った日もありました。

小学校四年生のとき神田に引越して来て「神竜小学校」へ転入した。五年生のとき放送部に入つて活躍した。楽しい時代でした。朝早く学校に行つて朝礼の終わりにラジオ体操のレコードをかけた。昼休みにはアナウンサーになつて学校放送した。クラブ員の中には、今、日活で活躍の浅丘ルリ子（本名浅井信子）も入っていました。中学では二年生の頃から三商を憧れるようになった。三年生になつて僕のクラスには僕を入れて三人三商希望者がありました。入試も近くなつたある日、先生に呼ばれて「君達は三商は少し難しい。一段下にしたらどうか。」といわれてがっかりしてしまつた。Y君はまもなく三商を諦めて他の商業に決めたけれども、僕はどうしても諦めきれず、もし落ちたら小僧になろうと決めてA君と入学試験を受けた。発表の日は不動前からの長い道を胸をドキドキさせながらA君と見に行つた。僕の番号は四十一番、A君は四十番。「あつた！四十一。」しかし四十番はありませんでした。帰り道二人は黙つて歩いた。僕は溢れる涙をどうすることもできなかつた。A君を見るとやはり涙を浮かべてい

た。同じ涙でも雲泥の差がありました。この時ほど試験の矛盾を強く感じたことはありません。中学で三年間勉強したことがたつた二日間で決定するなんてと思つた。今度の就職試験でもそうです。これは高校入試よりまだひどく、ほんの二、三時間で一生の進路が大きく左右されてしまいました。幸いにもこの二つの関所を無事通過できた喜びは何者にも変える事はできません。

このような十二年間の学生生活をもうすぐ終わり社会に出れば、この電車の中のように四方からもまれることでしょう。しかし僕は押し潰されないように両足を踏ん張つて「常に努力」という吊革にぶら下がつて、僕の降りるべき停留所まで頑張ろう。そして強い人間になろう。強い人とはどんな時でも立派な行いをする事です。悪事は簡単にはできません。しかしそれは心の弱い臆病な人間であると思う。よい事、正しい事を行うには勇気が要ります。強い心が要ります。僕は強い人間になろう。今年の友達からの年賀状の中に「一年、一年、また一年、時は我等にかかわりなく過ぎ去つて行く。それを食い止めそれを利用するのが人間である。考える力を養い、常に考えよう。常に上を望もう。しかし同時に下を見ることを忘れずに。下を見ることを忘れた時程恐ろしいものはない。」というのがあつた。これを将来の教訓として生活しよう。満員電車の中で走馬燈のように頭に浮かんだこと。

—終—（執筆昭和三十三年一月）

母校

二十八期 鈴木 和子(旧姓大井)

平成十七年四月の土曜日、いつものように深川の「かね松」でクラス会があった。

うらうらと気持ちのよい春の日で、懐かしい面々との四方山話も終ったあとまだ日は高く、誰からともなく学校まで歩いてみようという話しになった。川添いの道を桜が舞っていた。三商前のバス通りもすつきりきれいになって貯木場もなくビルの建つ都会の風景であった。懐かしい時計塔のある校舎は無く、奥の方に立派な建物があった。校門を抜けて、玄関で出会った先生に卒業生である旨を告げると、校内を案内して下さると言う。一同喜んで来客用のスリッパを履く。

教室から見える景色に驚いた。そこはまさにトウキョーのウォーターフロントの風景が拡がっていたのだ。町はずれの学校だと思っていた母校は都心の学校に変身していた。

思えば、私達が高校生活を送ったのは、高度成長期以前の昭和三十年代であった。

都電の停留所から歩いてくる通学路は先生とも一緒になったりして三商生がゾロゾロ歩いていたのを思い出す。担任の吉田久登先生は、当時ずいぶんお年に思えたが、もはや私達はとうにその齢を越えてしまったようだ。

高校生活は長い人生の間で、たったの三年間だが、その中で育まれた友達との関係は、今も続いている。その友との会話の中にいつも三商の風景がある。私達の故郷である三商は日々変化しているようであった。

八十周年、おめでとうございます。

また、快く校内を案内して下さいました先生、ありがとうございました。半世紀近く経っても、母校は優しかったのです。



グループ活動報告

第三回三商OB団体交流会

実行委員長 二十五期 鬼澤 好男

平成十九年十月二十日（土曜日）に第一ホテル 両国二階「東天紅」に於いて、同窓会の恒例行事の一つとして定着して参りました三商OB団体交流会を開催いたしました。

今回はテニス部、映画部、卓球部、女子バレーボール部、レスリング部、陸上競技部等各クラブ活動のOBの方々が新しく参加をして戴き、第一回より連続参加の「三水会」（八名）、会計人会（三名）、剣友会（四名）、三珠会（三名）、三文会（三名）、理事・評議員会（十六名）等、十二団体五十名を超えるご参加を戴きました。

古田勝一さん（二十六期）の司会により開会、先ず木戸会長より、母校創立八十周年記念行事に対する各会ならびに同窓生の皆様のご支援ご協力に対し、感謝の辞が述べられました。

続いてご来賓としてご出席戴きました柴田校長先生のご挨拶の中、三商の現況として日商簿記検定に三級一〇〇名、二級以上一〇〇名の合格者を目標として指導に当たり、そして一般社会に於い

て即戦力と成り、また、四年制大学に入試合格入學ができる生徒を育成しかつ明るく楽しい魅力ある学校にするべく、努力をしているとお話に、同窓生一同、母校の未来に大きな期待を寄せました。

そして、山水会長藤枝精治さん（二十四期）の母校の創立八十周年記念行事の成功を祈念してとのご発声により乾杯を行い、懇親会に入り、各会の紹介、近況報告を交え、呑むほどに盛会となり、二時間に亘り交流を深め、最高の交流会となりました。

今回は新しい企画での開催を予定して居りますのでご期待下さい。



母校八十周年記念に寄せて

三文会代表 十八期 秋長 政吉

母校八十周年おめでとう御座います。

想い返せば、一九五一年（昭和二十六年）春、憧れの都立第三商業高等学校に入学が叶い、門前仲町の商店街に有った指定帽子屋さんで制帽を求め、詰襟の学生服に身を包み、共に入学を許された学友二人と、胸躍らせながら校門を潜つたのを今更の様に想い出されます。

黒の背広に黒のネクタイ、カバンを下げた三商生を生まれた森下町で見る度に、当時小学生三年頃の私はなぜか憧れの的でした。

入学当初の母校は終戦後の事でもあり、窓ガラスも所々破れ、表通りは砂塵が舞い上がり、校庭は雨が降れば水が溢れ、階段教室の地下は池の如く、冬は教室でストーブを焚き、それでも、憧れの第三商業高校でした。

入学の最初の担任教師は竹田先生。先生は初めての授業の日、教壇に立ち黒板に向かって「竹田一郎」と大きく書き、クルリと向きを替え大きく息を吸い、得意満面、私は「竹田一郎です。」と言い、「君たちの先輩で有る」と自己紹介されました。その時から三商生として学校生活が始まりました。

今までの中学学習科目には無かった、諸々の商業科目内の商業美術を担当ご指導下さった縁で

横山文夫先生のお人柄を深く知り、予てより好きだった絵の御指導もお受けしたく、先生の担当クラブで有る〔美術部〕に入部をお願いしました。

母校卒業後も横山先生との縁切り難く、横山先生に御指導と御親交をお願いし、母校三商の「三」と横山文夫先生のお名前の「文」を戴き、美術部の卒業部員に寄るOB会、名称「三文会」(みふみかい)を結成。以来六十余年。今日に至っても居ります。

想い返せば寂しい限りですが、恩師横山先生も御他界靈簿に入れられ、会員一同落胆この上なく一時は心の支えを失い、迷いの内に思案を致しましたが、先生の御意志である「和」を想い継ぎ、先生の奥様の優しいお心に支えられ、当三文会も以前に増して絆は強く深く現在に至って居ります。

母校八十周年の記念行事にも出席参加し、同じく六十余年に及ぶ当三文会も母校の誇りと会員一同も自負して居る次第です。

本年四月五日(日曜日)には、先生ご存命中何かと想いで多い、深川清澄庭園の池面に浮かぶ和室「涼亭」に集い、会員諸氏のさらなる親交と発展を誓いました。

当「三文会」は現在横山文夫先生の奥様に優しく見守られながら、会員一同、先輩後輩の隔てなく、和気あいあい語り合い、会員各自の諸活動と共に現代社会に居る事は、なにより自慢の親睦会だと思ひ、母校と共に年月を重ねて来た事は、更

にこの上ない誇りだと想つて居ります。

二〇〇八年 春四月

(写真は、本年四月五日開催の「三文会親睦会」於・深川清澄庭園にて)



三商剣友会の稽古会

二十七期 辻井 正巳

陽春の候の四月十二日(土)午後四時より、母校三商近隣にある深川スポーツセンターにおいて、剣友会の合同稽古会が行われた。

前校長の柴田 哲先生、同窓会事務局の柴崎晴雄氏の特別参加があり、重厚で気迫のこもった高段者らしい立会いが展開された。

参加の先輩諸兄は各区剣道連盟、実業団で活躍するとともに、剣道の普及と青少年の不良化防止のための指導者として、ボランティア活動を推進している。



武道の心得として「礼節を尊ぶ」の通り・礼に始まり、礼に終わる・激しい攻防の後には互いの健闘を称えあい、正座正礼をして稽古を終了する。シャワーを浴び、さっぱりした所で、センター内のレストランで懇親会を開く。稽古の後のビールは格別で、これがあるからやめられないと、もっぱらの風評。アルコールの量が増えるにつれ、時間のたつのも忘れ、深夜の十一時。再会を約束して解散となる。

又、剣道教育においては平成二十二年から中学校の選択科目として、剣道が組み込まれ、文部科学省、全剣連では対策にとり組んでいるとの事である。

一方我が剣道部の歴史は古く、創世期から五十年間で継続され、特に戦前は都内はもちろん関東近県にまで名声は轟いたとの事である。

剣道部出身者は四〇〇名以上名簿登録されているが、現役で稽古している方は一割弱であり、高齢化しているのが、実情である。

近年三商は少子化の波に逆らえず、入学生徒の減少と女子校化により、剣道部は廃部を余儀なくされ、未だ復帰のめどはたっていない。柴田先生には再三にわたり再開を要請してきたが、実現出来ず、誠に残念至極である。合掌

参加者

二十七日 辻井 正巳 二十八期 戸田 良治
二十九期 湯浅 誠三 三十一期 須藤 義勝

三十二期 栗田進太郎 三十二期 野口 牧生
三十五期 栗田 隆 三十八期 加藤 昭信
三十九期 矢野 康信

一 剣道の理念

剣道は剣道の理法の修練による人間形成の道である。

一 剣道修練の心構え

剣道を正しく真剣に学び

心身を練磨して

旺盛なる気力を養い

剣道の特性を通じて

礼節を尊び

信義を重んじ

誠を尽くして

常に自己の修練に努め

国家、社会を愛して

広く人類の繁栄に

寄与せんとするものである。

以上

連絡先

東京都江東区清澄三の三の三〇 辻井 正巳
TEL・FAX 〇三(三六四一)二七三九

女子バレーボール部

二十六期 岩瀬 和子(旧姓坂口)

十八年発行の同窓会報の中で、柴田校長先生が、部活動の実績報告を書かれていらつしやいました。その中で女子バレー部が大変活躍されている事を知り、とてもうれしく思い、女子バレー部が創設された時のことを書いてみようと思いましたが。

昭和三十三年、私が高校二年の時でした。生徒会からの要請で「女子バレーボール同好会」として発足致しました。

男子バレー部は伝統と輝かしい実績がありましたので、生徒会としては、女子を入れてとは、おこがましくて云えなかつたのではなかつたでしょうか。

私は仲の良かった親友に「三商はいい学校だから受験しよう」と誘われました。父にその事を話しましたが、当時、父も私も「三商」のことは何も知りませんでした。父の知り合いの子供達は皆普通高校へ行っていました。父の知り合いの子供達は皆りもなく、早くお勤めがしたかったので、三商を受験しようと思いましたが。中学校で高校見学のバスを仕立ててくれ、私は初めて三商へ行きました。小中学校の校舎と違い、屋上に時計塔のある重厚な校舎と広い校庭にすっかり魅せられました。あいにく友人は先生に無理と云われ断念せざるをえ



出町先輩を囲んで

ませんでした。三年生だけで十一クラスもあるマンモス校でしたが、荒川区は地理的に遠く、男子二人、女子一人が受験し、運よく(?)三人とも入学できました。

中学校の頃から多少テニスをやっていたので、テニス部へ入部しました。当時、現天皇陛下と皇后陛下がテニスが縁で結ばれたとあって、新入部員は多勢いました。初めはラケットの素振り練習の毎日で、やつとボールが打てるようになって、身体検査で急に運動したので心臓がオーバークンになり、要精密になってしまいました。担任だった山脇先生(世界史の先生)に「運動部

はよしたほうがいい」と云われ、余儀なく書道部に移りました。

二年生になった時、若くして亡くなられた社会部の木村貞代さんがバレーボールをやらないかと誘われ、健康上に問題がなかったので快諾致しました。生徒会役員で三年生の友松さんを責任者とし、木村貞代さんを長として、二年生四人、一年生が三、四人でスタートし、吉岡先生は男子が主で、女子は宇梶先生が指導して下さいました。

突然、女子がバレーボールをやっているのを見て、男子のコーチに來られた先輩方は、驚かれています。だんだん女子にもコーチをして下さるようになり、その後試合にも同行して下さいました。翌年一年生が五、六人入部してくれ、当時は九人制でしたので、やつとメンバーが揃いました。

宇梶先生が東雲の日東紡へ練習に連れて行って下さったことも、いい思い出です。一応、試合にも出ましたが、当然結果は書くに及びません。当時は中村学園が一番強かったと思います。

昭和三十三年アジア大会男子バレーボールの試合が駒沢で行われました。二十期の出町豊先輩が選手として出場されるので、ご挨拶に來校された時、吉住先生、宇梶先生と女子だけで写真を撮らせて頂きました。友人達にとってもうらやましがられたことを覚えています。

試合当日は、全校生で応援に行ったように思い

ます。とても陽射しの強い日で、屋外だったため、陽に焼けてしまいました。

初めの頃の部員さんが現在の活躍を知ったら、驚き、きつと喜ばれることでしょう。

ますますのご活躍を期待しております。

そろばん日本一

二十八期 吉澤 靖子

昭和三十五年暑い八月一日の全国大会にむけて珠算部選手一同、一に練習、二に練習、三、四がなくて、五に練習とわからないような合言葉をもとにして、暑さに馴れようと、部室を閉め切り、マフラーを巻き、厚着をし、机をななめにし、ムツとする暑さの中で、練習に励みました。(大会当日の大学の机が少し斜めの処あり)

訪ずれた方があきれたような顔をしていました。

三商に入学した当時、小学生の時からやっていたそろばんからもう離れたく、六時間目が終わりと早く帰ろうと廊下に出ると、上級生が待つていて「練習」「練習」

「はい」といわざるを得なく、後姿をすくすくごついていきました。それを見た同級生が「お兄さん?」「ちがう」とのことばのやりとり…。

こんなことが何日か続きそろばんから離れられないと悟り、早朝、放課後、夜と練習を続けました。「ただあの上級生は、私の心を見透かし、授業を終わるまで受けず、廊下で待っていてくれたのでしょうか？」

三年の時、担任の斉藤先生が、掃除当番の私を見て、「田中、早く部室へ行け、お前の掃除当番は、俺がやる」と、友達「やだ、先生ならいない！」私は「先生！もう練習はしたくない、掃除の方がいい」と口答えをしたと覚えています。事実、もうこれ以上、指が動かない程、一日に七、八時間も練習していました。おしゃべりをしながら掃除をする方が楽だったんです。

先生が本当に掃除をしてくれたかは、あの世に行って聞いてみないとわからなくなりました。

成果がでて、団体戦で一位となり、京橋？あたりの「オリンピック」？で祝勝会が開かれ、食べつけないご馳走をいただきました。

今迄の珠算部の実績と、いろんな方の支えがあつて、得たものだという事を、後年になって知り得ました。

ありがとうございました。



《三商同窓会報》原稿募集

原稿募集要項

三商同窓会の活動、事業の一環として「三商同窓会報」の発行(年一回)があります。

これは会報を読めば同窓会がどのようなことをしているか、また卒業生がどう活躍しているかが良くわかります。

今年創立八十周年を記念して、特別号が発行されましたが、例年はA4判で十六頁ほどのものですが、大変中味の濃い会報だと思っております。

毎号各方面で活躍されている方々、あるいは現役を引かれた方々の充実した生活ぶりなどの投稿があります。

同窓会報委員会ではよりよい会報をめざしておりますので、会員の皆様の更なる投稿をお願いします。

投稿に際しては、最近パソコンによるものが多いので出来ればフロッピーか、メールにて送ってもらえると幸いです。

●内容

特別定めはありませんが、会報にふさわしいもの長編につきまちは次号に続く場合があります。

●締切

毎号(毎年)五月末日

●発行

七月一日

●送り先

三商同窓会事務局

〒一三〇〇〇〇二一

東京都墨田区業平一十七ー五

杉本 光男

●電話

〇三―三六二三―二一八五

●ファックス

〇三―三六二三―一八五九

メールアドレス:

s-teruo72@nifmail.jp

三商生徒会を顧みる

輝いた時代

二十四期 福原 伸行



国民（小）学校入学を前にした春、三月十日に、あの東京大空襲があった。父親は応召して戦地におり、家は若い母とわたし、歩き始めた弟の三人だった。その夜は向こうの夜空が真っ赤になって、いるのを家の前でみた。

翌日「沢山のひとが亡くなった」と母から聞かされた。間も無く父の郷里（現南房総市）へ疎開をし、そこで一年生になった。

わたし達の年代は誰もがこの経験をしているが、この年の八月十五日に日本国は無条件降伏をして戦争が終った。世の中が大きく変わって行くことが、その足音が子供にも何となく分かった。学校で使う教科書が一斉に替えられた。製本前の大きな版のまま配られたものを、母がページを

合わせて折り畳んで切り揃え、針と糸で綴じてくれた。中には何文字か何行か墨塗りがあったりもした。

父が復員して伯父たちと「ふね（魚業）」を始めた。五、六人乗りでやる沿岸の漁で、棒受網漁でアジを獲ったり、時にはサメを突いて来たりした。

小学三年生のはじめに東京に戻った。都心はまだ空き地（焼け跡）がいっぱいあった。空き地を掘るのは楽しい遊びだった。整理が進んでいなくて、水道などは鉛管を叩き潰しただけで埋められていた。空き地に子供が集まって遊ぶ。年嵩の子が掘り出した鉛管に何かで穴を開けると「噴水」になった。みんなで暗くなるまで水遊びをした。終わりににはまた鉛管を叩いて潰し、水を止める。そんな遊びが東京のご真ん中で出来た。

父の仕事は魚関係で、昭和二十五年に復活した魚河岸に店を持つことができた。六年生から中学生になり、学校の休みには必ず手伝いに行っただの。

三商の入試は当時の都立商業高校の中で、かなり厳しいものだった。昭和二十九年の入学生は四百五十人、男子三百五十人に女子百人、五十人

クラスが九組あった。真ん中に時計塔をはさんでどっしりと構えた校舎は、何とも頼もしく、びっくりするほど広いグラウンド（よく大雨で水没した）とともに高校生活を支えてくれた。

かなり窮屈な中学生生活を送ったわたしにとつて、三商は自由と希望に満ちた新大陸といえた。勉強はそれなりに頑張ったが、部活や生徒会での先輩・友人との関わりの中で、どれ程自分が成長できたか、今考えても懐かしさと有難さが込み上げて来る。若き故の寄り道と言おうか、学校の外へ手を広げて労働運動の闘士とまで真剣に話をした。自分で得たものはあったが、学校へ持ち帰るべきものは無かった。当時の三商で何が素晴らしきといつて、運動会と三商祭の「前夜祭」だろう。生徒が中心になってすべてが進められたが、顧問の先生が相談に乗ってくれる以外、学校が口出しすることはなかった。

例えばその年の運動会。秋空のもと予定通りのプログラムが終了して、あと片付けが終って、グラウンドにできたゴミの山に火が付けられ、まわりで何人かがフォークダンスを始めた。その輪はどんどんと大きくなって、火を大きく一回り囲んで、まだ大きくなるうとしていた。火に照らされたみんなの笑顔の中に先生の顔もある。あの時、あの瞬間の自分の心の充足感を今でも忘れていない。私が仕掛けた訳ではないが、必ずそうなる筈だと信じて準備を重ねた、周りからの冷やかしもあつ

だが、それを言うひとまでも仲間に入れて、長く地道な努力の結果だった。当時（その後もかなり長い間）学生・若者の集まりで、フオークダンスを組み入れることが流行ったのだが、近隣の学校から「見学申し入れ」があったほど、三商は先端をいつていたと言える。

地域の集会所などの踊り方の「講習会」を自分で探して習いに行き、覚えてきた振り付けを、昼休みに屋上で集まってくれた人たちに覚えて貰う。機材は放送部から技術係付きで貸してもらい、はじめの数人から段々多くなって定例化した。運動会の直前には百人近くになっていた。ここでダンスを覚えたみんなが火の回りに輪を作った。何々部とか、何とか会とかの組織なしで、仲間数人で始めずいぶん長く続けられた。始めから一緒にやったS君とは喜びを分け合うことができた。

実は、考えてみると、その後のわたしの人生で、あの時ほどの感動を味わったことはない、

三商卒業後、人並みに大学を終え就職、その後家業を継いで現在古稀。どの場面でも自分としては精一杯やって来たつもりだ。若い頃から地域社会への貢献が自分にとって常に「大切なこと」であり、あれこれ実行して来たのだが、あの時程の感動を味わう場面には中々行き逢えない。

わたしの三商生活は、多くの素晴らしい先生と楽しい友人に恵まれて、毎日が充実していた。勿論、普通に高校生としての迷いや悩みはあったけ

れど、自分の中で深刻な問題にはならず、何人かの人生相談に乗ったこともあった。放送部と山岳部に入ってそこそこに活動したが、これはどちら

も途中で挫折した。山岳部は親の反対だった。入学時にはサッカー部に入部した。グラウンドの東側にバラック建ての長屋があり、そのひとつが部屋だった。雨が降るとグラウンド共々水浸しになって、水が退けたあとのドロの始末は大変だった。三年生が十人、二年生が一人、一年生が三人というメンバーだったと思う。その当時の枝川町にあった朝鮮の小学校と練習試合をして負けるようなチームだった。わたしが二年生に進級する時、卒業してゆく先輩たちに、「お前が部長をやれ」と言われ、その気になったのが、その年の新入生からの入部がゼロで結局サッカー部は取り潰しになった。今では考えられないことだが、その頃の日本では野球だけがプロ・アマ共に盛んで、サッカーはマイナースポーツだった。三商サッカーが活躍している様子を会報等で知ると、ひとごととは思えず嬉しい。

一日一日が大事な青春時代だという自覚を持って過ごしていた。月並みだが「アツという間に過ぎて行く」のが青春なのだからしかたがない。だから毎日精一杯に、何でもやった。三商はそれを許してくれたし、受け入れてくれた。わたしの人生で、一番「輝いた時代」だった。

青春の光

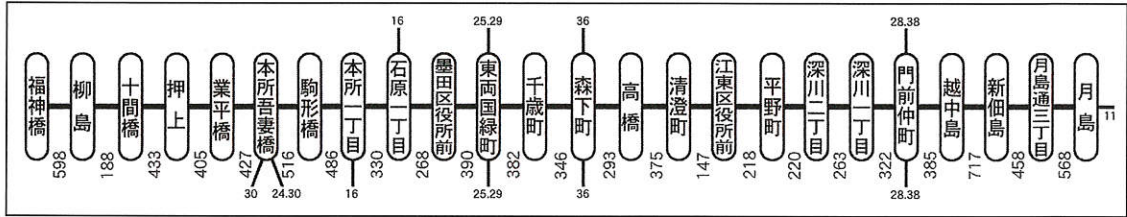
二十六期 豊田 紀雄

早春の京成線「荒川」駅のホームに立った時、一陣の風が舞い降り、緊張と期待感でふるえが止まらなかつた身体にまとわりついた。きょうから都立第三商業高等学校の生徒になるのだ。どんな教師達に教わるのだろうか。どんな生徒達がいるのだろうか。小学校、中学校は地元の子供達ばかりだったので気心は知れていた。高校ともなれば各地から来るのだから、勉強の出来る子や、運動の得意な子、芸術に優れた才能のある子供達が大量いるだろうな。

戦後すぐの頃は、この荒川土手は急拵えのバラックが林立していたのだが、今はすっかり取り払われて、数える程しか残っていない。荒川土手が小山のように思えた頃、よく遊んだものだ。春にはつくしん棒を取ったり、夏には泳ぎ、魚を手で掴んだり、秋にはバッタや赤とんぼを追いかけ、雪が降った冬は、ミカン箱を改造したソリで、土手を滑り下りたりした。夏目漱石の「坊っちゃん」を読んだのもこの土手だ。秋の台風シーズンになると、上流からとぐろを巻いた青大将を乗せた古畳や、おびただしい廃材が流れてきた。そんな台風や梅雨時になると、傘や着替えのない子供達は学校を休まなければならない。床下浸水は年中で、家がかしがないように、丸太でつかい棒をして

いた家も沢山あった。戦後の日本は全てが貧乏だったから何とも思わなかった。いつか大人になる頃には、日本中が豊かになるに違いない。それを信じていた。

高校に行ったら、先ずは素敵な教師に出会いたかった。小学校の時は民主主義教育が始まったばかりとはいえ、ひどい差別する女教師で、しらみがたかっている子供達を容赦なく叩いたり、給食費を盗んだらと罪もない子供のポケットを探ったり、本当に嫌な先生だった。ありがたいことに四年生の時にその女教師が産休で一年間休むことになった。代理の女教師が大柄で美しい人で、石川啄木の世界を教えてくれた。はじめてガリ版刷りで壁新聞を作った。それが私のガリ切りの始まりで、以後、演劇の台本、生徒会の通知、運動会の進行表等、何千枚と書くことになる。私達に文学への目を向けさせてくれたその女教師は、ある日突然近くの朝鮮学校



の校長と駆け落ちをしてしまった。大人の男女間の妖しい世界を垣間見た気がした。中学の担任教師も差別感を持ったひどい教師で、卒業してから何年も殺意を消すことは出来なかった。

二十三番、なんと素敵な番号なんだろう。都電はガタゴト揺れながらゆつくりと進む。王貞治の実家の「五十番」を左手に見て、小さな川を渡る。やがて関東大震災で三万八千人も死んだという被服廠跡を右手に見ると、すぐに両国。毎年夏になると母の田舎である房州和田浦に行く時は、この両国駅始発の汽車に乗る。森下、清澄庭園、門前仲町、越中島。新緑の鮮やかな樹々を抜けて学校に着く。堅牢な威厳のある建物が、新入生に威圧感を与える。

「今度は女の子がほしかつたんだねえ、でも又男だった。それで私の名前は勇です。「妹尾勇」もの静かな色白の担任教師はそう自己紹介した。それからおもむろに手を後ろに組むと漢詩を吟じた。

渭城の朝雨軽塵を浥す
客舍青青柳色新たり
君に勧む更に尽くせ一杯の酒
西のかた陽関を出づれば
故人無からん

やせた身体からは想像出来ない張りのある美声だ。真面目でユーモアがあつて博識の教師にクラ

ス全員が魅入られた。教師も素晴らしかったが、生徒達もやさしくて、個性的で楽しい生徒達ばかりだった。あつという間に夏休みを迎えた。そして二学期に入った。剣道部の稽古がきつかったせいかどうかは分からないが、秋の検診で軽い肺病を宣告された私は、クラブ活動からは遠ざかっていた。ある日、クラスの古田勝一君から演劇部へ誘われた。

穏やかで控え目な彼は熱を込めて語る。「演劇をやると、国語も歴史も社会も、あらゆることに役立つよ。それに、演劇によって世の中を良い方向に変えることが出来るかも知れない。」戦争からこの方、貧乏はこりごりだ。ボーイラーマン兼工場管理人の祖父の勤務する町工場の管理室六畳一間に、家族八人が折り重なるように生活していた。暮らしから脱出することが出来るかもしれない。演劇の力つていうのはすごいんだなあ。演劇部の部室は、校舎のはずれの地下にあった。映画部と社会部と演劇部の三つの部室が薄いベニヤ板で仕切られており、一年中ジメジメして、裸電球がポツンと一球だけ点いているだけの暗い狭い部屋だったが、夢のような毎日だった。男女合わせて八人程の部員が、発声練習をし、台本を読み、大道具を製作した。勉強そつちのけで部室にとじ込もりになった。あらゆることが新鮮で刺激的だった。学校の成績はたちまち落ちていった。部活が早く終わった時は門前仲町の鯛焼き屋で大喰い競

争をしたり、土曜日は日本橋の甘味処まで歩いたりした。

秋の生徒会長選挙の時期になると、「このクラスからも誰か立候補者を出したほうが良くないかい」と妹尾先生は教室を見廻す。投票で私を選ばれ、古田勝一君や演劇部の先輩達が応援演説をしてくれたが、勿論落選。そうこうしているうちに一年が終わった。最後のホームルームでは例の詩を全員で詠った。みんな泣いた。声を出して男共が泣いた。

二年生は男女クラスになったが、演劇部の活動は益々忙しくなり、授業にはあまり出席しなくなった。修学旅行も参加せず、その代金で演劇で使うオーディオンを購入する程のめりこんでいた。と同時に、一年の時の生徒会長立候補をきっかけに生徒会活動にも力を注ぐことになった。従って生徒会長選挙にもかわることになるのだが、まわりに立候補する人物がいない。生きていく限り積極的にならなければならぬ。妹尾先生の言葉を思い出し、一年の時に応援演説で世話になった古田勝一君をかっぎ出した。人数合わせの負け戦ということは誰もが考えていた。ところが、緑化運動をスローガンにしたのが良かったのか全国高等学校アナウンス大会で優勝した吉田孝君の応援演説が良かったのか、大方の予想を裏切り、古田勝一君が二十六期の生徒会長に決定した。私は書記長を任命され、ガリ版生活から離れるこ

とが出来なくなった。

一年間の中で一番のイベント、三商祭が始まった。役員達は何日も前から家庭科室に泊り込んで売店の料理の研究やら、進行表の作成やらで疲れはピークに達している筈なのに、生徒達の喜びにあふれた顔に接した途端、疲れはいっぺんに飛んでいった。校庭の中央にうず高く積まれた材木から火の手が上がる。さつきまで見えていた満天の星は、突然の煙でかすみ、踊りの輪は大きく拡がった。あと五人目で文学少女の手を握ることが出来る。あと八人目でカモシカのような少女の手を取ることが出来る。あと十二人目で憧れの…高なる胸を更に騒がすように“オクラホマミキサー”のレコードは繰り返す。湿気を含んだ海からの風は、夜が更けるにつれてひんやりとした風になり、火照った若者達の肌にやさしく触れる。

時よ、このまま止まってくれ、誰もが願った。ふと後ろを振り向く、時計塔の三商の校舎が黒々とそびえ立っていた。(終)



都電②系統押上駅前

◆定時評議員会報告◆

五月十日（土曜日）亀戸文化センター六階第一研修室において、平成二十年度の年次定時評議員会が開催され、議案の審議に関して、活発な討議が行われました。付議議案は全六議案で、議事の内容は左のとおりであります。

●同窓会会則一部改定の件は、前年度定時評議員会決議事項に基づき、懸案でもあった全面見直しについて、専門委員会試案に係るものでもありました。理事会側の逐条的な趣旨説明により提案したところ、質疑応答に時間を費やした結果、改正案の一部は修正動議により撤回され、再審議を経て、賛否を諮った結果、承認可決された。

【主たる改正点】①第二十条関係 理事会の決議要件の引き下げは現行どおりとし、評議員会の成立要件は二分の一から三分の一へ緩和された。

②第十五条関係 役員の任期期間を明記した。

③その他、語句の整合を図り、一部文語体表現を口語体へ改めた。

次いで、第二号議案以下については、いずれも原案のとおり多数の賛成を得て承認可決されたことをご報告致します。

なお、新同窓会会則は一〇五ページにその全文を掲載致しましたので、ぜひともご一読を下さいますようお願い致します。



●報告事項

(一)平成十九年度事業報告及び(二)同会計報告の承認の件は、いずれも賛成多数により承認可決されました。

その他の承認事項

(一)役員全員任期満了により改選の件は、予め、理事及び評議員の各候補者名を配布資料により審議検討された結果、辞任候補者(二名)を確認のうえ選出することとして、会則により、その表決の方法と議決権の個数は一票として審議、採決した結果、多数の賛成を得て承認可決されました。

次いで、約五分ほど議事は休憩に入り、新理事の中より、会長、監事、会計選出のための互選に入った。休憩後議事は再開され、事務局より、新役員とその職務担当が発表されました。

(二)平成二十年度事業計画、及び(三)同会計予算の承認の件―いずれも賛成多数により承認可決されました。

◆昨年度の事業報告について

平成十九年四月二十一日 母校創立八十周年記念行事への支援要請に対応のため、「趣旨書」の作成配布決議。

五月十二日 定時評議員会開催

四月 八日 入学式

七月 一日 第四六号「三商同窓会報」の発行

十月 六日 第十五回「東京校歌祭」参加

十月七、八日 母校「三商祭」(文化祭)

十月二十日 O B団体交流会開催（於・両国東天紅）

平成二十年一月十二日 母校創立八十周年記念行事の挙行（於・ティアラ江東）

二月 十日 役員新年会（於・八重洲富士屋ホテル）

通期の理事会開催回数は、前年度においては、全七回開催致しました。

以上のほか、従来どおり、恒例的な母校行事（三商祭十月五日～六日及び

卒業証書授与式・入学式）に各理事が参席または見学を行いました。

◆今年度の事業計画について

(一) 年次定時評議員会の開催 平成二十年五月十日（土）実施済み。報告並びに承認事項は前記のとおりであります。

(二) 委員会活動と再編成について

新年度にあたり、組織をさらに充実させるため、成果、効率について見直しを行い、委員会の統廃合、再編成を視野に入れ、六月十八日の理事会において、新たに左のように組成されました。

校歌祭委員会	六名
同窓会報委員会	八名
東京三商会委員会	十一名
総務委員会	十四名

(三) 「同窓会報第四十七号」の発行

今号は、母校創立八十周年記念行事が挙行されたことにちなみ、「特別号」として編集企画致しました。

(四) 第十六回東京校歌祭への参加

日時・会場 平成二十年十月四日（土）日比谷公会堂にて開催されます。

（出演時間午後三時三十分）

(五) 定時総会の開催

日時・平成二十年十一月七日（金曜日）午後六時三〇分より開催いたします。

(六) 新年会 平成二十一年二月上旬の予定です。

同窓会 総会のご案内

●日時

平成二十年十一月七日（金）
午後六時三十分

●場所

すみだ産業会館「サンライズホール」
（JR錦糸町駅南口前丸井八階Cホール）

●会費

五千元
（但し第七十四期、第七十五期卒業生の皆さんは無料ご招待）

総会は、会務報告・記念講演・祝宴までを企画した交流同窓会です。

第十六回

東京校歌祭の

ご案内

●日時

平成二十年十月四日（土）
午後二時受付

●場所

「日比谷公会堂」にて
反省会は午後四時より、日比谷にて開催します。

三商祭のお知らせ

十月十日（金）・十一日（土）



平成 19 年度会計報告及び 20 年度会計予算

平成 19 年度 会計報告 (A) (平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日)		平成 20 年度 会計予算 (B) (平成 20 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日)		前年度比 (B-A)
収入の部 円		収入の部 円		円
前年度繰越金	9,933,573	前年度繰越金	10,701,919	768,346
75期会費	1,259,160	76期会費	1,850,000	590,840
運営協賛金	2,838,000	運営協賛金	100,000	▲2,738,000
利息他	15,212	利息他	10,000	5,212
合 計	<u>4,112,372</u>	合 計	<u>12,661,919</u>	
支出の部 円		支出の部 円		円
理事・評議員会	272,686	理事・評議員会	300,000	27,314
総 会	0	総 会	300,000	300,000
OB 団体交流会	3,232	OB 団体交流会	0	3,232
校 歌 祭	108,310	校 歌 祭	150,000	41,690
同窓会報	353,520	同窓会報	500,000	146,480
慶 弔 費	70,000	慶 弔 費	100,000	30,000
活性化活動費	0	活性化活動費	100,000	100,000
母校部活動支援	200,000	母校部活動支援	200,000	0
就職活動支援	59,010	就職活動支援	100,000	40,990
通 信 費	129,300	通 信 費	30,000	▲99,300
事 務 費	33,162	事 務 費	50,000	16,838
支払手数料	5,010	支払手数料	5,000	▲10
卒業証書入れ (筒)	115,840	卒業証書入れ (筒)	150,000	34,160
創立 80 周年寄付	2,000,420	※特別会計予算	943,907	(前年度比せず)
合 計	<u>3,344,026</u>	合 計	<u>2,928,907</u>	▲415,353
次年度繰越金	10,701,919	次年度繰越金	<u>9,733,012</u>	▲968,907

特別会計 (周年記念事業)743,907 円

一般会計(76期会費) 200,000 円

収入合計 943,907 円

支出合計 0 円

残 高 943,907 円(※)

平成 20 年 4 月 1 日

会 計 辻 井 正 巳 ㊟

会 計 田 端 彰 ㊟

監 事 浅 野 修 一 ㊟

監 事 鶴ヶ谷 義 徳 ㊟

監 事 古 田 勝 一 ㊟

平成二十年
役員・評議員名簿

役員

二十五期	会長	柴崎晴雄
二十四期	副会長	尾坂富美子
二十六期	副会長(事務局)	岩瀬和子
二十九期	副会長	土方敏之
三十一期	副会長(事務局)	三浦康二
二十期	理事	河原啓介
二十一期	理事	富張勝三
二十二期	理事	篠崎清
二十六期	理事(事務局長)	杉本光男
二十八期	理事(会計)	田端彰
二十八期	理事	伊澤宏祐
二十八期	理事	鷺嘉雄
三十期	理事	藤倉久男
三十七期	理事	平野淳一
四十八期	理事(会計)	渡辺秀明
二十六期	監事	古田勝一
二十七期	監事	辻井正巳
三十四期	監事	三川廣志
十二期	顧問	大嶽清
十九期	顧問	木戸隆吉

評議員

二期	大平龍夫	二十四期	福原伸行	三十八期	三浦秀一	五十七期	久保田武則
四期	黒須康介	二十四期	岸和子	三十九期	吉崎正俊	五十八期	風見修一
五期	好川榮一	二十五期	井上嘉久	四十期	磯波孝	六十期	小柳輝高
八期	平田助治	二十五期	小野田良子	四十一期	早船恵三	六十一期	安藤隆
九期	安藤興一	二十六期	清田実	四十一期	早森本仁	六十一期	斉藤精一
十一期	中島健作	二十七期	水戸部晃	四十二期	木内茂二	六十二期	村山亮
十二期	吉岡鶴義	二十七期	森達夫	四十二期	早船裕子	六十三期	山下裕美子
十三期	今関隆一	二十八期	小林慎典	四十二期	磯村弘美	六十四期	佐々木信次
十四期	大江高志	二十八期	吉澤靖子	四十二期	小久保佳代	六十五期	小野崎寿代
十四期	江田栄介	二十九期	柳田保之	四十三期	木戸克明	六十六期	平井宏明
十六期	森川山麓	二十九期	濱地昭雄	四十四期	大島敏生	六十七期	秋元真一
十六期	金田耕一	三十期	落合清秀	四十五期	長島昭洋	六十八期	柿澤愛
十七期	飯田幸男	三十一期	今泉清	四十六期	吉富孝行	六十八期	田所可織
十七期	田中恒吉	三十一期	亀田八千代	四十七期	加藤美喜雄	六十九期	熊谷真由美
十八期	児玉透	三十二期	片山健	四十七期	藤波喜代美	七十期	今井小百合
十九期	伊藤昭雄	三十三期	歌門俊雄	四十九期	宇田川浩一	七十一期	奥山岳
十九期	小野正實	三十三期	佐久間保人	四十九期	星名恵子	七十一期	熊谷美子
二十期	菅波良司	三十四期	落野幸男	五十期	土谷武	七十二期	梶山宜弘
二十期	富岡輝彦	三十四期	佐藤幸子	五十一期	柴崎孝雄	七十二期	深田顕
二十一期	平林慶雄	三十五期	宮下恵介	五十二期	大澤武志	七十三期	木村海渡
二十一期	浅野修一	三十五期	長谷川誠	五十三期	遠藤賢一	七十三期	桂田良
二十二期	才木健之	三十六期	中川竹治	五十四期	福士智	七十四期	土田竜也
二十二期	越路正巳	三十六期	林祥一	五十四期	北代淳子	七十四期	真利子高志
二十三期	鈴木進輔	三十七期	小山晴美	五十五期	初山優	七十五期	上岡未来
二十三期	小暮清	三十七期	梅原典子	五十六期	篠原彰	七十五期	磯邊学

運営協賛金

(平成20年1月12日)

単位：円

期 別	平成12～19年度	平成18年度(80周年)	平成19年度(80周年)	合 計
3 期	0	30,000	—	30,000
4	100,000	—	—	100,000
5	20,000	—	—	20,000
6	60,000	—	—	60,000
7	40,000	—	—	40,000
8	70,000	—	—	70,000
9	60,000	—	—	60,000
10	65,000	—	140,000	205,000
11	15,000	—	—	15,000
12	65,000	—	110,000	175,000
13	20,000	—	—	20,000
14	60,000	60,000	50,000	170,000
15	60,000	—	—	60,000
16	60,000	—	50,000	110,000
17	120,000	—	100,000	220,000
18	30,000	—	50,000	80,000
19	455,000	—	—	455,000
20	45,000	—	150,000	195,000
21	45,000	—	—	45,000
22	45,000	—	220,000	265,000
23	—	35,000	—	35,000
24	100,000	—	100,000	200,000
25	60,000	—	100,000	160,000
26	65,000	—	100,000	165,000
27	—	—	107,000	107,000
28	60,000	—	100,000	160,000
29	40,000	—	117,000	157,000
30	—	—	100,000	100,000
31	—	—	30,000	30,000
32	—	—	30,000	30,000
34	113,585	—	—	113,585
生徒会役員OB	15,000	—	—	15,000
会計人会	—	—	50,000	50,000
三珠会	—	—	50,000	50,000
三水会	—	—	100,000	100,000
三文会	—	—	50,000	50,000
さんたご会	—	—	30,000	30,000
団 体 計	1,888,585	125,000	1,934,000	3,947,585
個 人 計	—	—	854,000	854,000
合 計	1,888,585	125,000	2,788,000	4,801,585

創立八十周年記念行事 募金のお礼ご挨拶

実行委員長 木戸 隆吉

八十周年記念行事に対する母校愛の現われご高配ありがとうございます。会長冥利に尽き、はなはだ感謝で一杯です。

創立八十周年記念事業協賛金「個人分一覽」(平成二十年一月十二日現在)

三期	田中 徳治	五〇、〇〇〇円	深瀬 啓之	三、〇〇〇円	岩瀬 和子	一〇、〇〇〇円
十期	帆足 誠	一〇、〇〇〇円	中村 稔	三、〇〇〇円	杉本 光男	一〇、〇〇〇円
十二期	柴田 榮一	一〇、〇〇〇円	黒子 晃	三、〇〇〇円	渡辺 照夫	一〇、〇〇〇円
十四期	橋本 武	二、〇〇〇円	木村 隆幸	三、〇〇〇円	藤本 和正	二、〇〇〇円
十七期	加藤勇次郎	二、〇〇〇円	鈴木 栄子	三、〇〇〇円	加藤 健次	二、〇〇〇円
十九期	出口 吉昭	二、〇〇〇円	大塚幸三郎	三、〇〇〇円	野堀 秀治	二、〇〇〇円
二十一期	川島 昭治	一〇、〇〇〇円	山名 康之	三、〇〇〇円	柴田 彰洋	二、〇〇〇円
二十三期	鹿倉 謙蔵	一〇、〇〇〇円	青木安規子	三、〇〇〇円	岡田 礼子	二、〇〇〇円
二十五期	柴崎 孟	四、〇〇〇円	篠崎 清	一〇、〇〇〇円	青代 元克	二、〇〇〇円
二十七期	小山 猛	二、〇〇〇円	大石傑一郎	一〇、〇〇〇円	辻井 正巳	一〇、〇〇〇円
二十九期	木戸 隆吉	一〇〇、〇〇〇円	尾坂富美子	一〇、〇〇〇円	伊澤 宏祐	三〇、〇〇〇円
三十一期	浅野 修一	三〇、〇〇〇円	鬼澤 好男	五〇、〇〇〇円	田端 彰	三〇、〇〇〇円
三十三期	平林 慶雄	一〇、〇〇〇円	柴崎 晴雄	五〇、〇〇〇円	柳田 保之	三、〇〇〇円
三十五期	富張 勝三	一〇、〇〇〇円	宝寄 浩一	三〇、〇〇〇円	柳田 道子	三、〇〇〇円
三十七期	間淵 康仁	七、〇〇〇円	府川 幸治	一〇、〇〇〇円	藤倉 久男	一〇〇、〇〇〇円
三十九期	大類 弘子	五、〇〇〇円	町田 照夫	一〇、〇〇〇円	三川 廣志	一〇、〇〇〇円
四十一期	近藤 寿男	三、〇〇〇円	秋長カヨ子	一〇、〇〇〇円	三十七期 平野 淳一	二、〇〇〇円
四十三期	中川 満	三、〇〇〇円	増田 秀子	八、〇〇〇円	四十八期 渡邊 秀明	一〇、〇〇〇円
四十五期	石川 幹也	三、〇〇〇円	山下 宗宏	二、〇〇〇円		
四十七期	古橋 由次	三、〇〇〇円	古田 勝一	五〇、〇〇〇円		
四十九期	尾見 泰男	三、〇〇〇円	後藤 信二	三〇、〇〇〇円		
五十一期	天野 久幸	三、〇〇〇円	高橋 有	一〇、〇〇〇円		
二十六期						
三十二期						
三十四期						
三十六期						
三十八期						
四十期						
四十二期						
四十四期						
四十六期						
四十八期						
五十期						
五十二期						
五十三期						
五十四期						
五十五期						
五十六期						
五十七期						
五十八期						
五十九期						
六十期						
六十一年						
六十二年						
六十三年						
六十一年計						
六十三年計						
八五四、〇〇〇円						

※別表の各期別・グループ別「運営協賛金一覽表」(P.32)のうち、十九年度分を参照下さい。

創立 80 周年記念行事会計決算報告書

収入総額	7, 6 2 4, 6 4 6 円	(※90 周年記念行事会計へ繰り越す)
支出総額	6, 5 1 5, 6 7 0 円	
決算残額	※1, 1 0 8, 9 7 6 円	

[収支明細]

(単位円)

収入項目	予算額	収入額	増 減	摘 要	
公 費	600, 000	622, 773	22, 773		
P T A	1, 350, 000	1, 504, 588	154, 588	三商祭バザー収益含む	
東京三商会	2, 000, 000	2, 000, 000	0		
同窓会	2, 000, 000	2, 000, 000	0		
祝賀会	2, 150, 000	1, 493, 680	▲656, 320	304 名	
雑収入	0	3, 605	3, 605	利息	
収入合計	8, 100, 000	7, 624, 646	▲475, 354		
支出項目	予算額	支出額	残 額	摘 要	
総 務 費	消耗品費	90, 000	5, 290	84, 710	コピー代等
	印刷費	200, 000	264, 894	▲64, 894	案内状、式次第、挨拶状等
	通信運搬費	105, 000	179, 320	▲74, 320	郵券・運送料
	会議費	10, 000	0	10, 000	
	諸雑費	100, 000	4, 330	95, 670	協力者謝礼
記 念 品	記念誌	1, 680, 000	2, 310, 000	▲630, 000	@1,650×1,400 部
	記念品	1, 050, 000	1, 349, 090	▲299, 090	ストラップ (1000) 校歌 CD (1200)
	記念菓子	300, 000	300, 840	▲840	紅白饅頭 (1000)
式 典 費	会場費	420, 000	310, 085	109, 915	会場使用料
	式典用生花	30, 000	31, 500	▲1, 500	
	看板	50, 000	33, 000	17, 000	
	アトラクション費	300, 000	195, 391	104, 609	
	諸雑費	150, 000	157, 648	▲7, 648	胸章・名札・紙袋等
祝 賀 会 費	会場費	80, 000	85, 350	▲5, 350	
	飲食費	2, 150, 000	1, 183, 832	966, 168	
	アトラクション費	200, 000	104, 000	96, 000	
	諸雑費	50, 000	1, 100	48, 900	振替用紙印刷代
予備費	1, 135, 000	0	1, 135, 000		
支出額計	8, 100, 000	6, 515, 670	1, 584, 330		

平成 20 年度 教職員異動者一覧表

(平成 20 年 4 月 1 日現在)

転出・退職者等					転入・採用者等				
課程	転退別	教科等	氏名	転出校	転採別	教科等	氏名	前任校	備考
	転出	校長	柴田 哲	都中部学校経営支援センター	転入	校長	天野 光芳	教育庁	
全日制	退職	国語	遊佐 邦子	農産高校 非常勤	転入	国語	石崎 博美	田無工 全	
全日制	転出	国語	久保田好生	大山 全	新採	国語	福屋紗央里	新採	
	転出	地歴	松本 桂	大江戸 定					
全日制	転出	数学	井澤 信紀	武蔵高付属中	新採	数学	柴田 長正	新採	
全日制	任用替	保体 再任用	山本鐵五郎	再雇用	転入	保体	熊原 誠一	東 全	
全日制	転出	保体	土田 常雄	大島 定	転入	保体	杉村 悟	本所 全	
全日制	転出	商業	亀井光太郎	つばさ総合 全	転入	商業	渡辺 利之	江東商 全	主 幹
全日制	転出	商業	舟屋 佳子	橘 全	転入	商業	杉山 康子	荒川商 定	
全日制	転出	商業	半澤 孝明	赤羽商 全	転入	商業	豊田 正明	荒川商 定	
全日制	転出	商業	高橋 直子	荒川商 全	転入	商業	椎名 利男	葛飾商 全	
全日制	転出	商業	中嶋 孝浩	五日市 全	転入	商業	川口喜代子	荒川商 全	
全日制	転出	商業	山中 慎子	新荻窪 定					
全日制	転出	商業助手	柴崎美恵子	杉並総合 全					
全日制	退職	商業 再雇用	大根 和夫	退職	任用替 保体	保体	山本鐵五郎	第三商 全	再雇用
全日制	退職	数学 産育代	清水 学	退職	転入	理科	永田 洋	雪谷高 全	非常勤教員
定時制	転出	商業	大木 康吉	大田地区開設	転入	数学	小出 七恵		産育代教員
	転出	担当係長	齋藤 孝仁	一橋高企画管理係長	転入	担当係長	久保田真理	建設局	
	転出	事務	廣瀬 洋子	しいの木養	転入	事務	須賀 英行	墨田川高	



三商の現況が判ります。

ホームページアドレス

www.daisanshogyo-h.metro.tokyo.jp/



2008年6月6日

三商体育祭

新任・退任のごあいさつ



新任のごあいさつ
都立三商同窓会
第六代会長
柴崎 晴雄（二十五期）

洞爺湖サミットも終え、北京五輪近しなど、喧騒なメディアの報道から目が離せない昨今の情勢にあつて同窓生の皆様にはご健勝のこととお慶び申し上げます。

本年度の年次定期評議員会が去る五月十日（土）に開催され、同窓会役員全員は任期満了を迎え、改選の結果、新たに理事及び評議員が選出され、木戸隆吉会長の後を襲い、不肖私が新会長として選出されましたので、紙上をお借りしてご挨拶を申し上げます。

私の卒業期は第二十五期、即ち昭和三十三年（一九五八）年三月の卒業であります。在学当時を顧みますと、第二学年を修了するや否や、好むと好まざるとに拘わらず自営、進学、就職のいずれかの進路選択を迫られました。

この前年（昭和三十一年）の「経済白書」には、『もはや戦後ではない。我々は今や、異なった事態に直面しようとしている。・・・（以下略）』と宣言されたものの現実には散在する戦火罹災の惨跡を見る限り、戦後は放置されたままであります。早

期復興が望まれるなか、私は氷河期の絶頂ともいわれた就職を志望しました。

しかしながら、幸い私達は、言わば母校のブランドという連帯保証（一種の特急券）のもと、景気低迷期にあつても、容易に内定を得られたことから、母校、恩師への恩義を忘れることは出来ません。三商のブランドは不滅でした。

何時やら気づいた頃には同窓会の理事評議員に任じられ、確か創立五十周年の祝賀会（於・九段会館）でのこと。岡田一郎会長（当時）との次のような談話の機会を得て意外な接点を見出したことがありました。

会長 「あなたは就職先はどこ？」

柴崎 「東京建物です。」

会長 「というと、小池光男さんが社長でしょ？」

柴崎 「よくご存知ですね？」

会長 「小池さんが富士銀行押上支店長の頃に、銀行の得意先として懇意だったもので。小池さんは旧制宇都宮中学卒で銀行の筆頭常務にまで昇進した人。それらの経歴を経て東建の社長として赴いたんでしょう？」と。

東京建物の入社式で小池社長との昼食会があり、「温故知新」について語られたことが、モチーフとなり、以後折にふれ実務会のツールとして参りました。

因みに母校三商の在校生諸君は、周知のとおり一階図書室の壁面に「温故知新」の清田榮一先生の直

温故知新

創立四十周年記念
清田 榮一

筆になる書（創立四十周年記念日にしたためられた由）が掲出されています。いまや超長期成長期といわれたものの、ここへきて景況の先行きが不透明に急変しております。

しかしながら、今春卒業し進学・実務界への就職にそれぞれ巣立つて行かれた第七十五期生百八十名の諸君、殊に就職クラスは、かつてのバブル期並みの合格率にて早期に就職先が内定していたとのこと。誠に同慶にたえません。

今や実社会に巣立つて行くビジネスマンに不可欠の常識として、環境問題に発端した「改正環境（CO₂）条例」の成立、コンプライアンスの遵守、内部統制規則といった縛りがあることにも意を注ぐ必要があります。

加え、学校経営も今や地域密着型を志向する傾向にあつては、各種法規法令の新施行、改正動向を見極め、この地域でのグローバル企業、例えば対岸の「IH1」と地域密着の志向も視野に入れ、環境規制に対応するのはどうでしょうか。

同窓会と致しましても微力ながらシステム構築の枠組み作りとか、改善活動のお手伝いを惜しみませんし、同窓会の責務であろうかとも考察し、提案致します。

最後に加え、財団（東京三商会）について一言申しますが、新年度の委員会活動の一部を統合、再構築し、財団運営上の課題や機能の活性化を図る

ため初期のビジョンに立ち返るため「東京三商会委員会」を新設しました。

同窓会はあくまでも懇親団体であります。恒例の各種交流会活動が各専門委員会により計画・実

行されます。同窓会員の皆様のご参集を得て、交流を深め、懇親団体として校風の品質維持に努めたいと願うものであります。

温故知新は、次代の「創立九十周年」、「百周年」



退任のごあいさつ
都立三商同窓会
第五代会長
木戸 隆吉 (十九期)

地球の温暖化、食料、石油の高騰と、世の中が大きく変わろうとしています。同窓生の皆様には如何がお過ごしでしょうか、お伺い申し上げます。

さて、私事去る五月十日の理事評議員会に於いて、会長を辞した後任に二十五期卒の事務局長を担当された「柴崎晴雄氏」が第六代会長に就任いたしましたので、私同様お引き立てと、ご支援ご協力の程お願い申し上げます。

振り返れば、平成十五年春、理事、評議員会で事務局の「土谷武先生」五十期卒がご転任になられ、同窓生教職員が皆無となり、必然的に理事に運営を任せられて、茲に創立以来始めて本来の同窓会の姿に立ち戻ったのであります。その席上私は脳梗塞の後遺症で現役の副会長を務め、当日辞表を出しておりましたが、第四代会長「大嶽清氏」の補佐をして

おりました関係上、名前だけでもいいからと、たつての推挙に断り切れず、万が一の事態も考えてしっかりと副会長さん三名を選んでいただければという条件で、お引き受けいたしました次第です。

在任中は、理事、評議員、諸先輩、関係各位様のご助言、ご協力によって、再構築され、学校の発展、同窓生の交流に貢献出来たものと確信しております。特に今年一月十二日(土)は、立派な三商史にも残るすばらしい「創立八十周年記念行事」が出来ました事は、正に快挙であり、関係各位様に厚く御礼申し上げます。又その節お願い申し上げました各期に対しての協賛金や、個人としての拠出金のご寄付も、目標を上回る応募金を頂き、只々感謝の念で一杯です。

中には、千葉の柏市在住の二十七期卒の「椎名瑞恵様」より、祝賀会には何かと費用が入用でしょうからと、お祝金を壱万円送付下され、別に事務局宛に金壱万円送金された事、誠に有難く、母校愛の崇高なる精神に、涙が出る程嬉しく頭の下がる想いが致しました。

次に三商の十年後には、今後発展途上にある豊

洲、晴海の人口増加に伴う保育園児の待機数が、江東区で三百五十名、中央区で二百名と聞いております。三商もその時期に相応しい魅力ある学校を目指し、同窓会としても逐次学校の発展を願い、内容の充実を図らなければなりません。幸いに柴崎会長を始め、各理事もすばらしい卓越した役員さんが継承していく限り、学校は榮え、同窓会は益々発展していくものと信じます。

これからの同窓会は未だ開催されていない同期会にお手伝いをして、毎年一期、一回を目標にして輪を広げていく事が肝心と心得ます。尚卒業生の数も、前校長「柴田 哲先生」がお忙しい中いろいろな資料を基に調べた結果、平成二十年五月一日現在二万五千七百七十六名と判明致し、そのご苦労に感謝申し上げます。

最後に、五年間何かと江東区の施設の利用にお力添えをいただきました同期の江東区議会議員「川名省三様」に紙上をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。都立三商の発展と、同窓生の益々の活躍とご健勝を祈念して、ごあいさつと致します。



就任のごあいさつ

第十八代校長

天野 光芳

蒸し暑い季節が到来しました。卒業生の皆様には、ますますご健勝にて、ご活躍のこととお慶び申し上げます。また、日頃より母校の教育活動にご理解・ご協力・ご支援を賜りまして心より厚く御礼申し上げます。

さて、私こと、このたび、四月一日付をもって、第十八代東京都立第三商業高等学校長に補せられました。前校長柴田 哲先生をはじめ、歴代校長先生が心血をそそいでこられました本校のすばらしい実績と伝統を受け継ぎ、誠に浅学非才の身ではあります。本校発展のために尽力する所存です。ですので、引き続きご支援いただければ幸いです。

ところで、本校は、創立八十周年を超えた伝統校であります。いつまでもその伝統と名譽にしがみついているわけにはいかないのが今日の状態です。それは、本校の入試倍率（昨年度一・一倍）が示すとおり、商業高校に対するニーズが年々下降傾向にあります。日本の第三次産業の就業人口は二〇〇四年の統計で六八%を超え、今後もサービス経済化が進展することから、商業教育は一層の重要性を増すばかりか、全国民に必須の学問だと訴えたいというのが正直な気持ちです。

このようなことから、私の使命は、商業教育の

さらなる充実とその内容をPRとすることであり、このことが三商の発展につながると考え、以下のよう内容で学校経営計画を策定しました。

1. 目指す学校像

(1) これからの社会における魅力ある商業高校として、地域に愛され、深く信頼される学校としての充実を図る。

(2) 生徒一人ひとりの人権を尊重しながら、基本的な生活習慣を確立し、豊かな人間性の育成と健康の増進を図る。

(3) 基礎学力を身につけさせ、生徒一人ひとりの能力や適性を引き出すとともに、自ら主体的に判断し行動できる資質の育成を図る。

(4) 日本の経済社会を担う人材を育成するため、ビジネスに関する基本的な知識と技術を習得させるとともに、専門性の深化を図る。

2. 中期的目標と方策

(1) 学校評価による学校改革の推進

各分掌や教科等における自己評価・改善と学校運営連絡協議会における生徒や保護者からの評価、生徒による授業評価等を通して、魅力ある教育課程の編成と改善を図る。

(2) 組織的対応力の向上

生徒や保護者、地域の期待に応えるために、教職員の組織的対応力を高め、課題に誠実に対応するよう、意識変革を推進するとともに、一層の服務の厳正を図る。

(3) 意図的・組織的指導体制の構築

教職員のライフサイクルを見通した計画的・段階的な人事異動をすすめ、教育活動を改善できる組織的な指導体制を構築する。

(4) 基本的な生活習慣の確立

基本的な生活習慣を確立するために、家庭との連携を強化して、きめ細かい指導により、生徒に自覚と責任を持たせるよう生活指導の徹底を図る。

(5) 特別活動の充実

学習と部活動・学校行事との両立により、豊かな人間性の育成と個性の伸張を図るとともに健康の増進に努める。

(6) 3年間を見通した進路指導マネージメントシステムの構築

1年次より自らの生き方あり方を考えさせるとともに、生徒意識調査や職業適性検査、進路先の調査、資格取得等の計画的・組織的な進路指導を通して進路保証を図る。

(7) 職業観・勤労観の育成

各種機関との連携を深め、インターンシップを拡大し、奉仕体験学習の機会を多く取り入れ、社会性の体得や起業家精神の涵養を図る。

(8) 基礎・基本の充実

読み・書き・計算・一般常識など、社会生活に必要な知識や技術を習得させるとともに、ビジネスに関する基本的な資格取得の充実を図る。

(9) 実践力と専門性の深化

自己や全体の状況を把握し、自ら課題を発見し課題解決できる能力を育成することにより、自らの進路を切り開いていく実践的な力の育成と専門性の深化を図る。

(10) 地域との連携

地元自治体、企業、商店街、各学校との連携により、ビジネススマナールの習得と、学校で学んだ知識や技術の定着を推進するとともに、ビジネス社会に通用する実践的な力の育成を図る。

(11) 教育環境の整備

自律経営推進予算を有効活用し、教育環境整備に投資していく。

3. 今年度の取組目標と方策

(1) 教育活動の目標と方策

① 基本的な生活習慣の確立

・生活指導部を中心とした全教職員による組織的な生活指導の徹底

・挨拶等の励行と奉仕体験活動による人としてのマナーの確立

・無断欠席や遅刻に対する指導の徹底
・授業規律の確立

② 教育課程のさらなる充実

・学校の特徴を打ちだした学校設定科目の点検・改善

・生徒のニーズにあつた選択授業の点検・改善
・段階的・系統的な学習指導と資格検定の点検・改善

・学校設定教科「奉仕」の指導計画の立案・実施・評価・改善

③ 学校に対する帰属意識の向上

・生徒の委員会組織を活用した学校行事（体育祭・文化祭）の実施

・3年間を見通した年間ホームルーム指導計画の策定・改善

・計画的な部活動指導と活動日数・時間等の環境保証

④ 進路指導マネージメントシステムの構築

・進路指導部と学年の連携による目標管理型の進路指導の充実
・資格取得等の計画的・組織的な進路指導の充実

・進路指導における外部評価の導入

⑤ 意図的・計画的な広報・募集活動の実施

・中学校の進路指導計画やPTAとリンクした広報・募集計画の企画・立案・実施

・招待授業や授業公開、学校説明会、中学校訪問、ホームページ等の充実

⑥ 基礎・基本の充実

・習熟度別授業の実施
・各種検定試験や統一テスト導入による学力の定着
・小テスト、補講の計画的実施

⑦ 地域との連携

・地域主催のイベント参加

・地域商店街との連携事業参加
・奉仕活動の充実

⑧ 実践力と専門性の深化

・補講による各種検定試験、論文、作文、一般受験への対応

・課題研究の内容の充実

(2) 重点目標と方策

① 教育課程の管理と学校運営

・選択科目や学校設定科目を点検・改善・精選し、学校の特徴や生徒のニーズが明確に反映できる内容への深化を図る。

・学校運営連絡協議会との連携を図り、学校運営上の課題解決の見通しや具体策を構築する。

・保護者や地域に対し、週休日に授業公開日を設定し、学校を公開する。

・教職員全体のモラルの維持と個人情報情報を適正に管理するため、服務の厳正と校内研修の充実を図り、教育公務員としての資質を高める。

②学習指導

・国語・数学・英語・商業における学習到達度を明確にした習熟度別授業を通して基礎学力の定着を図る。

・年2回の生徒による授業評価や教員相互の授業研修等を通して、授業改善を図り、学習意欲の向上や応用力を身につけさせる。

・部活動・学校行事との両立を図った放課後や週休日・長期休業日における組織的、計画的な補習を実施することにより、基礎的な検定資格取得を確実なものとするとともに、より高度な資格習得に挑戦させる。

③生活指導

・本校に対する帰属意識を高め、学校生活の満足度70%以上を目指す。

・挨拶の励行や遅刻・無断欠席・清掃・服装・頭髮指導等を学校全体の生活指導として実施し、基本的な生活習慣を確立する。

・生徒の生活時間の把握を通して、生徒一人ひとりに対応したきめ細かい生活指導を実施し、問題行

動0件を目指す。

・外部からの苦情を改善のためのよきアドバイスととらえ、スピードある誠実な対応・改善を実施し、苦情を無くす。

④進路指導

・系統的な指導計画に基づく、組織的・計画的な資格取得や相談カウンセラー機能等を充実させ、生徒一人ひとりの進路実現を図る。

・1年次の「キャリアアガダンス」と2年次の「インターンシップ」を有効に活用し、明確な進路意識を確立させる。

・進路資料閲覧室と掲示板を活用し、生徒が自ら進んで進路活動に取り組めるようにする。

・数値目標
1年次簿記検定3級以上合格率 70%以上
1年次情報処理検定3級以上合格率 80%以上
4年制・短期大学進学者 20%以上
専門学校進学者 20%以上
就職者 55%以上
進路未決定者 5%以内

⑤特別活動

・生徒会や委員会活動の指導を充実させ、ホームルームや学校行事を通して、学校生活の満足度を高めるとともに、社会性を育み、自主性・自律性を高める。

・部活動の活動日数・時間（週休日も含め）等の環境保証と整備を通して、部活動加入実績を70%以

上とする。

・地域清掃を奉仕体験活動とし、全校体制で定期考査後の日程で実施する。

・部活動の計画的・継続的な指導により、ワンランク上のステージを目指す。

⑥研究・研修

・教科や分掌における学期ごとのまとめを通して、内部評価を行い、次学期への改善計画を立案する。

・長期休業中における計画的な研修を通して、教科指導力を向上させる。

・現職研修制度を活用し、定期的に授業研究・研究協議を実施し、授業力を向上させる。

⑦広報・募集活動

・教務部を中心に全教職員で中学生や保護者に、本校の教育活動及び商業教育の将来性を周知する。

・教育活動を具体的に示したホームページ（ブログの活用）の月1回以上の更新によりタイムリーに情報を提供する。

・数値目標

中学校訪問 二〇〇校以上
中学生招待授業 一回以上
授業公開 二回以上
体験入学 三回以上
学校見学会 随時
学校説明会 五回以上
推薦応募倍率 三倍以上
学力検査応募倍率 一・三倍以上

このような学校経営計画に基づき、昨年度以上の成果を上げるために、本校教職員一丸となつて尽力してまいります。また、今後も、同窓会の皆



退任のごあいさつ
お世話になりました
第十七代校長
柴田 哲

三年前、第十七代校長として、東京都教育委員会から命を受け、校長として着任いたしました。私のような若輩者で、八十年の歴史と伝統ある三商の校長が務まるのかという不安や新たな職務に対する戸惑いなど、足が地に着いていなかったような気がいたします。

しかし、明るく元気な生徒や補習・補講で遅くまで生徒指導をしている教職員、子どもたちを暖かく見守っているPTAの皆様、そして、なんといつでも母校及び在校生のために尽力していらつしやる同窓会の方々のお姿を拝察し、「よし、自分も全力を尽くし、三商のために頑張ろう」と新たな決意を固めたことを思い出します。

また、木戸会長をはじめ、同窓会の方々には、本年一月十二日の「創立八十周年記念式典」では、大変お世話になりました。この場をお借りして、御礼申し上げます。

様からも財団三商会の役員をはじめ、学校運営連絡協議会の協議委員として昨年以上のご支援、ご協力を御願いたします。

さて、三商在職中、校長として心がけていたことを書かせていただきます。

何をおいても、一番大切にしなければならぬこと、言葉を換えますと「学校における主役」は『生徒』であると考え、職務にあたりました。学校は、生徒や教職員、保護者、地域、そして、卒業生である同窓会で成り立っていると思います。その全ての人々が望んでいることは、「生徒が立派に成長し、社会人として一人前になること」です。

その生徒は、十五歳から十八歳の多感な時期を高等学校における様々な教育活動や仲間と語らうことなどを通して、大きく成長していきます。汗と涙、失敗や少しの成功、不安と葛藤など、言葉では言い尽くせない様々な体験を経験し、大人になっていきます。

その時に、教職員や保護者、地域社会、そして同窓会が何をすべきでしょうか？何ができるでしょうか？

私は、「生徒は、無限の可能性を持った社会の宝である」と考えています。様々な経験を通して、鍛えに鍛え、社会の宝としての付加価値を身につけさせなければならぬ、いや生徒は様々な付加価値を身につけることができると考えています。

最後になりましたが、同窓会の会員皆様のご活躍とご健勝をお祈り申し上げ挨拶とさせていただきます。

そのために、私は、できる・できないは別として、常に前向きに自分の生き様を生徒や教職員、保護者、同窓会・地域社会に示す必要があると考え、校長という職務を果たしてきたつもりです。

今の社会や若者は、「できそうにないからやらない」とか「やつても無駄だからやらない」しまいいには、嘘をつく。私は、イヤです。

自分は、こう考えるから、こうやる。上手くいかなかったら、考え直して、再度挑戦する。このような、人間を育成していくことが、学校の役割と理解しています。

私は、現在、学校経営支援担当副参事として、二十四校担当しております。このことも、前向きに考え、一校の校長よりも二十四倍の喜びがあると考えております。今後も、ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

最後に、このような若輩者の私に対し、三年の間、暖かくご指導、ご助言いただきましたことに対し、御礼申し上げますとともに、三商の同窓会のますますのご発展を祈念申し上げます、挨拶とさせていただきます。

三商版

私の履歴書

【二編】

私の履歴書（一）

越路 正巳（二十二期）

はじめに

先日、柴崎同窓会会長様からの依頼で、エッセイ「共に生きる」を送稿いたしました。が、引き続きまして、このたび「私の履歴書」をテーマとする懇篤な執筆依頼がございました。時間も限られており、思いがけないことですが、これまでの人生の旅路を辿りました。ご高覧ください。

越中島からワセダの杜へ

東都の海を臨む越中島から、都の西北、ワセダの杜へ学び舎を移したのは、一九五五年の春であった。それは簿記や珠算等の実学の間から、深遠な法律論の世界への変転でもあった。学部、そして大学院の修士、博士両課程へと学問の行脚を



つづけていくなかで、わたしの裡に得たことは、ともすれば法学は、六法全書を傍らにしたパンのための学問であるかのように思われがちであるが、実は人類永遠の課題である「正義・公平」を社会の隅々にまで浸透させるといった、哲学的な理論の展開である、ということである。

折りしも時は、新憲法制定もない昭和三十年代である。日本国新憲法には、戦後の焼跡から立ち上った日本人の「国破れて山河あり」の想いが

深く込められており、わが国が民主・自由・平和の国家像を目指すことを全世界に向けて、高らかに宣言するものであった。

戦後の痕の十分に癒されていない中、理想に燃える私たち学生は、貧しい生活の不満を、当時の文部省や大蔵省へ抗議のデモをかけることで胸の内を発散させ、また度重なる原水爆の実験や全国に点在する基地へのやるかたない怒りを、アメリカ大使館へぶつけ、収斂させる時代でもあった。

そのような日々の不満や不安をうちに抱きながらも、当時、六大学野球は花盛り。神宮球場での応援は、今も鮮やかに思い出される。躍動感あふれるプレーの長嶋茂雄選手は、一躍学生野球のスターになった。また文学界では、芥川賞受賞作『太陽の季節』で、湘南の海に遊ぶヨット族のまばゆい青春像を描いた石原慎太郎は、文壇の寵児に躍り出ている。彼らの出現は、時代がうねるようになり、大きく動いていく胎動であったのだろう。

ワセダでの青春を共有した同輩のなかには、食品産業に着目し、「伊藤園」の創業オーナーとなった本荘正則君、国内路線航空会社の「全日空」を、同社社長として国際航空会社に大発展させた野村吉三郎君、政権政党である自民党参謀の青木幹雄君たちがいる。

進取な研究生生活

新憲法理念の下で、民法法、刑事法、行政法、社会法などの法律が制定・改正され、日本の社会が急激に変革を遂げていく様々な実相を目の当たりにしながら、学ぶ日々を重ねていった。法律体系のなかで中核をなす憲法・行政法のフィールドを、わたしは専攻科目として選んだ。具体的には、個人の尊厳を護る人権論および個人の経済的救済を図る損害賠償論であり、これらを究めていくことを心に決めたのであった。

わたしが席を置いた有倉遼吉教授の研究室は、幸いにして自由で進取の気風に満ちていた。研究テーマの選択や研究方向をのびやかに闊達に進めていくことができた。

また、東大、京大などの全国同世代の若い研究者仲間と研究会を結成して、月例の会を開いたり、夏には研究合宿を実施したりして、胸襟を開いて学問や人生を語り合うことができたのは、研究者として大きく成長するスプリング・ボードであったと思う。学問的にも人間的にも多大な影響を受けた仲間として、学士院会員の樋口陽一東京大学名誉教授を挙げたい。

国際的にも名だたる同氏を代表者とする国際憲法学会組織委員会は、東京で国際学会を主催した。わたしも大会会場委員長として準備に当たったが、国内外三〇〇名の参加者と共に、貴重な体

験をすることができたのは、幸いであつた。

研究を進めるに当たっては海外における理論や法制度との比較を用いたわけだが、研鑽を積む中、一定のまとまった蓄積ができたところで、私は欧米大学への留学を決意した。

最初に出願したのは、アメリカでの「表現の自由」研究の第一人者であるエマソン教授が在籍するイエール大学ロースクールである。同校は全米ロースクールの中でトップにランク付けされている名門校であり、周知の通り、クリントン元大統領夫妻が、同級生としてロマンスの花を咲かせた場でもある。しばらくして受理した採否決定のレターは、その封筒の厚みがとても薄いものであったため、不採用かもしれない、とひそかに危惧の念を抱いたが、開封してみるとそれは吉報を知らせるものであった。

欧米への留学

イエール大学ロースクールの新学期は、学部長主催のカクテル・パーティーに始まり、ゴシック様式の荘重なロースクール校舎の中庭がその会場であった。緑の木立と芝生の中庭は研究室、教室、そして寮に囲まれており、中世風の回廊で結ばれていた。

三年間の新しい生活に、希望と不安を抱いたフレッシュマンで溢れる会場では、学部長開会の挨拶

はおろか、乾杯のセレモニーもなく、定刻頃、飲み物が配られ、談笑が始まった。アルコールに頬を染めたフレッシュマンの賑やかな会話がテンポを高め、教授連も三々五々輪の中に加わり最高潮に達していった。しかし、このような新学期の楽しい序章は、過酷で厳しい学業生活の幕開けでもあった――。

アメリカの大学では講義時間は目一杯行われるので、予告の時間に廊下に集合した教授と学生は、前の講義が終了するやいなや、入れ替わりに入室し、直ちに講義が開始される。突然に或る学生が指名され、米国憲法制定の法理についての予習内容に関する幾つかの質問が浴びせかけられた。教授とその学生との質疑応答に、他の学生が加わる。その合間をぬって、教授の講義は行われるという状態であつた。開講早々、フレッシュマンにとつては、ロースクールの厳しい洗礼を受けることになったわけである。

イエール大学のキャンパスは、イギリスの貴族や、上流階級を養成してきたケンブリッジやオックスフォードを連想させるもので、想像を絶する素晴らしいものであった。

広大な敷地に聳えるゴシックや中世風の学舎に加えて、壮麗な音楽会場・美術館等の各種文化施設や、ゴルフ場・スケート場等のスポーツ施設が完備された環境は、エリート青年学徒を育成するのに必要なものはすべて完備されている。

大学内での、法学部の地位は高く、医学部と同レベルにランクされ、少人数の精鋭教育・法律家養成の職業教育を誇っている。教授陣約六〇名に対し、一学年の学生一七〇名という恵まれた条件の下で、授業は論文や判例の予習を前提にしたゼミナール形式。授業中の私語は全くなく、積極的に発言し、授業にフル参加している。ホットで真摯な学習態度は、日本での司法試験受験講座や、司法研修所・行政官庁研修所のそれと同質のものであり、卒業後は全員に、法律家への道が開かれている。

ロースクールの図書館をはじめ、大学中央図書館やその他の図書館は年間を通して毎日深夜まで開放され、学生に大いに利用されていた。

遅いニューイングランドの春は初夏と一緒にやってくる。町の雪が解け、新緑と色とりどりの花が咲きあふれるころには、最後の授業が終わり、五月末に屋外で卒業式が行われた。古式ゆかしいガウンを着用した総長、学部長、主要教授さらに卒業生が集まって、式は挙行された。ニューイングランドの静かで落ち着いた環境と禁欲的な生活風習は、学業とスポーツに専念するのに誠に好適であった。

一旦帰国して研究に従事したあと、ジェフリー教授の在職するロンドン大学、さらにトロペール教授の在任するパリ大学に留学する機会を持った。イギリスおよびフランスは共に近代法の母国

である。ヨーロッパ留学の成果を素描すると、それはアメリカの自由優先主義に対し、伝統を重んじつつ常に改革を試みながら、社会全体の調和を図る法思想ならびに社会制度を実地に学ぶことによつて、広い視野を体得できたことであろう。

平和の祈り

わが国の憲法に完全平和主義が採用されたのは、幣原喜重郎元首相をはじめとする多くの平和思想家とクエーカー教徒を含むアメリカ側憲法案準備委員との合作の賜物である。日本人先達の平和思想の内容については、それまで文献を通じて知ることができたが、アメリカ人の平和思想については、当地で具体的に見聞することができた。それは、首都ワシントンの連邦議会を議員へのインタビューのために訪れた時のことである。

連邦議会の広いロビーの一角に、ジャネット・ランキン（モンタナ）と名前を記した白い立体像が目に入った。この人こそ、一九四一年二月八日の真珠湾攻撃後の米国議会で対日戦争決議に反対した、唯一の連邦議員であった。攻撃開始一時間前に宣戦布告文書を手交する予定が、ワシントン日本大使館の怠慢と失態により事前通告ができなかったこともあり、パールハーバーの不意打ち攻撃は、米国世論を戦争一色に染めた。その中で、クエーカー教の絶対平和主義に基づいて、決然と

反対票を投じ、その後故郷で不遇な人生を歩むこととなった人が、モンタナ州を代表して議会にいま鎮座しているという事実は、戦後半世紀以上を経過しているとはいえ、アメリカ人、そしてアメリカ国家の有する懐の深さを思い知らされたのであった。

いまわが国では、キナ臭いにおいが漂っている。確固たる不戦を誓った日本国憲法は、地球と人類の生命を護る永遠の指針として成立したはずである。平和憲法に従い、世界平和の先頭に立つて行動するという約束は、何処へ逝ったのだろうか。多数の命を奪い、人々を不幸にする軍事力の行使は、決して容認してはならない。

法曹の養成

大学の使命は、たゆまぬ研究と並んで親身な学生教育にある。法学部学生への教育の成果は、司法試験合格者数も一つのバロメーターとなる。早稲田大学では、この面での成果を図るために、七〇年代に入つて、正規の授業に併せて、試験合格と直結する本格的な講座を開設した。同試験は合格率が約二％という最難関の国家試験であった。

この講座は、法律学習の面白さを伝える「入門講座」、重要な課題を解説する「論点講座」、事前

に提出させた答案を添削した後、ゼミ形式で合格答案の作成を指導する「添削講座」、そして実際の試験と同じ形式で行われる「答案練習講座」など、行き届いたカリキュラムであった。

これらすべての講座を担当した私は、入念な準備と丁寧な質疑応答に全力を傾注した。当システムは極めて有効に機能し、一九八三年には早くも東大を抜いて念願の合格者数一位の座に輝き、その後、首位の座を東大と互いに競っている。

二〇〇四年、アメリカのロースクール制度をモデルにした法科大学院制度がわが国に導入されたことは、記憶に新しい。ロースクールでの留学と教授経歴に加え、数々のロースクールへの資料収集を目的とする訪米経験を持つわたしは、日本経済新聞や法律専門誌より、新しい法曹養成制度の設計にアメリカの先例を、いかに生かすことができるかについての論稿を、求められた。未見の読者や知人諸氏からの思わぬ反響は、嬉しいものであった。

政治家との接触

近年、政治家や官僚の腐敗ならびに汚職が続出しており、百年河清を待つがときであるが、それらについて、しばしばマスコミ各社からコメントを求められてきた。なかでもN代議士のケースは、その悪質性が多重化していたこともあり、事

件の構造的原因やその予防策について論じたコメントが朝日新聞（一九九八年一月三二日夕刊）に掲載された。

彼は五つの違法行為を犯していたが、朝日の記者からインタビューを受けたのは彼の一連の事件が明るみに出る初期の段階であったので、政党助成法による政党交付金の支出に関する虚偽報告に関するものであった。政党助成法はドイツの制度に倣ったもので、全人口一人あたり二五〇円を計上し、約三一〇億円を国費から毎年各政党に分配するものである。彼は日本有数の飛行機メーカー一族の御曹司という出自であるが、刑事裁判で有罪を宣告された。

しばらくして、彼は何を思ったか、朝日新聞へコメントを寄せた私を指導教授と名指し、社会人入学の願書を提出してきた。しかし、社会人受験資格としては実務経験が不適合であるという理由で、不合格の決定が下された。その後まもなく、彼が自ら命を絶つたとの報道に接したが、複雑な心境であった。

海外大学招聘教授

首都ワシントンのマサチューセッツ通り（大使館通り）の奥深くに、新築移転したばかりのワシントン大学法科大学院の招聘により、「日本法」のテーマで集中講義をする機会を得た。

講義の雰囲気は、日本の博士養成コースにおけるゼミを連想させる、緊張感の横溢するものであり、議論好きのロースクールの学生の例に洩れず、活発な意見交換がなされ、教える側にとつても刺激のある授業であった。

講義も終わりに近づいたころ、研究室のメールボックスに大きな書類袋が入っており、その表紙には、教授に対する学生による授業評価の実施要領を記すメモが添付されていた。日本では、担当する授業の評価を受けるといふ経験はそれまでにはなく、この時点で初めてそれを経験することになったわけである。

授業評価の目的としては、この結果が、教授の昇進、ベース・アップ（学部長がその決定権を有する）、契約の変更、あるいは終身身分保障の検討に際する資料として用いられる旨が明示されており、特に瞳目させられた設問は、「教授は学生およびその意見に、敬意を払ったか。当該講座は、今後も継続すべきか。当該講座を同一教授に、引き続き担当させてもよいか」といった内容のものであった。このことは、教室という密室から公の場所に、教授の教育内容、教育技術、ひいては人格までもが晒されるということになり、教育現場を風通しのよいものにするだけでなく、教授陣の能力判断という大事な一役を学生も担っているのである。学生による授業評価は、わが国でも徐々に採用されてきてはいるが、それは名目的・形式

的に行われているに過ぎず、教授にとつての厳しい目的や設問はまだまだ用いられていないのが現状である。

アメリカは大胆な改革を時に移さず断行し、試行錯誤を繰り返す国柄であるのに対し、わが国は改革の必要性は認めつつも、改革の弊害や被害者に意を用いつつ、緩やかに変化の軟着点を見いだすという特色が、ここにも現れているように思われる。

その後、パリ大学からも、日本法を担当する教授として招聘を受けた。受講する学生の国籍は、フランスのみならず、ドイツ、イタリアなど多岐にわたっており、授業の場も、キャンパス内の教室からパリのカフェやレストランへと広がり、多彩な話題で大いに心を通わせることができた。彼らの熱い言葉から、極東の日本が欧米において高い評価を得ていることを、肌身に実感したのであった。

まわりを海で囲まれたわが国は、独自の文化と歴史を育んできた。「和を尊ぶ精神」は世界に誇れるものである。この貴重なDNAをだいじにしていきたい。

未来への展望

ふりかえってみれば、これまでの人生のなか、国内そして海外で、様々な教示を享けることがで

きた。なかでも米国留学中に親しく知遇を得、日本でも再会を果たしたイェール大学のパートレット・ジャマティ総長、また二〇〇一年に、カルルスルーエのドイツ連邦憲法裁判所で、自ら懇篤な案内の労をとられ、わたしのインタビューに、丁寧に応えられたベルトルド・ゾマー副長官との出会いは、忘れ得ぬものとなっている。遠い国から来た一介の法律家に対して、示された温かい人柄とその大きな包容力は、わたしの記憶のなかで、特に豊かな光彩を放ち続けている。

そして国の内外に活躍する多くの教え子たちや、実業界へ雄飛したわが三商同窓会の諸兄。この地球に生きる人と人とのつながりの素晴らしさ、大切さを思うこと、しきりである。

現在わが国では、表層的には豊かで安泰な生活が保たれているように見えるが、その実態は経済的利益に奔走する政府・企業・投資家の下で、国民は安らかに一生を過ごせるといふ保障は与えられていない。未来を担う子供たちを安心して出産し、育児にいそしめること、そして高齢者が人としての尊厳を維持できることなどの基本的人権の確保が、きわめて困難になっている。いま、わたしは主として市民の生命と財産を護ること、そして中小企業の経営権を保護することのため、実践的な法律家の道を歩んでいるが、依頼人からの「ありがとう」の言葉とその笑顔が、わたしにとって、何よりの活力源となっている。

これまでのわたしと妻・美代子との二人三脚の歩みにおいて、培うことのできた法理論と実践的
法理論を「法文化遺産」とし、ダイナミックに発展するこの二十一世紀に、微力ながら、惜しみない応援と手助けをさしのべたいと念じている。



私の履歴書(二)

金井 一夫 (二十五期)



円周率 3.14159265...

三商時代の学業関係で鮮烈に記憶しているのは一年生のときの数学の最初の授業のことと、その秋に全員が受けさせられた日商簿記の三級の試験に、たしかクラスに五人ほど不合格者がいて、不本意ながら、そのうちの一人に入っていたことがある。

数学の先生の名は忘れた。当時、珠算部の仲間うちで歴代天皇の一覧などを暗記することが流行っていた。神武・すいぜん・あんねい・いとく：明治・大正・昭和といった具合にである。私は歴代天皇の方はやらなかったが、円周率は小数点以下100桁位までは覚えていた。そして、その数学の先生が授業の時、たまたま円周率3.14以下を知っているかと質問してくれたのだ。勢いよく手を挙げた私は一気呵成に3.

14159・・・と数十桁までやった。呆れた先生は私を制して、そんなに知っていてどうするんだ、必要ない、3.14だけでいいんだ、と吐き捨てるように言われた。傷ついたなあ、あのときは。

清田榮一教頭先生のこと

私はツベルクリン反応で陽転してまもなく、肺に影があると言われて、一年の秋より休学、そして再登校を繰り返して三年間卒業が遅れた。それ故、入学は今村直人校長、卒業は伊沢信治校長ということになる。教頭は清田榮一先生であった。一年おきの休学を挟んだ六年間の三商時代には、肺浸潤を恨んだこともあったが、思えば、人より倍以上の人脈のゆかりを私に与えてくれたことになり、その後も、私の来し方に確かな指針を授けてくれたのだが、その時は気づかなかった。

そのうちの一つに、清田榮一先生のことがある。私は三商を卒業する直前まで終始、就職希望であった。しかし、健康を害した生徒を快く採用してくれる会社は見つからなかった。確か七つほど、大、中企業の就職試験や面接を受けたがダメだったとき、教頭の清田先生に教員室に呼ばれて、清洲橋の袂にある友人の経営する会社ならと勧められたのだが、その会社はそれほど進まなかった。別れ際、就職できなかったことをばねに進学するのも人生の選択だよと、ぼそり、清田先生に言われた。

もう秋も過ぎようとしている頃であった。大学への進路を考えてもいなかった私は、その暮れ、遅ればせながら進学を決意したのであった。

安保闘争中の校庭

唐突な進学希望であったので机に向って、受験勉強をした記憶がない。二つ申込んだうちの一つの明治大学は、受験開始時間に大分遅れてしまつて、受験できずじまい、やむなく、お茶の水にあつた中央大学商学部に入學したのである。しかし、校庭は反戦のポスターや闘争のビラが風に舞っていて、連日、中大講堂では安保反対の集會が繰り返されていった。

そのなかで出会つたのは中学校時代、春や秋に関東各地の競技場で学校を代表して競い合った珠算の知合いであった。当時の中央大学には全国レベルの珠算の選手たちが集まっていたのである。私は当然のように白門珠算部に誘われて入部した。三商の珠算部のOBもいた。この白門珠算部は、いまでも年一回は全国の商業高校に声を掛けて、八王子の中大校舎で珠算競技大会を主催している。

公認会計士への道

白門珠算部の仲間たちの進路は、卒業後、米国の学校で珠算を教えながら市民権を得た者もいる

が、大方が商業科目を教える高校の教員になった。一方では、税理士、公認会計士を目指した者もいた。このような環境のなか、中大の校庭で都立三商の一年上で現三商会計人会の事務局長の浅野修一さんに、自分は公認会計士の第二次試験を今年受かるつもりだ、金井君もぜひやらないかと勧められ、財務諸表論のサブノートを手渡された。そして会計士を目指すなら井上達雄教授の会計学研究会がよいとも教えてくれた。そのおかげで、浅野さんに続いて、翌年、私も幸い、在学中に二次試験に合格した。

中央大学の図書館の扉が開くや否や、その日一日過す勉強机の場所の確保。金も時間もなくて、ラーメンやコッペパンでしのいだ食事。図書館の灯りの乏しい廊下で知り合った人たち。いま思うと、公認会計士の二次試験の突破をめざしていたこの一年間がとても懐かしい。そして晴れて合格卒業。十年後、合併につぐ合併で監査法人内の争いが嫌になつて日本公認会計士協会の役員に立候補。以来二十三年間、理事、常務理事、副会長などを経験するのであるが、この中大の在学時代に知り合ったゆかりの人たちが私を陰になり日向になり支えてくれることになつたのである。

NHKテレビ「監査法人」放映

ところで、昭和三十七年、会計士補になつた私の指導公認会計士は昭和二十年の終戦時に、三井

物産の本店の決算課長であつた田添浩氏である。当時は、今とは異なる全面監査ではなく制限のある監査の時代ではあつたが、田添先生は監査会社に対する姿勢のとても厳しい人で、実地棚卸に預り在庫を見つけて、その会計処理が正しくなければ、監査人を辞退することさえ厭わないという人であつた。

先生に随行して、というより先生のカバン持ちとして、大阪、名古屋、福岡、札幌、仙台、広島などなど、一週間単位の監査出張に行かせてもらったが、そのなかで強烈な印象が残っているのは、九州の八幡で監査をしているときに出くわした、かの浅間山荘事件のとき終日、全員がテレビ画面に釘付けになつてしまつて、さすがに監査どころではなかつたことである。

そういえば、去る六月から七月にかけて、NHKのテレビの総合チャンネルで「監査法人」という連続ドラマがあつた。このドラマは特殊なケースを誇張してクローズアップさせてはいるが、これまでごくまれに公認会計士の監査証明の時、正しくない意見表明が一部にあつたということとは、残念ながら日本公認会計士協会の規律担当常務理事経験者として知る限り事実である。

しかしながら、監査人による不適正の意見を表明したり、企業監査を辞退したり、という現象が今や確実に出てきた。時代とともに企業にはつきりと意見を述べられる誇りある公認会計士が増え

てきていることがとても嬉しい。

わたしの趣味は短歌

この手記は、私の来し方のうちの公認会計士という一面に焦点を当てたが、ここで少々私の趣味に触れてみたい。まずは囲碁。私の囲碁は白、黒の石が接すると意外な力を発揮すると上級者から言われる。子供のころに父親から喧嘩碁を、しまれた故であるらしい。今はテレビでプロの囲碁の番組を時折見ている程度である。囲碁での唯一の自慢は、わが大学の出身校の女子学生チャンピオンに、私が二目置いて中押し勝ちをして、眉目秀麗の女性を悔し涙で泣かせたことである。

現在、熱中しているのは、旅行と短歌を詠むこと、社交ダンスのワルツなどである。海外はベングンに会いに喜望峰、ピラニアを食べてみたくてアマゾン川、沐浴を見にガンジス川、年次にアラスカのオーロラを、と今回限りと言いながら結構出かけている。短歌は先人の歌をまねて詠む程度ではあるが、かれこれ七年目になる。

恐縮だが締めくくりとして、最近の日常詠を挙げさせてもらう。

踊るサンバハートと戯れいふ脈の

妙に乱れる麦酒ごときで

外れ馬券散りたる席をあとにして

夕日浴びつつ競馬場出づ

たよりなく飛びぐらしが山ぎはの

花睡蓮の池わたりきる

近江路にそろばん祭祥の碑はありぬ

若きとき夜の塾に教へき

そろばんを普及して来し友のこゑ

英語読み上げ算電話にて聴く

似合ふかと制服着ては孫娘

庭の白木蓮居間明るくす

酢味噌にて肝を食ひしが鯨鱈は

鍋にかぎると那珂湊の昼

死ぬことなど頭に浮かばぬ朝床の

習ひとなりし仙骨運動

冷えしきるコンピナートの雲間より

のぼる朝日は光芒はなつ

夕暮のブラジル珈琲飲みにけり

数字優先の話ききつつ

侮るなどいふ表情のみづからの

写真自らおどろきて見つ

子年生まれ 新年雑感

わが家には子年生まれが三人居たことがあつた。

私の二回り上の父と更に二回り上の母の母である。

その祖母のもとに疎開して筑波山の麓で三年程暮らした。祖母は行商をしていて、からだのがつちりとした働き者の明治の女性だった。

ふるさとの庭を覆へる柿二本

たしか右の本硬き渋柿

思ひ出は銭撒きゆける葬列に

母とならばし母のふるさと

茨城県の古河と言つても渡良瀬川の船頭の次男として生まれた父は上京して警視庁に奉職、大東亜戦争はもちろん満州事変・支那事変と出征しながら幸運にも昭和二十一年に復員して江東区の深川署の刑事として活躍した。

天井のしみを砲火と叫びたり

戦地の夢かいまはの父の

ふるさとの駅舎に佇れば七き父の背な

思われて背筋のばしぬ

私自身のことについては面映ゆいが、今、一番熱中している短歌で余白を埋めさせていたたく。

会計士の役職ながきわが人生

きはめんとして感傷にゐる

異国語の会議につかれ窓みれば

カジノの船が夕日浴びをり

たよりなくとぶひぐらしが山ぎはの

花睡蓮の池わたりきる

人生をあきらめず来て今朝は逢ふ

清しき咲ける柘の花

子年は干支の始めの年。私もいつまでも人生の初心者でありたいと願っている。

【略歴】

昭和十一年七月二十八日 東京市向島区に生る

昭和三十三年三月 東京都立第三商業高等学校卒業

昭和三十七年三月 中央大学商学部卒業

【職歴】

元監査法人トーマツ代表社員

公認会計士税理士金井一夫事務所

金融庁契約監視委員会委員

【公職歴】

元大蔵省企業会計審議会臨時委員

元千葉県八千代市市議会議員

(日本会計士協会)

昭和五十年六月〜平成十年十月

理事・常務理事・副会長・東京実務補習所所長

【賞罰】

自治功勞により八千代市篤行者表彰

公認会計士功勞により監授褒章受章

同窓会・生徒会・
財団法人東京三商会の
「あらまし」



第二十六期
古田 勝一

《同窓会のこと》

第一期生の卒業とともに、同窓会は昭和八年(1933.4.29)に発足したのでありますが、当初は殆ど学校の世話で運営されていたもので、実質的に独立したものとなったのは昭和十七年四月二十九日の天長節の佳日を記念して、開催された同窓会総会からと云えるようです。

そして、戦争終結後、荒廃した同窓会組織の再編を当時の今村直人校長より依頼を受けた岡田一郎氏が昭和二十年、初代会長となり四十年の長きに亘り会長として務め、現在の六代迄受け継がれて参りましたが、四代迄は同窓生でもある三商勤務の先生が居られましたので、その先生方が事務局として主導する活動状況でありました。

第五代、木戸会長よりは三商出身で三商勤務の先生が少なくなり同窓生の手で抛る自主運営を余儀無しと云う状況となりました。中野貞三事務局長始めその後の事務局、役員の懸命の努力があり、

三商出身の先生の手を離れ、外部の同窓生の手で抛る自主運営がここ五年間で軌道に乗って参りました。

それも自主的に!!...健全に!!...又、活発に!!...なされている様に思われます。

これより先：同窓会の成長戦略をテコ入れするために欠かせないものは、延長線上にある各期・同期会の強化に他ならないと見ています。

活発な同期会の「核」を増やさなければなりません。

そうした同期会の「核」が増殖して来れば、同窓会全体の底上げに繋がって行くと思われれます。

《生徒会のこと》

戦前の三商には生徒自治機関として「獨往会」なる名称の校友会的なものが存在したそうです。

その後、国家は戦争へと突入し、次第に時局は急

歴代同窓会長

同窓会(代)	同窓会(期)	同窓会長氏名	自	至
初代	1期	岡田 一郎	1945	1985
2代	3期	都築 健一	1985. 5	1998. 6
3代	8期	神谷 武志	1998. 6	2001. 5
4代	12期	大嶽 清	2001. 5	2003. 5
5代	19期	木戸 隆吉	2003. 5	2008. 5
6代	25期	柴崎 晴雄	2008. 5	



同窓会創立総会

迫を告げ、国家の要請するところに従い、昭和十六年四月「報国団」という組織に切り替えさせられたそうです。

戦争が終結を迎えると、昭和二十年九月より二十三年迄は「校友会」、そして「自治委員会」へと引き継がれました。その後、教育制度の改革に伴い、「自治委員会」は新教育の一環として「生徒会」として発展解消することとなりました。

昭和二十四年一月『生徒会・会則起草委員会』が設けられ、早速準備に取り掛かった訳でありますが、当時全くの『無』から『有』を生じさせるのは生易しいことではなかった様であります。

そこで、当時すでに「生徒会」としての組織をもって活動していた都立第一高女（現・白鷗高校）と都立第一高校（現・日比谷高校）を訪れて、そのシステムを学び苦心に苦心を重ねて審議の結果、第一高女にかなり良く似た組織をもつ会則が出来上がりました。

こうした流れを経て、昭和二十四年五月に「三商生徒会」は産声をあげました。

同窓会十七期の飯田幸男先輩が初代生徒会長であります。歴代生徒会長は別表に記しますが、現在の荒木達也会長迄六十年間に亘り脈脈と受け継がれて居ります。

歴代生徒会長

年度	生徒会(代)	同窓会(期)	生徒会長指名
昭和 24	初代	17期	飯田 幸男
25	2代	18期	上海賢四郎
26	3代	19期	泉 新之助
27	4代	20期	堀井 正嗣
28	5代	21期	川島 善次
29	6代	22期	影山 照彦
30	7代	23期	田中 義孝
31	8代	24期	樽見 宏
32	9代	25期	栗橋伸次郎
33	10代	26期	古田 勝一
34	11代	27期	山田 和弘
35	12代	28期	伊沢 宏祐
36	13代	29期	伊藤 武志
37	14代	30期	落合 清秀
38	15代	31期	高山 俊雄
39	16代	32期	高橋 浩
40	17代	33期	谷部 幸男
41	18代	34期	望月 明一
42	19代	35期	吉野 登
43	20代	36期	中村 健次
44	21代	37期	落合 勉
45	22代	38期	相馬 良一
46	23代	39期	稲葉 和美
47	24代	40期	中沢 孝
48	25代	41期	園部 光一
49	26代	42期	木内 茂二
50	27代	43期	高谷 敏幸
51	28代	44期	山川清・大島敏生
52	29代	45期	小池 文男
53	30代	46期	吉富 孝行

年度	生徒会(代)	同窓会(期)	生徒会長指名
昭和 54	31代	47期	山田 一彦
55	32代	48期	増田 恵美 (女性で初の会長)
56	33代	49期	篠塚 信英
57	34代	50期	石沢 正一
58	35代	51期	柴崎 孝雄
59	36代	52期	相川 義夫
60	37代	53期	小杉 智之
61	38代	54期	杳沢 英樹
62	39代	55期	槇島 安正
63	40代	56期	山口 雄一
平成 元	41代	57期	小堀 江美
2	42代	58期	積田とき子
3	43代	59期	大塚 勝典
4	44代	60期	原 弘樹
5	45代	61期	高梨 昌久
6	46代	62期	村上 亮
7	47代	63期	永山 晶啓
8	48代	64期	長田 剛
9	49代	65期	篠原 義則
10	50代	66期	大林芽英子
11	51代	67期	高木 晶好
12	52代	68期	中村 公彦
13	53代	69期	村上 恵春
14	54代	70期	今井小百合
15	55代	71期	奥山 岳
16	56代	72期	梶山 宜弘
17	57代	73期	伊垣 春奈
18	58代	74期	土田 竜也
19	59代	75期	磯邊 学
20	60代	76期	荒木 達也

《財団法人東京三商会のこと》

昭和三十九年一月に財団法人東京三商会は発足しました。

三商は同窓会・PTAその他の外廓団体が自分達の教育的な熱意によって勝ち得た二五〇〇坪の川岸運動場と創立三十五周年記念事業として一五〇〇万円を投じて建設した新潟県六日町の山寮とを持っておりました。これらの財産保全を考えると、その時々校長名義では健全ではないので、不動産の財産権の確立：・永遠に三商教育の上はその偉力を發揮する為にも、財団設立が望まれた訳であります。

基本財産は以上の川岸運動場と六日町山寮で、運用財産は同窓会・PTAからの一〇〇万円が発足致しました。

この川岸運動場（現在の新校舎が建っている所）も、当時の三商の校庭が狭かったことから、初代吉沢徹校長が地主である深川区に折衝し、運動場拡張の目的で昭和十三年十二月十三日に二五〇〇坪を買収しました。

買収価格の九万二千九三三円八銭も、毎月のPTA会費を五十銭値上をして八年間も積立て、購入されました。

やっとの想いで購入した土地は荒削りの地形で、丸の内のビル工事現場からトラック六〇〇台

分の土を運んでもらい、土盛りをし、整地をすることは大変な仕事であった様であります。

在校生の勤労作業も続けられ、夏季休暇中は上級生が学年別に数日間体育館等に宿泊して、炎天下の地均しや除草等に尊い汗を流したそうであります。

こうした努力の積重ねで、荒地にすぎなかった川岸運動場も名実共にグラウンドらしくなり、三商のグラウンドは従来の二倍以上の広さとなった訳であります。

この川岸運動場も、買収してから三十七年目となる昭和五十年三月十一日に総額四億二四八〇万三三〇一円で東京都に売却されました。

又、六日町山寮も三年間毎月二〇〇円ずつ積立をし一五〇〇万円を投じて昭和三十七年に購入したのでありますが、この物件も時代の流れで利用者数の極度の減少：・固定資産税の負担が重荷となり維持困難との理由で、残念ながら数年前に地元六日町に寄付する形となりました。

こうした流れを経て、財団の基本財産は川岸運動場・六日町山寮の不動産から都に売却した代金による現金預金へと姿を変えたものとなりました。

財団の発足より二十年間程は、銀行の定期預金も年利五分五厘でしたので、一億円で五五〇万円も利息が付きまして、複利で十年間計算すると

元利で倍の二億円となった時代です。

低金利となりまして、かなりの年月が経過しましたが、財団事業の育英奨学金制度は金利の高かった発足時のまま施行されております。

総額で四九〇万円程の奨学資金は全額返還義務なしの条件です。これに一般管理費を加えると年間約九一〇万円の支出となっています。『入るを計って：出を制す』の反対現象が続いていますので、財団の財産が先細りになって行きます。何とか食い止めなければなりません。

財団が事を進めるには、全て東京都教育委員会の認可が必要との事ですので、これまでとは、ともすると何となく都の管理が厳しいのではないかと云う理由で基本財産の見直しを避けて居りました。

桜井定夫教諭も創立五〇周年の記念誌で『気をつけないと宝の持ちぐさになる心配もある』と云っておられます。

社団or財団法人に対して国の取扱が見直されようとしている今こそ、同窓会としても資金の運用方法や、奨学金の支給者からの一部返還等の制度について戦略を以って強力に対処して行く一歩を踏出さねばならぬ時期に来ていると思われまます。

設立の理念、歴史と伝統を達成するには、かなりの改革が時に必要となります。

そして、さらなる発展を力強く遂げることを期したいと存じます。



六日町山寮



川岸運動場の整地（昭和13年）

同窓会・生徒会・財団法人東京三商会側から見た
《三商沿革》

昭和03年(1928年)	1月31日	東京府立第三商業学校 設立
昭和08年(1933年)	2月7日	前田夕暮氏作詞、山田耕筰氏作曲の校歌が出来る
	3月29日	第1回卒業式挙行…帝国ホテルにて祝賀晩餐会開催
	4月29日	同窓会が発会式を挙げた
昭和13年(1938年)	12月13日	川岸運動場の獲得…整地に入る
昭和17年(1942年)	4月20日	同窓会報第1号発行
	4月29日	同窓会総会（天長節の佳日を記念して）
	9月	同窓会より母校にプラスバンド寄贈
昭和18年(1943年)	7月	東京都立第三商業学校と改称
昭和20年(1945年)		同窓会・組織の再編 岡田会長、今村直人校長より依頼を受ける
昭和23年(1948年)	1月31日	創立20周年記念行事
	4月	東京都立第三商業高等学校と改称
昭和24年(1949年)	5月	生徒会 誕生
昭和25年(1950年)	10月10日	多田宏氏作詞、池内友次郎氏作曲の応援歌制定
昭和27年(1952年)	4月28日	（日本国独立回復）講和発行を祝して講堂前にシュロの植樹
昭和30年(1955年)	4月	「同窓会名簿」発行
昭和31年(1956年)	11月	「同窓会報」復刊第1号発行
昭和33年(1958年)	2月23日	創立30周年記念式典挙行
	3月9日	第25期生、戦後初めての卒業祝賀会（於 プリンズホテル）
	7月	同窓会として母校にプール寄贈
昭和37年(1962年)	6月	六日町山寮、落成式挙行
昭和38年(1963年)	1月31日	創立35周年記念式典挙行
昭和39年(1964年)	1月27日	財団法人 東京三商会の設立が認可される
	1月31日	「同窓会会員名簿」発行
昭和40年(1965年)	8月	山寮運動場完成
昭和43年(1968年)	1月	三商生徒会館 兼 同窓会館 竣工
	1月31日	創立40周年記念式典 挙行
昭和50年(1975年)	3月11日	川岸運動場、東京都に売却
昭和53年(1978年)	1月28日	創立50周年記念式典 挙行
昭和55年(1980年)	12月	旧校舎、体育館、講堂、武道場、三商生徒会館 兼 同窓会館 解体
昭和58年(1983年)	5月14日	改築落成記念式典 挙行
昭和59年(1984年)	6月10日	「同窓会会員名簿」発行
昭和60年(1985年)		同窓会長、岡田一郎会長より都築健一会長へ
昭和63年(1988年)	1月31日	創立60周年記念式典 挙行
平成08年(1996年)	9月26日	「同窓会会員名簿」発行
平成09年(1997年)	11月1日	創立70周年記念式典 挙行
平成20年(2008年)	1月12日	創立80周年記念式典 挙行

エッセイ

公会計にも複式簿記を 導入させよう

第二十二期 荻野 弘康
(三商会計人会幹事)

はじめに

昨今、年金の記録漏れに始まり、防衛省汚職、ガソリン暫定税率の期限切れに伴うダウン、アップそしてガソリン税と一体である道路財源のあり方、後期高齢者を巡る健保法改正等々、国民の関心はこれらの案件のあるべき決着、国民的な立場に立つ決着に向けられていると言っても過言ではあるまい。

道路公団から社保庁等省庁関連する特別会計は三十一あり、長年にわたって単式簿記による収支計算(予算、決算)を行ってきた。特別会計ということで監査もずさんであり、立法府や国民の監視も行き届かない仕組みになっている。

ガソリン税は一般財源化する

暫定税率が三十三年も続き、さらに十年も延長されることは多くの国民は支持しない。

暫定という言葉を国語辞典で引いてみた。暫定

とは「正式に決定するまで、仮に定めること。臨時の措置」(三省堂/大辞林)とある。多言を要しまい。まさにこの通りである。三十三年前とは道路事情も異なり、暫定を四十三年も続けることは、初めに道路ありきのいかがわしい利権行為の無限の延長であると思われても仕方がないのではなからうか。必要な道路を造ることに反対する国民は少ないだろう。

福田内閣は、来年度より一般財源化すると閣議決定しているの、暫定が暫定であることに期待したい。

後期高齢者保険は廃止し、

国民保険による総合適用に戻すべきである

七十五歳で区切った後期高齢者保険制度への移行は「善良な国民の琴線に触れた」(毎日新聞)制度改悪で国民多くの怒りを募らせている。

自民党でも、中曽根元総理、塩川元財務大臣、堀内元総務会長等経験豊かな各位が、廃止し、元に戻すべきであると意見を述べている。

医療費の増加と人口減や若年層の負担増を理由としているが、七十五歳に至った方々も青年時代はあり、それこそ第二次世界大戦のさなかを生き

抜き、この間にも、保険だけでなく、心身共に血と汗の結晶を後輩、子孫のために尽くし、捧げてきた方々である。

感謝の気持ちは多々あるとしながらも、功労者(後期高齢者とか末期とかは論外である。)に対して負担増を課したり、嫉捨て山のシステムはとうてい許容できない。政治とくに福祉こそ国家の最大でかつ重要な任務であり、国民に対するぬくもり、ハートの失せた政治やシステムが長続きするとも思えない。

三級の簿記で間に合う公会計

三商生にとつては、誰にも出来るごく初め的なとても簡単な会計処理である。会計の単位ごとに企業会計原則等を参考に所定の会計処理のルールを定め、借方、貸方の仕訳伝票を起こし、期末の整理仕訳を行い、貸借対照表/損益計算書(収支計算書)を作成すれば良いのである。当然、所定の監査は受けなければならない。

「地方財政健全化法」が制定され、二〇〇七年決算から所要のチェック、指導が行われるが、情報開示のための財務書類の整備は遅れている。

公金横領、隠蔽体質、天下りを改め、埋蔵金は開示させる。

こんな簡単なことが出来ないのは、よく言えば福沢諭吉から始まっている。「帳合いのすすめ」を守ろうとする守旧派であり、勘ぐれば利権集団（政、官、業）の国民に事実を知らせない意図的な隠蔽作業であるとも考えられる。

社保庁の年金のずさんな管理、グリーンシア等数々の無駄遣い、防衛省の守屋事件に象徴されるゴルフ、カラオケ接待に始まる賄賂、納入業者との随意契約、一隻で一四〇〇億円もするイージス艦四隻も買うという、道路公団でも、本四架橋やアクアライン等／の巨額な赤字の高速道路、霞ヶ関に事業所のある二十人程度の関連会社のうち、十三人が毎年一人五百万円を超えるタクシー代（居酒屋タクシーまである）を使っているという。根本問題としては、各省庁同一状態であるが、道路公団には、五〇の関係法人があり、平成十八年四月現在で、一、二六四人が天下っており、こうした役員の多くは、年間の上限報酬が一五〇〇―一八〇〇万円であるという。また、道路財源の五〇の公益法人の余剰資金（内部留保）が同年末で五五五億円であることも判明している。

ここまで来たら、いくら人の良い国民でも怒るのも無理もない。埋蔵金については、表裏を知り尽くしている自民党の中川元幹事長の発言であり、道路公団の資

料によっても、かなり根拠のあることである。

――「だいたい五〇兆／六〇兆円といわれる埋蔵金、独立行政法人の余剰金、削るべき無駄な支出はたくさんある。」（明大教授一高木勝氏＝現代経済学）

むすび

政治家の収支ほど曖昧なものはない。

事業経営者（納税者）は、日々の帳簿をつけ、領収書等は金額の大小にかかわらず所定の期間保存している。政治資金規正法がザル法であり、一枚の領収書をコピーして何回も支出処理している事例が連日マスコミで報道され、ようやく政治資金規正法が昨年末改正された。同法には、登録政治資金監査人（税理士、公認会計士、弁護士）による監査も盛り込まれており、政治とカネについての若干の前進が期待されている。

政党助成金は、毎年三二・五億円も国民の税金から支出されており、公会計共々、限りなく透明性を高め、クリーンにしていかなければならぬ。

三商会計人会のメンバーは、種々のところで活躍しているが、国民の視点に軸足を置き、職責を果たしていかなければならない。母校三商同窓会諸氏の一層のご理解とご支援をお願いいたします。

共に生きる 南仏ニースの旅

第二十二期 越路 正巳



平成に入って、はや二〇年。周りを海で囲まれた我が国は、いま著しいグローバル化の只中にある。

経済の発展と情報のうねり、そして人々の移動

は周知のとおり、国境を越え、ボーダレス社会をもたらしめている。スポーツ界では、メジャーに挑戦する野球人も、松坂大輔投手をはじめ、その数は二桁をかぞえる。

国籍を異にする人々が、互いに共感と信頼を寄せることは、青い地球に住む人類にとつて、まさにかげがえのないことである。この紙面を借りて、みなさまにヨーロッパでの思い出の一コマを、ご披露させていただきたい。

そのアルジェリア人に最初に出会ったのは、ニースのカーニバルでの宵だった。二月の寒いヨーロッパ全土から太陽を求めてこの避寒地へ、飛行機や鉄道で或いは車で、波のように押し寄せてくる人々を歓迎する準備は、万端整えられていた。派手に化粧された仮装行列や子供の楽団が延々と数時間続いている間、老若男女を問わず、そこにあつまつた群衆は紙吹雪を互いに投げ合つては陽気に楽しんでいた。

この数時間後にはカーニバルの賑やかさがいつの間にか消え去り、わたしは宴のあとの紙吹雪の舗道を歩いてカジノ・メトロポールへと足を向けていた。その二階には映画でお馴染みのシーンの展開されているドラックスな部屋があり、わたしは一階の右側の部屋に入つて行つた。教室ほどの大きさの部屋の中は煙草の紫煙と人いきれでモウモウとしており、そこにいる殆どが有色の人々で、数人はその顔に消すことのできない傷跡をと

どめ、人面と云い身なりと云い、この部屋の雰囲気はまさに鉄火場のそれであった。

わたしは前に立つ人の肩の間から首を出して、熱を帯びたゲームに目をやっていった。ゲームが最高潮に達したとき、或る男が当たり前となった。満面の笑みを湛えた彼は、友人の賞賛を仰ごうとあたりを見廻したが見あたりぬらしく、その代わりとでも言おうか、目があつた瞬間ニヤリと顔をゆがめて、ウインクを送つてきた。彼のラッキーを称える意味で、わたしは二、三度うなずいてみせたのである。

これが彼と私との初めての出会いであるが、その時、彼と再会することなど、夢想だにしていなかった。

それから二日後の夕方、コート・ダジュールに面したイギリス通りを散策し、際限のない空と海の紺碧を堪能していた。心地よい疲れを癒すべく、とあるカフェに入った。夕食の時間が近いせいか、中はかなり混雑をみせていた。空席を求めてあたりを視線を探ると、わたしを凝視している褐色の、疲れた表情を宿す三〇歳前後の男に気がついた。どこかで見覚えがあつた。そうだ、彼こそが二日前の夜、あのカジノで出会つたラッキーな男にほかならなかつた。

わたしたちはその偶然さに喜び合い、一〇年の知己の如く挨拶をかわし、席を共にしたのである。そしてそこで、互いに自己紹介をした。彼はアル

ジェリア人で、港近くの理髪店で働いており、小遣い銭が入るとカジノに行くこと、今日もそのつもりで友達と待ち合せていること等を語つてくれた。「結婚しているのか？」と尋ねると、彼は自分の服を示すようにして「こんな調子だからね」と答えた。

やがて彼の友人が姿を見せ、二人がカジノへと席を立つと、彼らはわたしを誘つた。時間の余裕がないので、「少しみるだけなら」ということで、同行した。歩道に出ると、廻りで耳をそばだてるフランス人たちが居なくなつたせいも、彼は急に冗舌になり、「アルジェリア独立の映画を観たか、俺たちはこうしてフランス人たちを殺したのだ」と、機関銃を撃つ格好をして見せたりもした。肩を並べて歩みを進めるうち、滞在中のホテルの前を通りかかったので、彼らを明るくロビーへと導いた。そして、記念写真を撮りたいので白壁の前に立つようと頼むと、しきりに上着を気にしてポーズをした。その間、彼らのロビーへの立ち入りを咎めるフランス人従業員たちの無言の叱責の眼差しが、彼らのうえには注がれていた。

わたしたちが一階のカジノに入ろうとする時、入り口のフランス人制服職員は入場券を要求した。私は「ちよつと見るだけだ」と云つたが、なおもその制服の男は執拗に支払いを求め続けた。時間がなかつたのでその旨を伝えて、立ち去ろうとしたが、どうしても見えていけと誘う彼は、私の

入場料を払ってくれた。その行為に感謝して見物したものの、数分後にはホテルに戻らなければならなかった。二人に別れを告げると、彼は握手を求めて、「日本人とアルジェリア人は仲間だ」と力をこめて言った。私も「もちろんとも」と心からの返答を残し、その場を去ったのであった。

眉太く眼光の鋭い一人のアルジェリア人との出会いは、この海外旅行に、枯れることのない一輪の花を添えてくれたように思えた。このように、素朴でごくささやかな異国の人々との交流の地道な積み重ねが、世界人類の平和へと展がっていくに相違ない、と祈りをこめて、わたしは確信している。

徒然に思うこと

第二十五期 井上 嘉久

二昔前、我が家の家族の一員となった「小太郎くん（三年前に没）。日本犬の雑種。朝夕の散歩は私の担当。おかげで運動不足の解消となり感謝した。

公園や遊歩道などで「マナーをよく守り、犬のフンは飼主が忘れずに…」の看板を見かける。目の前でしたフンを飼主が忘れるはずがない。知っ



時、魔法の力がほしい。「迷惑な落し物」「ポイ捨てのゴミ」「産廃」等々…。朝目覚めると、落とし主の元にそっくり戻っているというのはどうか。躰け、マナーなどは、学校教育ではない。家庭の問題だと常々思っている。動物の世界では子供が一人立ちできるまで、親が厳しくしつける。生きてゆくための命がけの試練なのだ。

躰けの内容はさまざま。〈食物を粗末にしない〉〈他人に迷惑をかけない〉この二つが我が家の細やかなしつけ。こんな平凡な積み重ねが延いては学校生活、社会生活でのルールを守る下地となるのでは「我が身に返る」親に言われた子供の頃

を思い出す。「いい加減なことをしていると、後々

自分にその酬いがくるよ」と。今、死語になりつつある。生きるということは、この繰り返しのはずなのに「人権」などという過保護的な甘さが精神を墮落させた。「無理押しに拳骨」と言われる相撲の世界で「人権」などと言ったら笑われる。

しかしそこには師弟の愛があり、皆強くなった。ある著名な作家の文章に「人間らしさとは、その人が自分以外のことに、どれだけ心を使っているかということである。」と定義。日々お互いにもう少しづつ、自分以外のことに時間を費やしてゆきたいものだ。

すがすがしい環境作りに繋がるように思う。

六十五歳の青春

第二十八期 木村 登志男

三商を卒業して四十七年、入学した年からはちょうど五十年。同級生の多くは第一の人生を無事終え、第二の人生を歩み始めている。

三商卒業後、横浜国立大学経済学部に進み、卒業後は都落ちして長野県の（株）諏訪精工舎という時計工場に就職した。会社は世界初のクォーツウォッチを開発商品化するやら、デジタルプリン

タという小型印字装置を商品化して情報機器事業に乗り出した。さらに半導体や液晶ディスプレイ事業にも進出して、大躍進。一九八五年にはセイコーエプソン(株)と社名を改め、二〇〇三年六月には東証一部上場。私は代表取締役副社長、事務方の責任者として晴れがましい経験をさせてもらった。まさに、「人間万事塞翁が馬」を地でいった幸運なサラリーマン人生であった。

二〇〇六年六月、副社長を最後に退任し、第一線を退いた。

さて、これからどうするか？人生八十年の時代に長野県のそれも安曇野で悠々自適するには早すぎる。幸い五年前に新宿の若松町にマンションを購入してあったので、月の半分ぐらいは東京に出て、大学で教員の仕事ができないかと考えた。

第二の人生のスタートも再び幸運に恵まれた。紆余曲折はあったが、法政大学ビジネススクールが教授に採用してくれた。

昨年四月から終日東京、週末安曇野という生活を始めた。学校での担当科目は「技術イノベーション」、「生産イノベーション」、「経営診断実習」など。それに卒論の個別指導が加わる。会社での経験は役には立つが、それだけではとても大学院レベルの講義はこなせない。すっかりご無沙汰していた「勉強」に必死で取り組む破目になった。「土・日はゴルフ」の生活が「土・日は書齋」という生活に一変した。しかし、実に楽しい。次から次へと

テーマが出てきて研究・教育の仕事の深みにはまり込んでゆく。あと数年はこの生活を続けて、じぶんが生きてきた証の「著作物」を残したい。テーマは《BERC》。

何を意味するかは出版するまで内緒にしておく。

以上

三商と半世紀

第二十九期 大川 幹雄



わたくしたち二九期は一九五九年の入学だから、三商と縁ができてから半世紀にわたる長いお付き合いになる。卒業後

今日まで山あり谷ありで全国をさまよつての人生を送つてきた。昨年夏にフルタイム勤務にピリオドを打ち、現在収入は少ないが比較的楽な業務で文字通り四季を楽しめる自由業を送っている。

企業の拘束生活から離れ、この半世紀を振り返ると今までは自覚できなかったが、三商にかかわったことで、様々な場面で人間のブランド・知識・人格醸成・知友人のネットワーク等三商卒業

が故の有形無形の恩典を享受してきた、遅ればせながら感謝をしている。

【三商での学園生活】

入学してから同期生仲間と成績では似たり寄つたりとの場面が多かったが、下町の文武一芸に秀でる学生が多く集まったのか、特にレスリング部・珠算部・放送部等が全国規模で大活躍され、平均的學生を自認したつもりのわたくしは、機会ある度に気後れを感じた。入学時の石田校長の方針か、その年から男子制服が背広ネクタイ着用となり、建物シンボルの時計台、魅力的であるが卒業まで活用できたのか疑問の商業実践室等でヤングジェントルマンとしての待遇を受け、自由闊達の校風であった。学業での記憶は薄く、クラブ・生徒会活動で文化祭・体育祭・予餞会等を学生だけで企画実行、多くの仲間と長時間の準備・実施に深夜まで携わり、順調に終了した時の仲間と味わった感激が今も忘れられない。そのころの仲間との付き合いが延々と続き今も年に一、二回集い家族にいつまでも良く話すことがあるねと笑われる、二九期同期会の幹事二十数名の中核になっている。これら自主的な運営・実践活動がいつの間にか身に付くということが三商生の長所と思う。その後学業を終えて会社人となったが、まだ計算業務は算盤使用が主力で、三商で取得の珠算・簿記一級の実力を如何なく発揮でき、職場でも尊敬のまなざし

して見られた。なにかと業務を引き受け積極性で前向きに対応になり、それを見る先輩・上司はさすが三商生だと在校中には考えられない三商のブランド力に再認識させられた。ただこれも長く続かず日本社会が高度成長を追いかける七〇年代になるとコンピュータ依存で業務内容も大きく変わり、業務分析をしてコンピュータ化するため社内外の仕事のつながり・判断のポイントを解析できずかが試され、勤務先でも商業高校からの採用が終了した。

【会社員としての人生と三商】

業務に貪欲に取組・人に負けるな・人にお世話になったら後輩にそれ以上のお世話を返そうとの三商時代培った信念で取り組んできた。時代の流れに乗り遅れないように自分の担当部門以外の社内外の業務仲間と交流の輪、職務知識、人間の輪を広げていった。会社の各部門中枢に三商先輩がおられ、公私で細やかにご指導を受け、人間として鍛えていただいたがその当時はあまり感謝を申し上げることができなかった罪滅ぼしに、現在、出身にかかわらず社内外の同僚後輩を親切に指導するよう心がけている。新入社時から携わりライフワークとなつていまもボランティア活動で携わるロジスティクス部門が長く、営業・製造・管理部門とのつながりが日常業務で鍛えられ、お互いの立場を超えてあるべき姿を侃々諤々とやりあつ

た。永らく東京だけで過ごしてきたが、三十歳代後半にして初めての土地の関西で心身とも鍛えられる営業現場担当に転じ五年間を過ごすこととなった。振り返ると、「本社でうるさいことを言う奴だ、一度営業現場で自分が出来るかどうかやらせてみる」とどうも試されたようだ。担当エリアで早朝から深夜迄体力・知力・気力の総合力勝負といわれる酒類営業担当として、二日酔いが続く中、得意先飲食店の売上げ拡大施策の提案に頭を使うなど苦しい場面もあつたが、成果が出た時の得意先との喜び共有が忘れられない。得意先や上司同僚の支援を受けて期待の成果をあげることができ、たまたまその年から社内制度で全国二〇名の優秀営業担当をご褒美に欧州ワイン研修旅行に派遣するとの企画がスタート、初めての海外旅行にドイツフランス二週間を体験した。相変わらず外国語に弱いため身振り手振りのワイン研修であつたが仲間の助けを受けて楽しく送れた。帰国するなり九州に転じエリア全体の営業企画担当を続け、その後合計十年にわたつた転勤生活から東京に戻つた。限りの見えた会社生活で自分の強みで出来れば第一人者となるの思いでロジスティクスを希望、しかし四十代後半に戻つたのは本営業部であり、市場の動きを素早く見定める要領の良いヤツと思われたようだ。

五十代になり自分の志望分野が入られ、六二歳で退職するまでロジスティクス経営管理に携わ

ることとなつた。ここでの十年余りは報恩の期間であり、今まで社内外でお世話になつたものをお返ししようと、業務改革、契約会社支援、業界活動等に邁進したが、この期間の人的なつながり、業務のかかわりが現在の会社卒業後もつながっている。これは雑草のようにどの世界にも食い込み何事にも貪欲で苦にしない性格の三商育のお陰。

【会社卒業後の人生と三商】

六四歳になつた昨年夏にセカンドライフに入った。戦中生まれで、身体の出来るころ食糧不足、社会人になると戦後復興担い手とおだてられ、CMでは「二四時間ビジネスマン・会社人間」の生活、最近では団塊世代の走り、報道で「年金・介護」問題の元凶と触れられ、何かと肩身の狭い世代である。定年三年前に会社「ライフセミネター」に夫婦沖縄研修に参加、セカンドライフ三要素についてタツプリ指導を受けた。「カネ」は人それぞれで記述は避け、「体力」は東京復活時に転居した現在地は近代都市なのに徒歩二〇分ほどで水源地を中心に季節の花、時にはカワセミ・ホテルを楽しめる大規模県営公園があり、勤務のない日は朝飯前に出掛け、午後から遠くへと連日早足のウォーキングを行い、歩数記録では多い日は二万歩超、最近一年間で五三三万歩、距離で三二〇キロ、計算上東京九州の一往復半相当を歩き、体重も減り風邪引も減り現在も続けている。

「生甲斐その①」…ロジスティクス業界の複数団体でセミナー・講座・事務局等のお手伝いをして
いるが、教えるつもりが教えられることが多く、
「昔はこうした」「今の人は」とは言わないよう、
三商で鍛えられた通り自主性・創意工夫を引き出
すことを心掛けています。

「生甲斐その②」…知友人、夫婦、ファミリー等
との旅行を心がけ、先輩から「夫婦とともに元氣
に旅行ができるのは七十歳までだよ」との戒めに
従い夫婦旅行を心がけ、子孫に美田を残さずの信
条で子供二家族との合同旧盆国内外リゾート旅行
を五年継続できている。お陰で元氣なうちは公私
の生活でお邪魔虫にならないで行けそうで、今後
も三商魂を發揮して知友人並びに社会に貢献、報
恩を心掛けていきたい。

ナンバー2のすすめ

第二十九期 亀田 光昭

昭和三十七年卒業の同期生は、私同様、今年中
に六十五歳になります。この六十五歳という年齢
は、今この国において、ある種の節目を示す年齢
であります。その一つが定年です。この定年の年
齢は、我々同期が社会に出るころは、五十五歳が
主流で、それが近年六十歳になり、そして現在は

年金の関係で六十五歳まで、何等かの雇用の継続
が、事業主に義務付けられています。

この六十五歳を迎えるにあたり、自分の半生を
考える時、良い方向を向いていた時代、何をやつ
ても悪い目を向いていた時代があつた事に思い当
たります。その時々を思い返すと、あれが「自分
の星」だったのかと思ひ当たることがあります。

その一つが、ナンバー1を目指さず、その下、
必ずしも2番と言う訳ではありませんが、良き上
司のナンバー2であつた時が、すべてに良い方向
に進んだ時だつたと思えるのです。もちろんその
時は、ほとんどこの事を意識しておらず、ややも
すると、より上を目指してあがっていたこととお
もいます。しかし今思うと、どうも自分に与えら
れていた星は、ナンバー2だつたのだと言うこと
を実感し、これからもそうありたく思っています。

私は昭和三十四年に都立三商に入学し、昭和
三十七年に卒業したのですが、当時としては異例
な進学をしました。つまり同年に東京理科大学理
学部化学科に入学してしまつたのです。この進路
は最初から目指していたものではなく、高三にな
り、自営か進学かと迷い、五月に進学と決めた時
は、早稲田の政経が第一希望でした。しかし同級
生にも予備校の同室者にも、常に自分よりはるか
に成績上位者が、その第一希望校に多数いました。
当然分相応の進学先を模索する中で、辿り着いた
のが最終、理科大の同学科だつた訳です。もちろ

ん小、中、高を通じて、比較的理数系の学科は良
い成績だつたし、中学二年の時、科学部に入つて
いたりの、動機らしいものはありましたが、最後
の決断は、自分は「あの上位者の上にはいけない」
だつたとおもいます。そして今思えば、それが良
かつたのです。

その後、東京理科大学での日々は最下位グル
ープに始まり、何で世の中には天才が多いのか、そ
して自分は何て駄目なのかの毎日でした。それで
も何とか四年生になり、クラブの先輩のお情けで、
ある研究室に入れてもらい、卒業研究がスタート
出来ることになりました。その研究室の先生が、
その後のユタ大学を始めとした、私の研究者とし
ての道を作つて下さつた小玉剛二先生でした。し
かし、その研究室での私のランクは同期十一名中、
多分最下位だつたことは間違いないかつたでしょ
う。その上、この同期生の一人は、次年、東大の
大学院にストレートで進学するという天才でし
た。その男の自宅が秋葉原で、帰り道が同じ方向
(両国)だつたので、よく話をしました。そし
てその度に、何てものをよく知っているやつがい
るのかと、感心する事の毎日でした。同時に、知
識と言うものは、深さのほかに幅も必要だと、こ
の同期生から学ばされました。

このような学生生活の後、ご縁があつて、目白
にあります川村学園に教員として採用されました
が、研究者を目指そうとしていた事もあつて、教

壇ではあまり良い教員ではなかったと思います。その上、家が家具の工場で、後に建築会社になった事もあり、二十八歳で創立五十周年記念の建築工事の担当委員会に委員長補佐として所属させられ、一時、教壇を離れ、校舎建設に専念させられました。この期間、三年半、上司が建築に全く無関係の分野の人だったこともあり、建築分野に多少関係のある、いわば「門前の小僧」の私を大事にしてくれました。自分が頭の中で考え、下手な図面に現したものが、専門の人々により正式な図面となり具現化され、建物として形になっていく機会を与えてもらって、この上司並びにその上でそれを認めてくれた理事長、事務局長に今でも感謝しております。

この三年半のご褒美として、川村学園は四ヶ月アメリカ行きを認めてくれました。その頃、アメリカに戻り、ユタ大学で教授になっていた小玉先生から、研究のチャンスが与えられていたので、その申し出をご褒美として認めてもらい、ユタ大学での研究者としてのスタートが一九七六年（昭和五十一年）に始まり、その後十二年間、一九八七年（昭和六十二年）まで川村学園とユタ大学の両方に所属する、大変良い時代でした。

同時にこの時代は、アメリカと言う国の持つ豊かさの中で、実力のある人が、その力量でストレートに勝負するところを毎日見ることができた時代でした。私の三十一歳から四十三歳、一研究者

としての業績が残せた時代でした。その時、常に指導者小玉先生の下、その支持の通りに実験を続け、得られた結果から導き出された考察を、実際に実験で実証し、論文として世に問うことで、論文二十七報を世に出すことができました。同時に、上に最良の指導者がいることが、いかに良い結果を生み出すかを実感した時代でした。

昭和の時代の終わりは、私にとつて上司の下でその部下として力を使ってもらった時代の終わりでもありました。一九八九年の一月は平成の始まりであり、私四十五歳、組織の中で上に最上位の理事長が存在するだけの立場の始まりの年でした。アメリカでの十二年間。あの国は、それぞれの個性、特性が直接評価される国でした。そして同時に、一人ひとりの個性、特性を見抜き、人材として組織的に生かすことのできるリーダーの存在が、組織と組織の競争の中で必須であることを、私に叩き込んでくれました。そして一つ一つの仕事において、自分より優れた力量を持つ人が沢山いて、その人たちがその仕事をやっていただいていたほうが、自分がやるよりずっと早く、そして上手に仕上がることを知らされました。

その後の二十年間、組織の中での私の役割は、いかにその仕事に適任である人を、その任に就いていただくかを考え、配置することに尽きます。そして、その仕事をいかにやり易くするかの環境を保証することが私の仕事です。とても私は楽が

できます。

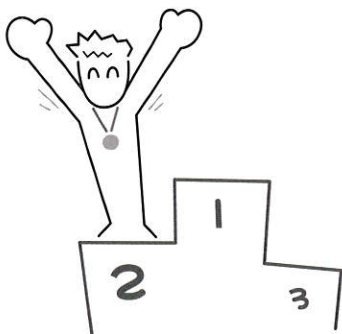
今日、自分の半生を振り返ってみた時、今、大変よい立場を与えてもらっています。しかしこの立場はすべて、自分より優れた人方の力量に支えられております。今思えば、常に自分より優れた上司や友が近くにおいて、ナンバー2でいられた事により、いつもより高い目標が見本を見せてくれて、その人方のやり方を学ぶことで、安心して自分の力を発揮できたことによると信じています。そして、今でも自分よりも優れた人の存在を素直に信じられる自分を作ってくれたこの半生が、これからの人生でも続くことを祈って、毎日楽しく過ごしていきたいと思っています。

【現職】

(学) 村田学園理事長

東京経営短期大学学長

(財) 科学技術振興会理事長



都立三商

第二十九期 土方 敏之

昭和三十四年四月に母校都立第三商業高等学校に入学しました。

一年七組で担任は阿部茂穂先生でした。当時の教職員はそれぞれの担当教科に秀でており、格式高い独特の雰囲気醸し出しておりました。

私は深川で育ったので、だらしないと言うか、柔らかいと言うか、余りキチンとした生徒ではなかったように思います。授業が終わると屋上に行つて、階段上に座つて遠くを見ながらお喋りをしたり、フオークダンスの踊りを見たりしていました。放課後はクラブ活動の写真部に入り、暇さえあれば暗室に閉じ籠つて写真を焼いていました。

今、付き合っている柳田君や泉沢君や亀田君や斉藤君などの友人は、皆一年七組の同級生です。この頃は朝学校へ来る前に配達したり、午後は早く帰り、家業の手伝いをするのはあたりまえでした。

三年間男子クラスで過ごしたので、男女クラスの仲のよい交際をうらやましく思つた事もありました。

臨海教室で大島へ行つたとき、ある日宿舎から徒歩で洞窟を見て宿舎に帰つてきたところ、洞窟に忘れ物をした写真部員がおり、取りに行く事になりました。

先生の『一人ではやれないので誰か一緒に行つてくれ』の言葉に、私と柳田君が同行して取りにいった事や、クラブの予算委員会で活動費を確保した事など、学んだことは数多く思い出も多く、満喫した高校生活をおくりました。

三年生の時には、大先輩の小泉一兵衛（五期）赤札堂社長さんのお話会や市場見学がありました（自家営クラス）。卒業式の夜、これからの仕事として家業をやつて行くのでよいのか？眠れませんでした。

卒業後は、家業の築地魚市場での海老仲買の仕事に就きました。そこには三水会という三商卒業生で組織された市場従事者の会があり、すぐ入会して先輩たちから会の仕事を教わりました。特に葬儀のお手伝いや他校の会や母校などとの渉外活動の係りとして担当、先輩の後をついてゆきました。

商業学校の衰退問題が生じたとき、斉藤克先生は五年制にしてより専門化した教育を展開して大学院と同等の知識を身に付ける学校にしなければ存続しないとされた。

バブルが弾けた時、私は学んでいない事に気が付き、この言葉が頭に浮かんでまいりました。一歴史を学ぶ一の意味がこれを書いていてよく解り、これから励みたいと考えました。

こうしてもう四十八年間三商との縁が続いております。創立八十周年に母校都立第三商業高等学校の名を聞いたとき、私の中では、都立第三商業

高等学校ではなく、都立三商の方がピッタリすると感じました。

これからの

同窓会の楽しみ方（二）

副会長 第三十一期 三浦 康二



昨年度の同窓会で、クラス会、同期会の企画のしかた、会場の設定、盛り上がりの内容とか、同期会を企画から案内状の発送、出欠取り、当日の運営、記念写真の発送までと、すべてを一括して請負う会社等の紹介をいたしました。

これからもシリーズとして「同窓会の楽しみ方」について色々とは様々な観点から提案をしていきたいと思ひます。

今年の三月の母校三商の卒業生は、七十五期生となりますが、百八十名の未来の宝が我が母校より大空に向けて元気に巣立っていきました。それと同時に三商同窓会の同胞となつて、これからの同窓会を見事に支えていってくださる事でしょう。

さて、この七十五期生の百八十名の男女の内訳ですが、二十二%が男性で七十八%が女性となっております。

まずそこで、これからの同窓会の未来は、女性が圧倒的に多いというのが現実であります。組織に於て、女性を大事にしないところはその組織の発展は考えられないというのが、一般的な常識であります。クラス会や、同期会にも女性がどんどん積極的に参加をいたし、女性を重視した役割と内容、又、飲食までも気を配りながらの運営をしていかなければならないと考えております。したがって、三商同窓会の組織に於いても、どんどん女性の積極的な進出を望むものであります。三商同窓会の中核となります評議員への参加、各種行事への出席、又執行部役員の理事、副会長等に女性の積極的登用が大事な要点となっております。これらを踏まえながら活動していくところに、クラス会や、同期会の母体とも言える三商同窓会の充実と、発展があるものと考えております。あくまでも、同窓会は、みんなで楽しく、そして朗らかに、クラス会に行つて良かった、同期会に参加して良かった、同窓会に出席して楽しくて良かった、とみんなが一同に、都立三商の卒業生で良かったと思える、そういう同窓会でありたいと思っております。その為には、これからもクラス会、同期会の会場で、こんなにも素晴らしい、楽しい会場の紹介と三商同窓生のお店で、こういうお店がたく

さんありますよ、と言う紹介を次回でいたします。

さて次に同窓会の活動について述べさせていただきます。同窓会の活動はあくまでも基本的にボランティア活動です。ボランティアとは、人のために何か行動する事です。英語の「ボランティア」という言葉の語源は「自ら意志をもつ」という意味のラテン語です。他人から言われてやるのではなく、自らの意志によつて、人のために行動する事であると思います。

母校都立三商から巣立っていった同窓生は実に二万五千名になります。ここに創立八十周年の伝統と歴史がものがたつております。その良き伝統と誇りある歴史の同窓会を皆様一人ひとりの情熱と力でさらに発展させていっていただきたいものと思っております。

同窓会活動も何か「してあげる」という傲慢さではなく、「させてもらっている」という謙虚さをもつて、皆さんが行動しております。これがボランティアの基本であると思います。これから多くの同窓生の同窓生による同窓会が年代を越えて、あらゆる場所にて、楽しく、ほがらかに開催できますように願っております。

次に個人情報についてですが、同窓会名簿の取り扱いに於いて、平成十七年四月に施行された、個人情報保護法で名簿の作成では、利用や管理の方法を法や条例で定めた努力義務が必要な為に、各卒業期（名簿が現に判明している分）毎に、同

窓会事務局で、個人情報の漏洩や、不適切な取り扱いによる個人のプライバシーの侵害などを防ぐように適正な管理を行っております。

したがいまして、これからの同窓会全体の名簿の発行等は、「利用目的の達成に必要な範囲のみで取り扱わなければならない」との法例にしたがい行っております。作成については各期毎の同期会によつて適正な管理のもとに行つていただきたいと思ひます。

さあこれで皆様も明るく楽しい同窓会活動に参加していただけるものと思ひます。二十一世紀は「ボランティア精神の時代」です。これからの同窓会をすばらしい方向に大きく変えていくのは皆様です。「自分のことで精一杯」「だれかがやってくれるだろう」という依存心を捨てて「自分がやろう」と立ち上がって下さい。

そしてみんなで三商同窓会を母校の為に、二万五千名の同窓生の為に、又、これからの新しく卒業してくる未来の同窓生の為に、皆様の惜しみない力を注いでいただきたいことをお願いいたします。

偉人の言葉に「人のために火を灯せば、自分の前も明るくなる」と言われている。さあ私達と共々に三商同窓会に未来あれ、そして栄光あれと頑張つてまいりましょう。

特別寄稿 含羞の系譜——旧制三商の青春群像に見る



第十期
柴田 榮一

ゆくりなくも古今集千百年、新古今八百年。王朝のそのかみから「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」（紀貫之『古今和歌集』仮名序）とか。下つて俳人三百万人、歌人三十万人、詩人三万人と称される空前の短詩型ブームなのだが、凡そ世間話でも、文芸のことが話題に上るなどということはまずない。職場や地域の同僚でも、詩・短歌・俳句のたぐいをやっているなどということはおくびにも出さないものだ。家族にさえ内緒におきたい。恋にも似て秘めやかな慰みといおうか、詩歌の道——それは一面含羞の系譜なのである。ということ、存外知られていないその辺を母校三商の青春群像に見てみた。（本稿の構成上、原則として文中の敬称を略させて頂いた）

戦後詩胚胎の地 母校三商 文学界に百花繚乱

《文壇へ門戸》商業学校だからとかく実業界のみに発展かと思いがちだが、多くの方面に人材を輩出してきた三商である。一例が、学界を見渡す

と長坂源一郎※注1（第七期卒業生、南山大学学長、専門は物理学）、西田浩三（八期、国際基督教大学財務副学長）、高木幸道（十一期、中央学院大学学長、教育心理学・産業心理学）、稲葉三千男（十二期、東京大学新聞研究所長、マスコミ論）、芳賀登（十二期、筑波大学副学長、近世民衆史）、岡野加穂留（十五期、明治大学学長、比較政治学）、大谷啓治（十六期、上智大学学長、哲学・ラテン語）らを数える。

※注1 三商（東京府立第三商業学校）は昭和三年創立、この年の入学者を第一期生として順次卒業期数を表した。十年目の昭和十二年に入学した私たちは、十期生と呼ばれた。

昭和三年、当時東京・下町初めての府立商業校として深川の地に開校した三商だが、私たちがいた頃の校内は戦時下とはいえ、どこか下町特有の風通しのよいところがあつたふうに見える。在学中から文学に目覚めた幾つかのグループが、そこに胚胎し、花開いたのも偶然とばかり言えないかもしれない。

その頂点をなしたのは、後に昭和二十二年さら

紙の詩誌『荒地』（あれち）を押し立てて、わが国戦後詩の構築に足跡を残すこととなる北村太郎、田村隆一（ともに三商第八期生、昭和十五年卒業）であろう。二人は既に越中島の学窓から、中桐雅夫、鮎川信夫、三好豊一郎ら誌壇の一角と交渉を持っていた。いずれも後年、北村、田村らと相携えて『荒地』の創刊同人となつた顔触れである。

弱冠二十歳代で戦後詩の分野に主流を形成することとなつた『荒地』だが、その命名は、アメリカ生まれのイギリスのモダニスト詩人T・S・エリオットの長編詩『荒地』（The Waste Land）に由つている。エリオットが描いた第一次世界大戦後のヨーロッパを覆つた精神的混迷状態に、敗戦後のわが国をなぞらえた「現代は荒地である」という当時の日本荒地派の宣言は有名である。

かつてのモダニスト詩人・佐藤義美教諭の膝下から俊才田村隆一、北村太郎らを送り出した三商を、わが国戦後詩のメッカと言つてもあながち見当違いではないだろう。

田村隆一にはエラリー・クイーン『Yの悲劇』の名訳もあり、早川書房の編集長として『ハヤカ

ワ・ミステリ』を大当たりさせた。北村太郎も数多の海外推理小説などの邦訳を手掛けた。『不思議の国のアリス』の翻訳（集英社文庫）で、主人公に「……じゃん」とハマっ子言葉を使わせる現代風の訳が新鮮だった（引つ越しマニアの北村だったが、横浜の街が好きで十年ほど住んだことがある）。北村も田村も既に鬼籍に帰した。

北村は浅草の蕎麦屋の息子。旧制東京外語を経て東大仏文科に進む。「下町っ子は遊び好きで小心、少し残酷ではにかみ屋。僕もその口だな」（昭和六十年十一月二十六日、朝日新聞夕刊「新人物記」85）。田村は大塚花街の鳥料理屋の長男に生まれ、明大文芸科を出る。街っ子の詩人たちは、昭和十八年十二月ともに学徒出陣し、田村は敗戦時に滋賀海軍航空隊で予科練の教官、北村は埼玉県大和田通信隊の軍令部特務班で米軍暗号文の解説に従事していた。

太平洋戦争の激戦地、フィリピン・バターン半島で負傷した俳人鈴木六林男（むりお）に「遺品あり岩波文庫『阿部一族』の超季俳句があるが、田村は海軍に入る日、俳書『芭蕉七部集』とスタンダールの自伝『アンリ・ブリュラーの生涯』の文庫本二冊を携行する。本題から逸れるが、入隊の日を持ち込めるのは、身の回りの品を詰め込んだ「奉公袋」一つなので、よく座右の書を小型な文庫判で忍ばせていたりしたものだ。私も句作の伴侶にと、手軽な『虚子編・季寄せ』を持つ

ていったのを思い出す。

ただし軍隊内では書物は殆ど許されなかったと言つてよい（私の『季寄せ』も世話掛の准尉に預けつ放しに終わった）。活字への飢餓感に襲われ、「新聞なら私物の泥靴をくるんでおいた古新聞紙まで読み尽くした。メンソレータムの効能書でも裏表、それこそ舐めるように読み返した」（日本戦没学生記念会編、岩波文庫『新版きけ わだつみのこえ』竹田喜義・手記）といった経験は誰にもあつたのではないか。鈴木六林男は隊内の検閲に引つ掛かるのを慮り、自作の句を死に物狂いになつて「頭の中にかくし」（暗記して）残したと述懐する。さて情報戦の特務班に回された北村のほうはといえば、米側の電信解説は出来ず終いだったが、交信の頻度で敵の作戦の変移は予測できた（昭和五十九年四月五日、毎日新聞）と言う。

※注2 森嶋外作『阿部一族』。

※注3 『虚子編・季寄せ』は、『同・新歳時記』の簡略版。

簡略版。

『時流に明敏』詩人北村太郎は本名松村文雄、朝日新聞東京本社で編集局校閲部長、調査部長を勤めた内勤記者であった。私は新聞製作コンピュータ化の技術開発チームにいた昭和四十三、四年、校閲部門への対応を担当、校閲部次長時代の松村氏と仕事のうえで交渉があつた（当時、迂闊にも三商の先輩とは露知らなかつた）。新聞紙面づくりがそれまでの活版から電子化に移

行した場合、校閲作業の受けるメリットとデメリットとを洗い出すもので、松村氏が現場側の窓口になつて対応してくれた。

※注4 調査部は記事の切り抜き、写真、図書などの資料を整備して、執筆の参考や紙面制作に供する新聞社内の図書館のような部署。現在のデータベース・セクション。

年輩の新聞人には機械化に拒否反応をみせる職人気質のところがあつて、われわれのプロジェクト・チームは社内でも四面楚歌だった。そんな空気のなかで、松村氏は技術革新の意義に理解を示してくれていたのも、私も随分手間が省けたのを覚えていいる。今になつて思えば、詩人としての資性が時勢を鋭敏に捉えていたのであろう。

松村氏は五十歳を過ぎて「持ち時間が気になり」だし昭和五十一年、定年を一年前に朝日を退社してから、詩集『犬の時代』（第三十四回芸術選奨文部大臣賞、昭和五十八年度）『笑いの成功』（第二十四回藤村記念歴程賞、昭和六十一年）など堰を切つたように作品を発表、健在を印象づけていただけに平成四年十月二十六日、六十九歳での歿が惜しまれた。個人詩集、十二冊を残す。親しかった詩人正津勉は「最上の日本語の使い手をつた」（平成四年十一月十一日、読売新聞夕刊）と嘆く。北村には双子の弟の松村武雄がいて、泉下の兄に捧げたその第二句集『雪間』（書肆山田）で「兄死後の北窓塞ぐこともせず」「元氣かと雪の絶間

の墓たたく」などの句を献じた。二人は三商の同期。そろって級長だった。在校中、兄弟でクラスを入れ替わって授業を受け、代返しても誰も気付かなかつたという茶目つ気も持ち合わせた。武雄は短歌、俳句を能くし、俳句のほうでは『沖』（能村登四郎主宰）の同人であったが、平成十三年十二月十七日死去した。七十九歳。

私は在社中、不明にも松村文雄氏が当代の高名な詩人とは存じあげなかつた。もつとも松村氏自身は、新聞社の仕事場では詩を書いているようなそぶりは見せず、そつと「君も社内で詩を書くなんていつちや駄目だよ。気が変だと思われるからね」と忠告してくれたほどだったと、校閲部の後輩だった菅野拓也記者（後に学芸部。現在詩人、舞踊評論家）は追想する。私にも俳人で朝日を退いてから覆面を脱いだ同輩が何人かいるが、新聞社内の喧騒が、凡そ詩歌などとは対極的なのもまた事実である。それはともかく、もつと早くに松村氏の本領、あるいは同窓とわかつていたら、と今にして己が不敏を悔やむばかりである。

※注5 戦後を代表した詩誌『荒地』の創刊同人中では、黒田三郎がNHK報道記者の戦後第一期生、中桐雅夫が読売新聞政治部次長だった。後に出てくる作家の津田信（二期生、山田勝雄）も日本経済新聞記者であった。黒田も中桐もそして津田も操觚界から中途退社した点では北村太郎と同様だが、彼らもまた社内で詩人を恥じていたのかどうかは分からない。

《人生の苦難に耐え》松村氏が朝日新聞に入社したのは、昭和二十六年十一月。二年目の二十七年八月二十七日、遅番勤務で夕刻校閲部に出社すると、デスク※注6と呼ばれ、同朝、川崎沖へ潮干狩りに出掛けた松村氏の若い妻と幼い息子が、高波に呑まれて水死したという記事のゲラ（校正用の試し刷り）を見せられる。翌日それを報じた各社の朝刊のうち、毎日新聞が「校閲部員、松村文雄さんの妻……」とあるべきところを「機関部員」と誤植したのを見付け、「校閲という文字が機関と間違われやすい」ことを知った（昭和五十九年四月五日、毎日新聞）。校閲マンとして働き盛り。最愛の妻子を一時に失うという悲愁の極みのうちにも、プロ意識が働いたのであろうか。一方、この事故は松村氏その後の詩業に大きな影を落とすこととなる。心の奥底に、生と死の命題が横たわるようになる。

芸術選奨文部大臣賞となった詩集『犬の時代』の選考理由は、「人生の苦難に耐えながら新鮮な現実感と人間的な真実を見失わず、今日の詩の一端点を達成した」とした。詩人でもある作家清岡卓行はまた「東京下町育ちの詩人が若いころ聞き惚れた名人落語の話法が、モダニズムを通過し、さらに人生の辛酸によって鍛えられたのではないか」と同詩集を評した（昭和五十九年三月十五日、朝日新聞夕刊）。松村氏自身が、北村太郎の筆名を「鬱の磁石は常に北を指し、太郎とは一個の孤

独な男子そのものを示す」（昭和五十九年四月五日、毎日新聞）と言っていたのが想起される。

※注6 デスクは、編集局の内勤部署で部員を指揮する者を指す新聞社内独特の呼称。戦場のような編集局内で、机に腰を据えて仕事をすることでから名付けられたらしい。

一つ「朝の鏡」という北村の詩を引く。第一詩集の『北村太郎詩集』（昭和四十一年刊）に収まる。冒頭の一節は有名で、最後の二節も殆どその繰り返しだが、ここでは後のほうを掲げる。（／は行替えを示す）

「朝の水が一滴、ほそい剃刀の／刃のうえに光つて、落ちる――それが／一生というものか。残酷だ。／なぜ、ぼくは生きていられるのか。嵐の／海を一日中、見つめているような／眼をして、人生の半ばを過ぎた。」

人生を一粒の水滴と観じたのは、三十歳で妻子を亡くした北村の無常観であったのだろうか。

《絶筆「死よおこる勿れ」》同じ戦中世代の代表的詩人でも、田村隆一のほうは「大塚のゲリー・クーパー」などと自称し、ダンディーで飄々乎としたッ酔いどれ詩人ッとして人気があった。「潔癖な感性と先鋭な言語意識で切れ味鋭い絶唱を次々生み、戦後詩の一方の標高を築く」（前掲朝日新聞「新人国記」85）。昭和三十八年詩集『言葉のない世界』で第六回高村光太郎賞、五十二年『田村隆一詩集 1946～76』の第五回無限賞、

六十年『奴隷の欲び』で第三十六回読売文学賞など詩壇の評価を得、詩人としての業績から平成九年度日本芸術院賞(第五十四回)を受けた。平成五年十月、東京の国立競技場(旧神宮外苑競技場)での「出陣学徒壮行の地」碑除幕式では、元学生兵田村の「十月の雨のなかで／消えていった足音は／いま／人はどの耳で聞く……」という詩が読まれた。

酒が好きで、銭湯が好き。鎌倉に悠悠自適の日々を送り、平成十年八月二十六日七十五歳で死去した。「死よ、おごる勿れ」とのイギリスの宗教詩人ジョン・ダンの詩題を紙に書き付け、冷酒を一合飲み「うまい。もういい」と逝つた(同年九月九日、朝日新聞夕刊・借別欄)。詩誌『荒地』創刊同人七人の最後の死であった。「戦後詩最大の詩人の一人。高踏的な内容を平易な言葉で表現し、大衆に愛された」と詩人大岡信は惜しむ。平成十二年八月、三回忌に『田村隆一全詩集』(思潮社)が刊行された。千五百ページ、厚さ八十一mm、重さ二千二百六十g。戦後詩をリードした存在感そのままの大冊である。

田村隆一が生前最後の姿を人々の前に見せたのは平成十年正月三日、新聞の一ページ全部を使つた出版社の広告だった。背広と外套に長身を包んだ渋い姿はいわずと知れた田村氏だが敢えて誰とは明かさず、紙面には「宝島社」の広告主名と「おじいちゃんにも、セックスを」というコピーがあ

るだけ。田村の死後、同社はこの広告を黒枠で囲んだ全面広告を再び出し、「じゃあみなさん、これからいろいろ大変だろうけど、お先に失礼します」とコメントを付した。ユーモアと批判精神に富んだ本人のこれは勿論代弁である。

「立棺」という詩がある。昭和三十一年処女詩集『四千の日と夜』に収められた初期の作品だ。その一節に――

「わたしの屍體を地に寝かすな／おまえたちの死は／地に休むことができない／わたしの屍體は／立棺のなかにおさめて／直立させよ」

毎年、広島・長崎・終戦と弔いの時節がやってくると、思い起こされる田村の祈りである。

終戦といえればそれから六十年が経ち、「戦後」が一つの歴史として捉えられる時世になった。詩壇でも『現代詩手帳』平成十七年八月号(思潮社)が、当代の詩人十氏の選による「戦後六十年名詩選九十五篇」を特集しているが、田村隆一の「立棺」など六篇が選に入り、個人別で最多。北村太郎も二篇挙げられ、戦後詩の旗手としての評価を裏付けた。

《教師に触発され》北村太郎、田村隆一ら三商八期生の場合は、四年生頃から文筆活動のサークルができ、西脇順三郎の日本語で書いた処女詩集『アンバルワリア』(ギリシヤ語で穀物祭の意)のタイトルを同人誌名に借用した。卒業後も親交を持ち、北村の双子の弟の松村武雄、加島祥造(詩)、

横山金吾(俳句)、玉田春彦(仏文学)らが出た。

詩の世界では下って昭和六十二年、鈴木満(三商十一期生、昭和十七年十二月戦時繰り上げ卒業)が、その第五詩集『翹』(はね)で第二十回「日本詩人クラブ賞」(同クラブ主催)を受けている。学級受け持ちの高橋昇一先生(習字担任、雅号日儔※注7 IIにつちゅう)の「芸術的香氣」とその俳句に触れ、級友の新井健太郎と俳諧連歌を巻いていたりしたのが、風雅の道に繋がったと言う。水戸市に在住。

「ぼくが住んでいた深川は 高橋のどぜう 森下のさくら鍋 寄席の永花亭 まさしく庶民の町

夏には露地におしろい花が咲き 軒には朝顔の蔓がからむ 縁台に涼む夕闇の空を 蚊食鳥が飛び廻っていた」(平成九年第六詩集『月山』所収、「富士」冒頭の一節)と、「昔の面影を失った」※注8 深川を歎く。因みに兄弟姉妹四人とも三商生であった。そういえば本稿書き出し部分、学界列伝中の岡野加穂留・明大学長の三兄弟も同様である。

※注7 書家、高橋日儔先生が古澤徹初代校長を偲んだ一句に「先生の遺硯を洗ふ寒さかな」がある。

※注8 三商は戦後の昭和二十四年新制高校に移行とともに男女共学校となり、現在では女子生徒が多数を占める。

その道の先輩の北村太郎、田村隆一の二人の場合、佐藤義美先生(国語・作文担任)の影響を受けたものと、鈴木満は見る。事実、北村太郎自身も、在学当時を「(佐藤)義美さんの詩は、モ

ダニズムでした。私は、ちよつと古い形の詩を書いていましたので、先生の詩がたいそう粹で、モダンに思われました。そして、しだいに私は、先生の詩を通じて、当時のモダニストの詩を多く読むようになったのです」と回想する。先生というにはびつたりこない佐藤先生を、みんなは「義美さん」と呼び慣らわして親炙した。

世を挙げて臨戦体制へと傾いていった時代にもリベラルな考えを持つていた佐藤先生は昭和十六年春、数人の先生方と三商を去った。「戦時色の強まる教育方針に同調し得ない教師は当時の状況では、心ならずも学窓から離れざるを得なかったと思う」と、戦中戦後と先生と起居を共にした十期生岩佐一男は見る（『十期会報』第十号Ⅱ平成六年）。詩人北村太郎も「何しろその時分は、軍隊教育色の強まりつつある雰囲気の中でしたから、義美さんに居心地がよかつたはずはありません。修身の教官や配属将校の悪口を、よく言っておられました。同僚の先生方と喧嘩もなさつてたようです」と振り返る。

佐藤義美先生は、もともと童謡・童話作家。その作詞に芥川也寸志、高木東六、團伊玖磨、中田喜直、中山晋平、服部公一、服部正、弘田龍太郎、箕作秋吉、米山正夫らが作曲者として名を連ね、「まじいこの まじいこの こねこちゃん」の歌い出しの『いぬのおまわりさん』（大中恩ⅡめぐみⅡ作曲）や『グッドバイ』（河村光陽作曲）の童謡

は広く歌われている。佐藤先生は十五歳という感じやすい少年期の頃から童謡に手を染め、『グッドバイ』は早稲田大学国文科一年の時に作詩、『いぬのおまわりさん』は晩年の作である。

昭和四十三年十二月十六日死去に際し、「童謡葬」（同月二十一日青山葬儀所、坪田譲治葬儀委員長）をもって遇され、作家石川達三、田村隆一らが弔辞を読んだ。享年、六十三歳。石川達三は早大時代の同級生、その小説『自由詩人』は佐藤先生がモデルとされる。

交遊のあつた児童文学者らによる「よしみ忌」の集いが、毎年忌日前後に続いている。没後の昭和四十九年『佐藤義美全集』（全六巻、同刊行会）が刊行され、五十年度の「赤い鳥文学賞」（第五回）を受けた。

《芸術は長く人生は短し》ついでこの間、朝日新聞夕刊紙上で文化面に佐藤義美作詞「ヨット」（湯山昭作曲）のことが取り上げられていた。事の発端は、前月に載つた一女性記者の署名入りコラム。彼女はカモメの街、アイルランドの首都・ダブリンに出張したが、カモメが何と鳴くのか旨く文字で表せないという嘆きであつた。これを読んで寄せられた読者からの便りのなかに、童謡「ヨット」で「カモメのうたはギイヨギイヨ」と表現しているのを紹介されて、その記者も小学校の音楽で教わつたのを懐かしく思い出したと言うのである。

「芸術は長く人生は短し」というが、先生没し

て三十七年。その作品が、なお人々の胸裡に生きているのを見知つた。ヨットといえば、多年の夢だつたヨットを手に入れて逗子に仕事場を持ち、仕事の傍ら乗つていたという晩年の先生の生活がふと思われた。

佐藤先生の童話作品に「王さまの子どもになつてあげる」というのがある（昭和四十年刊行の同名の童話集に収録）。

——戦争に明け暮れてきたある国の王様が歳をとり、自分の子供が欲しくなつた。神様をお願いすると、今から生まれる子供たちに相談してみようというので連れられていく。すると子供たちの中の一人が、今後二度と戦争しないなら王様の子供になつて生まれてあげると言う。それを聞いた王様は大喜び。これからどんな敵が攻めて来ても、たとえこちらが負けることになろうとも、戦争は絶対にしないと誓うのだつた。見ると、その時庭の薔薇の木から棘がなくなつていた——といった粗筋である。

佐藤先生には、まだ知られていない詩・童謡・童話が数多くあるという関係者の話だが、この童話「王さまの子どもになつてあげる」は佐藤義美生誕百年に当たり平成十六年五月一日、出身地大分県竹田市で記念事業の一つとして脚本化・上演された。戦後六十年。わが国では「戦争の放棄、戦力・交戦権の否認」を規定した憲法第九条を守るのか、手放すのかの議論が起きている。佐藤先

生がおられたら、何とされるだろうか。

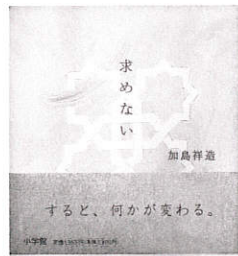
郷土竹田市に「佐藤義美記念館」があるが、弟子の童謡詩人稗田宰子が建設し、所藏品とともに同市に寄贈、平成十年にオープンした。記念館のホームページに掲載の年譜によると昭和三十九年、原爆否定の長編童話執筆のための資料集めに長崎・広島へ旅行とあり、死ぬまでに書き上げられなかったその未完の作品が展示されている。

《尚、活火山も》八十五歳の八期生加島祥造がいまトーク番組、インタビュー記事と引つ張り嵐だ。

「求めない——/すると/現実がよく見えはじめる」。神田に生まれ、実家が絹織物業。越中島から詩誌『荒地』を通して田村隆一や北村太郎たちの仲間の一人だった加島が語りかける。その平成十九年七月上梓した手のひらサイズの本、『求めない』（小学館）は、どこを開いても「求めない——/すると、何かが変わる」といった一種独特のパラドックスな詩行の羅列だ。迷った時、苦しい時に「求めない」とささやいてみようという教え。これには「足るを知ることは富なり」という古くからあった老子の思想がベースになっているのだと自身はいう。

早大英文科卒。信州大、横浜国立大などで英米文学を講じたが、七十歳で老子に出会い、自然との交流を求めて現在、信州伊那谷で独居の日を送る。老子といえ七十七歳の境地として「心の欲す

る所に従って矩を踰えず」といったのは孔子だが、孔老二大学派の思潮が現下の地球環境問題にも一脈相通じるように思えてくる。「心が軽くなった」と反響を呼び、三十九万部。文芸単行本・年間ベストセラー（トーハン調べ）の六位に入ったのは、そんな背景もあつたかも知れない。



《焦土のなから》話の筋を学校時代に戻して、三商勉学中の十期生（昭和十六年十二月戦時繰り上げ卒業^{※注9}）に、「碧淵俳句会」と名乗る同好の集まりがあつた。思えば身の程知らずだったが、中村草田男、安東次男ら第一級の門を叩いていたのである。

※注9 対米開戦目前の昭和十六年十月、大学、専門学校、実業学校の修業年限を臨時短縮する勅令が出された。これにより三商では最上学年であつた私たち十期生が卒業を三カ月繰り上げて、昭和十六年十二月社会に巣立った（上級校へ進む者は三月まで残った）。同様の措置は続く十一、十二期生にも及んだ。その後は軍需工場への勤労働員が恒常化し、十三期生は最後の一年は授業なし、十四期生に到つては一年繰り上げ卒業となつた。若者の殆どが、戦場か軍需工場に赴い

た。空襲も激化。前線と銃後のけじめが消し飛んだ。「碧淵」の顔触れは油井利喜之助先生（漢文担任、雅号禾刀¹¹かと）に就いて個性を競つた海老澤久夫、角谷清、金澤武佑、柴田榮一、竹田一郎、正藤正雄、持田政雄（旧姓江原）、山田一郎ら。小田急・参宮橋の糸瓜庵（お宅の玄関口に糸瓜が生つていた）にも幾度か伺つて、先生から指導を受けた。平成六年一月『十期会報』に「碧淵俳句に見る戦中戦後」の回想録を掲載したが、そのなかから三句を。

歳晩や眼つむれば友みな兵装 海老澤久夫¹¹俳句仲間でも年長の山田一郎は一足早く学徒出陣したが、そのまま大陸から還らなかつた。相次ぐ入営、入団に同期生同士送り送られしたが、八名（判明分）が戦陣に斃れた。彼らがいままで若々しい記憶のままなのは哀しいという追悼の句である。一方、残された我々も八十路余り。たつた一度の人生を、戦没者の四倍の上、生きたことになら。生を偷む¹²。ことなきか、戒めとしたい。

西市の灯と離るれば焦土なり 正藤正雄¹¹江戸時代から続く浅草鷲神社の西の市。関東大震災の時も、先の戦争中や敗戦の年も欠かさずに挙行されて、焼け跡から沢山の参詣人を集めた。大火のたびに発展してきた江戸。その町つ子たちの心意気であつたのだろう。句は終戦の明くる昭和二十一年の作。社殿は空襲で鳥居を残して焼け落ち、縁起物の熊手も紙に描いたお多福を竹に付け

ただけという急場凌ぎだったとか。

蚯蚓鳴くとラムプの芯を太くする 柴田榮一
油井先生は敗戦直後、信濃の山地に退いて開墾に従事した。教育者として責任を取られてのことと伺った。昭和二十一年九月、句友三人でその隠棲先を訪ねた。秋はものの哀れを象徴するように、色々な虫とともに蚯蚓（みみず）や蝮（おけら）からもジーンと鳴くという。草庵の一夜。「蚯蚓の声……」といいながら、先生は辺りの寂しさを掻き消すように手を延べてランプを明るくした。

終戦の翌々月、廃墟のなかから逸早く謄写版刷



りの『碧淵』（月刊）を復活した。各人勤め、自営、学業の傍らだったが、十二月号の後記に「飢餓線上にあつて冬季を迎えた国内事情のもと、各自持場々々で此の死線を乗り切るべく御健闘を祈る」と編集当番、角谷清は呼びかけた。花鳥諷詠派、人間探険派などおのずと志向する結社は別れたが、それがまた互いの刺激となった。たまたま昭和二十二年、俳壇総合雑誌『現代俳句』誌上の「新人俳句」企画で柴田の二十句が中村草田男の推薦を受けたが、畏友との切磋琢磨の結果に外ならな

かった。草田男に「木葉髪文藝永く欺きぬ」（昭和十一年、第一句集『長子』所収）の一句を見るが、嘗て私たちを句作に掻き立てたものは、内向的だったが純であったと思う。

以後、一貫して俳句に打ち込んできたのは、唯一人期外から参加していた寺井良一（雅号禾青、十三期生）である。寺井は俳誌『雲母』（飯田蛇笏創始）の巻頭句作家などを経て、現代俳句協会会員。江戸川区平井に居住。角川書店『俳句年鑑』（二〇〇五〜七年版）に、「梟から漠然と水洩れはじむ」「明易き枕の中に森がある」「鯨の内部は安土桃山花鳥の図」となお新鮮さを失わない。旧同門のその後の句から――

持田政雄Ⅱ『十期会報』（平成七年七月）ほかに、「力尽き竹の子ついに抜かれけり」「火を点す命知らずの螢かな」「焚火縄結びしままの姿かな」

柴田榮一Ⅱ中村草田男編『萬緑合同句集』（昭和三十八年七月）に、「薰風にバリバリ開く母の便」「汽罐車二輛罐鳴り和して秋の山」「星が降るよな粉噴く柿は拭かで囁る」

油井先生は昭和三十六年春に上京され旧『碧淵』門下生と再会したが、平成五年三月六日、八十五歳で死去。俳句の教えを享けた山田一郎は戦死、海老澤久夫、角谷清、竹田一郎も今や亡し。天上で、先生を中に運座を囲んでいるかも知れない。

『悲運のうち斃れる』編集者として長く文壇に腰を据えてきた大村彦次郎（十九期）がその著書

『文壇うたかた物語』（筑摩書房）のなかで、作家津田信を取り上げている。津田（本名山田勝雄）も三商の十二期（昭和十八年十二月戦時繰り上げ卒業）である。「これまで芥川・直木賞の候補に何回も上がりながら、受賞できなかった作家には、芥川賞のほうに阿部昭の六回、川上宗薫、吉村昭の四回、直木賞には中村八朗の七回、長谷川幸延、滝口康彦、津田信の六回がある。津田さんはこれに芥川賞の候補が二回加わる。こうなったら、不名誉というより、候補回数も作家の実力を示す勲章と思えばよい」。

芥川賞は純文学、直木賞は大衆文学が選考の対象とされるが、戦後中間小説の流行などを反映して、両者の区別がつきにくくなり、盪回しされたり、またその時の対抗作品の顔触れといった巡り合わせがあった。津田は日経新聞記者の傍ら私小説を信条とし小島政二郎に私淑して長編「日本工作人」などを書き、のち文筆一途の生活に入ったが、素志を貫けぬまま昭和五十八年、五十八歳で亡くなった。「日本工作人」は終戦直後、下士官だった津田が国共内戦下の満州（現在の中国東北部）で、部下や旧陸軍の軍医、看護婦らとともに八路軍支配下の病院で働かされた数奇な体験に基づいており、雑誌連載中と単行本になってからと連続二回直木賞に擬せられた話題作であった。

『卒後半世紀の開花』時代はくだって平成四年十二月、三商元十二期生の集団が文芸同人誌『ビ

タノバ』(記録文化社、年二回刊)を立ち上げた。石川恵一(筆名謙二)、市川光次(市川廣康)、木村順治郎、鈴木康之、田中三代吉、内藤登(藤士郎)の六人である。彼らもまたクラスメート時代、同気相求めて、文学に熱中。みんなの持ち寄った短編、詩、俳句原稿を綴じ込み、『蝌蚪』の誌名を表紙にして回覧、合評していた。「皆の中にいれば解放的な気分で、自由にものがいえた」と、市川廣康が『ビタノバ』(第一号≡平成四年)の小説のなかで追懐している。

在校中の十二期生のメンバーの一人に後の作家津田信がいたが、早く物故した。また市川廣康は虚無的な生涯で大正期文士の一類型とされる武林無想庵を義父とし、著作に「海を贖めて」(平成二年二月作、単行本)「海辺の自画像」(平成四年八月作、『ビタノバ』第一号所収)「海から聞こえる」(平成五年二月作、『ビタノバ』第二号所収)の小説・海三題ほか。彼ら十二期生たちは三商受験のさなかに評判の吉澤徹初代校長が死去し、その讐咳に接することが出来なくなつたことを残念がる。受験生に聞き書きさせる慣例の校長講話は、教頭池永新太郎が代読した(『ビタノバ』第九号≡平成八年)。

『ビタノバ』の誌名は「知人から元気の出る葉みたいな名前だといわれた」と市川廣康が言っていたが、「新生」の意。「老年になつたわれわれですが、われわれには老年はありません。常に前進

以外にない未来しかないと思います。書けるといふ十分な時間を持つてるといふ事はなんと幸福なことではないでしょうか？」と、創刊号の後記に記す。地球儀に日本列島と羽搏くかのような双葉を配した表紙のデザインも、年齢を感じさせない。

ともあれ雑誌『ビタノバ』が、卒業後半世紀になる同期生を中心に固めたというのもユニークな存在であつたが、平成十一年十一月の第十四号でひとまず幕を降ろした。三商旧友を軸としながら内輪の愉楽にとどまらず、活版印刷で誌代を付し世に問うたのは、『ビタノバ』が唯一。六十歳半ばといわば恵まれた境遇のなかで始めたという特殊性はあるにしても、文壇へ撃つて出た志は壮とすべく、またそれに耐える内容を具えた。

《草の根の文筆活動》片や十一期生の詩人鈴木満が「灰になつた」深川を愛惜すれば、こちら十二期・藤士郎は返つて来ない心の故郷・神田をいとおしむ。「三途河岸 百本杭」という軽妙な語り口の誌上連載(『ビタノバ』第六号≡平成七年≡第十四号≡十一年)である。何やら歌舞伎めいた題名だが、三途の川を目前に悔い・繰り言の数々といった発想であるらしい。舞台は昭和通りに面しながら僅か数十世帯の小さな町・東紺屋町、今も神田東紺屋町として現存する。

小鉄工所、豆腐屋、履物店……と、「作つて売る」職人氣質の店が殆ど。家族・地域の絆で結ばれた昭和の暮らし、日本の原風景があつた。子供らの

大多数は塾勉強に追われるわけでもなく、小遣い銭を握り締めては活動写真小屋通いと伸び伸び育つたものだった。一家総出で越す年越しの様子、地べたにアセチレンガス灯の縁日の夜店など、もう見たくとも見られない情景が活写されている。筆者の父親の稼業が布団屋だが、小僧時代から鍛



えられた手捌きで敷き布団・掛け布団を仕立ててゆく技の凄さを、スローモーションでも見るように描き出す。祖父が生業とした小さな曳き屋台のお好み焼き屋には、様々なネタに真鍮のヘガシを操る職人芸があつた。そのうち戦時統制で材料が手に入らなくなり、商売屋も軒並み先細りに。やがて大戦末期となり、祖父・父は戦災死し残された母と子の逃避行。この平和な町並みが時代の嵐の中でどう揉まれ、どう消滅していくのか。その一部始終は貴重な筆録だ。

(あの頃は) 忠義、孝行、義理、人情と今ではどこの世界のことかと思われるモラルが、人々のふれあいの中に脈々とあつた。その代わり人権、差別という言葉はなかつた。数十年の時の流れは、昔と今を遠く隔ててしまつてゐる」と神田っ子の

感慨。「昭和通りは高速道路という野暮な（蓋）で被われてしまい、ビルの町と佇まいを変え小汚くなってしまった」。それについても、微細に互ってよく記憶され描き止められたものである。筆者は戦中派世代だが、激動の現代だからこそ、身の回りの出来事や自分の気持ちを記録していく大切さを改めて認識させられる。

一方、十八歳の市川廣康は戦時疎開地の外房州で生きる刻印を求め、赤禪一つ身に付けて太平洋の沖合へ向かって泳ぐ。すでに徴兵検査も終え、戦況の悪化の中で召集令状がいつ来るかわからなかった。^{※注10} 同い年のような若者たちが特攻自爆について、自分もせいぜい二十歳までしか生きられないと思っていた。戦局に翻弄されて、初恋の女学生とも隔てられる。俳人藤田湘子（しろうし）に「愛されずして沖遠く泳ぐなり」の句があるのを、私はこの市川の小説・海三題を通して読んでいて思い出した。

※注10 明治憲法下では男子に兵役義務があり、徴兵適齢は二十歳とされた。それが太平洋戦争下の昭和十八年十二月、連合国軍の反攻を受けた兵力の消耗を補うため、一片の勅令（議会を経ない）で十九歳に引き下げられた。これにより、まだ十代の兵隊が出征することになった。十八歳から、徴兵検査が始まった。大正十五・昭和元年生まれまでが、徴兵検査を経験している。（いずれも満年齢）

市川廣康は平成十三年七月句集『鬼柚子』、

十六年六月短編『海辺の序詩』、十七年四月句集『ポーブイユ』（フランス語で日常茶飯とか）と今も発信を続ける。短編『海辺の序詩』は七十八歳の著者が、先の戦争最末期下の十八歳を重ね合わせて、今に生きる「無の存在感」を確かめる自叙体。二冊の句集は同じ六十年前に旧級友の石川謙一から影響を受けた俳句の近詠撰である。「薄水やからすの顔が一丁前」「小雪舞う北野の丑の干支守り」「くねくねと春一番の荒川線」「冷やつこ夫婦まじわる箸のさき」「ケータイに少女春気の指せわし」と瑞々しい把握が見所。

市川廣康には短歌作品もあるので、それを。「くそ暑き日ざかりの町の投票所にあえぎ来たから当選しろよ」（『ビタノバ』第一号）「肌あわす瑞々しさの思いあり蔭濃き青葉かさなり合えば」（第三号Ⅱ平成五年）「義太夫がジャズに聞こえておもしろし木偶のたましい婀娜な科つくり」（同）。

《はみだし教師》それはそうと、こうして母校三商の文事の土壤に影を落とした佐藤義美先生、高橋昇一先生、油井利喜之助先生ら旧師たちだったが、佐藤先生が大戦前夜、また油井先生が終戦とともに教壇を去られたことは既に述べた。高橋先生は戦災後、家郷・佐野に帰り、定年まで栃木県で高校教師をされた。この間、平成八年まで十期会の例会に上京、出席されていたが、十五年十二月十八日亡くなった。十期会は平成十五年、会員の傘寿を前にして会の解散とともに『十期会

報集』（合本）を頒布したが、高橋先生との絆を記念するため、その標題を九十四歳の先生にお願いで揮毫して頂いたばかりの訃報であった。

これら三先生方のうち、われわれ十期生の学級担任だったのは、一年D組の時の高橋先生、三年D組の時の佐藤先生だけと意外に少ない。学級編成は毎年行われたが、私はこの高橋、佐藤先生の両クラスに入った。

学年に五つあったクラスのなかで高橋先生が一番厳しく、入学早々、音を上げたものだった。教室の掃除は板の間をモップで磨くが、鏡のように光っていないとお気に召さない。雑巾掛けの跡などは指で撫でてみて、ちよつとでも塵が残っているものなら、やり直した。先生は日蓮宗に傾倒し、なにかにつけ「お釈迦さまは」「お釈迦さまが」と説いた。学校の近くの門前仲町に下宿していて、その前を通ると仄かに線香の薫りが流れ、「南無妙法蓮華経」とお題目を唱えるのを耳にすることもあった。一年D組は二年生と五年生になった時、高橋先生を中心に同じ仲間て記念写真を撮るなどして友情を確かめた。

戦後の十期会に出て来られた高橋先生は挨拶では「今更、諸君に教訓めいたことなど」と言いながら、酔ってくれば乱れた教え子たちの座の間を飛び回って「おい柴田つ、床屋へいけよ」などと大きな声のお説教で笑わせたりした。不精でしていた蓬髪を見逃さなかった。「ちゃんとやつて

ください」という教室での先生の口癖が、頭をよぎった。

佐藤先生だが、軍国主義の高まるなかで自由の雰囲気を感じ取っていた。私は三年生の時に父を亡くしたが、佐藤先生は級友を連れて葬式に家(通学路沿いだつた)へ来てくれ、その後四年生、五年生と先生の担任を外れてからも私の顔を見ると「元気か」と声をかけてくれた。

こと母校三商に関しては清田榮一先生抜きに語れないが、先生が三商の文運隆盛に直接の関わりはなかったとはいえ、教諭から教頭、校長として前後二十五年間在職し、文字通り三商の「生き字引」的な存在だった先生である。その頭脳には各期の卒業生名簿が入っていたといつてよく、卒業後の消息にも詳しくあった。私がこうして三商における文学群生期の人的繋がりを辿っているのも、同期会での清田先生との座談のうち示唆を受けた部分がある。芸文に関する先輩後輩間の接触到、陰に陽に努めておられたであろうことは想像に難くない。

われわれの十期会に出てくる先生方はみな酒が強かったが、清田先生は飲んでも少しも崩れず、話振りが往時のいわば先生口調そのまま。一瞬、昔の三商に引き戻されたような錯覚に陥るほどだ。いかにも先生らしい先生といえはこの清田先生くらいのもので、三商各期の文芸グループに影響を及ぼした佐藤、高橋、油井先生らは、どこか、そ

れぞれの意味で「はみだし教師」の部類だった。

田村隆一によると往時の三商には、昭和六不況の煽りから帝大や一橋出身の教育スタッフが出て、当今なら一流大学がたどころに出来ただろう(新潮45、平成四年七月号)と多士済々ぶりを窺わせる。それはそれとして、私には嘗ての「はみだし教師」たちのことが、今になると懐かしくあるいは有難く思い起こされてくるのである。

《先駆をなした者たち》翻つて生徒たちの側だが、各期には中心的存在がいて同好の連中を率い、開花させた。

八期生のうち北村太郎と田村隆一とで先に詩作を始めたのは北村で、北村が田村を引き込んだ。田村は「東京の下町の商業学校の四年生のとき、クラスメートの北村太郎の小悪魔的誘惑によって、ぼくはモダンビズムの詩に興味をもちはじめた。また彼の紹介によつて、神戸でルナ・クラブを主宰していた中桐雅夫を知り、その同人誌である『ル・バル』に参加することになる」(昭和五十二年八月二十一日、朝日新聞)。同誌が、後に戦後詩の発端となる『荒地』の母体となった。

十期生仲間では山田一郎がリーダー格だったが、初期のガリ版切りや連絡は海老澤久夫がこなすし、彼に「碧淵功労賞」を贈った。山田は学年は皆と同じだったが、歳は一つ上。高名な俳句作家の何人かと当時既に知り合い、作句態度にも厳しいものを持つていた。彼はずつと続けていれば俳

壇で一家を成したであろうに、戦争は逸材を奪い去った。

十二期生グループを引っ張ったのは、後の作家津田信こと山田勝雄。「府立三商二、三年のころ出会った山田勝雄君は、長身で白い肌の見るから文学少年?といった感じである。大人びた小説好きな彼により文学愛好家が集まって、同人雑誌ができたのである」(木村順治郎、『ピタノバ』第七号、平成七年)。この山田も死去し、後の『ピタノバ』には名を連ねていない。

プロ集団だった『荒地』は別として、『碧淵』『ピタノバ』とも三商出身者以外から幾たりかが途中から共鳴、入会しているが、中核は無論三商勢で固めていた。

《二つ校庭に集う》三商の文名を高からしめた上掲の第八期生から第十二期生までが、一緒に在学していた時期がある。昭和十四年四月から翌十五年三月までの一学年間で、それぞれ十二期生は一年生、十期生は三年生、八期生は五年生であった。※注1全校、約千五百名。新入生の十二期生も、最上級の八期生も、一つ校庭で冷水摩擦をし、朝礼をし、遊んでいたのだ。同じ時代の雰囲気を感じていた。

※注1 商業学校など当時の実業学校は、旧制中等学校として五年制であった。年齢的には、今の中学と高校が一緒になったようなものといつてもよい。

このほか上・下級生間でマンツーマンの補習を

受ける「指導授業」の時間や、校外では生徒を居住地域（行政区）^{※注12}ごとに分けグループ活動の単位とした「伍組」の制度もあったりしたので、あるいは学年を超えて見知っていた者がいたかも知れないが、互いに文芸に傾倒していたとまでは知らなかったと思う。冒頭にも触れたように、この種の群れの通性として、はにかみがあり、仲間内以外には、同期の中でも隠していたからである。

※注12 学区制などなく、東京府全域から、また近県からも通学する者があった。

指導授業というのは週に一時間、一年生に三年生が各一人ずつ組み合わされ、英語や漢文といった科目の難解な点を個人的に教えて貰ったもの。十期の山崎順三が、その時の自分の指導生が松村文雄Ⅱ後の詩人北村太郎Ⅱだったことを記憶している。「半数の生徒が移動して、各教室で机を寄せ合って、割と自由な雰囲気ですべてを教えた」と顧みる。下級生からすれば今更というようなことだつて聞けるし、上級生にしても迂闊な教え方は出来ないという自覚を促す効用があっただろう。

詩文鑽仰の底流を孕んだこの一年間に世の中で起きた出来事を、歴史年表から拾ってみるとノモンハン事件、「青少年学徒二賜ハリタル勅語」発布、待合・料理屋閉鎖、国民徴用（白紙召集）令公布、第一回興亜奉公日、ヨーロッパで第二次世界大戦勃発、斎藤隆夫代議士衆議院で反軍演説をし議員除名、「生活綴方」関係者弾圧などの事項が見え

るが、時代の波頭はまだ学園の垣を超えてまでは押し寄せてきていなかった。その三商校内では吉澤徹初代校長急逝の後を受けて今村直人二代校長が赴任、八期生が「鮮満見学団」十九日間の修学旅行に出掛けている。一時は月余に及んだ三商名物の一つ、外地遊学のこれが最後となった。

《面白い学校だった》三商の、いわば「文人列伝」。

三商には変わり者が多いといったのは清田校長だが、それはさておき、お定まりの早熟少年、文学青年が三商にもいたという過ぎなかったのか。そうではあるまい。いずれの面々も在校中から志操を堅持していたのと、同級生中であつて孤峰でなく、連峰を形成していたのがそれを物語る。五年制だったので、付き合ひも長い。十二歳から十七歳と、多感な年頃。鬱屈した心情を抱えた者同士。毎年クラスの組み替えはあつたが、学友として相識り、やがて文芸の道に誘われ、莫逆の交わりと斯道の鍛練を積むこととなるのである。松村文雄Ⅱ詩人北村太郎（八期）、角谷清（十期）、田中三代吉（十二期）ら各期の級長が仲間に入り、意欲を燃やしていたのも共通する。さらに社会へ出ても初一念を貫き、結実したのも軌を一にしている。

日中戦争から太平洋戦争へとかかる時期に、こうした群像を育んだ校風というのは、一体どこから来たものか。詩人鈴木満は「三商という学校は不思議な学校で、文芸関係にも多彩な人脈があるようです」と、多士済々だった教諭陣の影響力を

指摘する。日記帳提出（学級受け持ちの教諭が感想文、時には俳句の近作などを書き込んで返して寄越した）を通じての師弟間の往復書簡的な交流なども、預かつて力があつたはずである。

十二期生市川廣康は『ビタノバ』（第二号Ⅱ平成五年）で「中学三年学年末、友人名取宏が日記を埋めた三行詩を見せてくれて、天衣無縫な言葉にびっくりした。それ以来、ぼくなりの真実をぶつけられる詩の感動のとりこになり、学校に提出する日記にも、ぼくは赤裸々に表現するようになった」（名取宏はすでに故人、『ビタノバ』には加わっていない）と自己の精神形成の跡を振り返っているが、やはり三商が日記を課したことの効用が窺える。

それにしても全校生徒が正課として学び、学舎から天皇の主催する宮中歌会始に勅題詠進もした短歌（当時は和歌と言っていた）の畑から、旗振りが出たというのを寡聞にして聞かない。先に十二期生市川廣康の短歌を紹介したが、あとは詩人北村太郎の双子の弟、松村武雄Ⅱ八期生Ⅱがアラギ派歌人であつたぐらい。本稿の書き出しに



も引いたが、今年に紀貫之らがわが国初めての勅撰和歌集『古今和歌集』を編纂してから千百年、藤原定家らが『新古今和歌集』を編んで八百年の節目になる。一口に「やまとうた一千年」といわれるこの日本固有の文学の三商勢での不振は、纏綿たる歌の調べがあるいは男子校生の気風に合わなかつたものか。

十期の荻野文雄が、先輩田村隆一を悼んで朝日新聞・声欄に寄せた投書のなかで述べている。「雑誌に載る(田村氏の)軽妙な随筆を好んで読んできた。氏の書かれたものには、海軍航空隊のこととともに、この学校Ⅱ三商を指すⅡの思い出、青年の眼に映じた、戦争へ突入していく昭和初期の時代風景が描かれることが多く、お陰で同時代に生きたあかしの反芻することができた」。私の場合は父親の勤めの関係で池袋から深川へ引越したのが三商入学に繋がったが、合縁機縁というか、それがよかつたと思つてゐる。俳句もよくした夏目漱石に、「累々と徳孤ならずの蜜柑哉」の句がある。言うまでもない、論語の「徳孤ならず必ず隣あり」が典拠。徳のある者は孤立することがない。きつと周りの共鳴を呼んで人が集まってくるものだ、と鈴生りの蜜柑を譬えたものだ。畢竟するに、学恩といい友誼というのもそのようなものなのであろう。

《若くは時々の折る合ふ》ところで、巨匠田村隆一が述懐している。「ぼくはまぎれもなく戦争の子

どもで」あり、「精神的に窒息しかけ、空気孔を求めて、三、四歳年上の大学生たちの同人誌に入れて」もらつた。三商時代、北村太郎とともに詩の扉を叩きたいきさつである(昭和六十年十二月三日朝日新聞夕刊・私の転機)。

『碧淵』の十期生たちには、在校当時から卒業にかけて戦争を詠つた句が数多く残つている(前掲『十期会報』所収「碧淵俳句に見る戦中戦後」)。軍事教練、入営・入団、学童疎開、防空演習、東京空襲、軍隊生活、終戦、戦災地、復員、闇市など読み返せば今も情景が彷彿として蘇るのである。

既述のように十二期生たちの『ピタノバ』誌上作品には、大正末年生まれの筆者らが育つた時分からの身辺に起きた事象を扱つたものが目立つ。その世情懐古は、戦争が次第に色濃く影を落としていく昭和初期から終戦前後までへとタイムスリップさせてくれるが、同時代の空気を吸つた読者層には共鳴を呼ばずにおかないであらう。

これら相次いだ営為から、今更ながらまず驚かされるのは彼らの若さであらう。十代から詩作とか、また習作とはいえ小説らしきものを書き始めていたのである。未熟稚拙とはいえ、文雅の別世界に心を遊ばせていたのである。

それとともに印象的なのは、降りかかる苛酷な時代の圧力から知らず識らずのうちに身を交わしたそのしなやかさであらう。昭和は歴代の年号として最も長く六十四年に亘つたが、何といつても

戦争が中心であつた。「十五年戦争」という言い方があるが、昭和六年の満州事変勃発から日中戦争を経て二十年の太平洋戦争終結までの足掛け十五年を、戦後になつてから総称した言葉である。彼らの世代では自我の目覚めと、この戦争とがほぼ同じ時期にぶつかり合つた。そこで外側からのプレッシャーの緩衝地帯として、生活の隅つこに知的創造の別天地を形成していった。それも、巧まずして――。

「体も心もまだ新しい人間(注Ⅱ子どもたち)を信じて」未来を託したモダニスト詩人佐藤義美。そのモダニズムの炬火を、受け継いだ北村太郎、田村隆一ら年少詩人たち。大正デモクラシー、大正モダニズムと枕詞に謳われ、われわれが人の世に生を享けた大正も早、経た年数では平成に追い抜かれた。「降る雪や明治は遠くなりけり」(中村草田男)の感受に継いで、その大正もまた遠くなり去ろうとしている。二つの世界大戦に挟まれたたまゆらの平安が、記憶の彼方に揺曳する。

〔付記〕本稿では旧制三商、なかんずくその真ん中の八期から十二期に焦点を合わせたが、なお洩れもあるであらう。ご教示を頂けると有り難い。振り返ると級友山崎順三との二人三脚により成つたが、同君は平成二十年一月長逝した。冥福を祈りつつ筆を擱く。

——平成十七年十一月二十日記・平成二十年五月三十一日追補——

特別寄稿

イモと民主主義



第十九期
大村 彦次郎

〔経歴〕
一九三三年東京生まれ。早稲田大学政治経済学部・文学部卒業後、講談社入社。「小説現代」、「群像」編集長を経て、文芸出版部長、文芸局長、取締役を務める。その間、野坂昭如、井上ひさし、長部日出雄、村上龍ら多くの作家の文壇デビューに尽力した。著書に「文壇うたかた物語」、「文壇栄華物語」(第十八回新田次郎文学賞受賞)、「文壇挽歌物語」、「文士の生きかた」、「ある文藝編集者の一生」、「時代小説盛衰史」(第四十一回長谷川伸賞受賞)など。

私たち十九期生のおおくは敗戦翌年の昭和

二十一年(一九四六)春、旧制中学最後の生徒として都立三商に入学し、六年間在籍したあと、昭和二十七年(一九五二)の三月に卒業した。小学校では、サイタサイタ サクラガサイタの、尋常小学教科書を使った最後の年代である。三商に入学した翌年、学制が変わって、併設中学の二年生になり、それから高校二年生になるまでの三年間、下級生なしの生活を過ごした。下級生に向かって、イバれないということは、はなはだ面白くなかった。

世の中が一変したとはいえ、まだその頃の下町の父兄の間では、戦前の三商の名門意識が残っていて、これからは商業の時代だ、という親のすすめもあって、進学を決めた。筆記試験などはなく、型通りの口頭試問があった。古来詠まれた桜の名歌をひとつ挙げなさい、と言われたので、戦時中おぼえた「愛国百人一首」の中の、「敷島の和名ごころを人間はば」という。本居宣長のあの有名な歌をそらんだ。私のつぎに控えた受験生は「駒が勇めば、花が散る」と、都々逸だか端唄だか

の文句を口にした。面接の教官は国語担当の二階堂先生だったそうだが、さぞあわてられたことだろう。

校舎の壁に合格者名が貼り出されたときはドキドキしたが、全員合格と分って、なアーんだ、という気持ちになった。あとで知ったが、都内の中学校のかなりの数が焼失したので、三商のように焼け残った学校は受験者全員を収容するように、都から指示が出ていたそうである。そのとき五組二百五十名が入学した。地元の本所、深川が罹災したので、江戸川、葛飾、足立といった遠距離から通う生徒が多かったのではないか。

学校の周辺は焼跡とガレキの山だった。屋上の時計台に上がると、隅田川の向うの日本橋、銀座一帯から国会議事堂までが見通せた。教室のガラス窓は破れ、沈下した校庭の一隅には汚水が溜り、青みどろが浮いていた。下駄履きで通う生徒は教室や廊下をハダシで歩いていたら不衛生きわまりない。住宅難の折柄、親許を離れ、教室を寄宿舎代わりに寝泊りしている生徒もいた。都の衛生官が来て、発疹チフス予防のため、DDTを撒布

した。真っ白い粉を頭から浴びせられ、教室内がまるで上野の地下道なみになった。

三商に隣接する商船学校は駐留軍に接収され、夜ともなれば、米兵と一緒にパンパン諸嬢が教室や講堂内にまぎれ込んだ。通学途上の道路ぎわに、「淫売婦出入りを禁ず」の立て看板が出ていたが、まだ少年の私は淫売婦という字も意味も分からず、パイフと読んで、上級生から「お前、何も知らないな」と笑われた。

戦時中、剣道を教えていた若い古暮正雄先生に引率されて、平野町の深川警察署の道場へ稽古に通った。まもなく文部省令で剣道部は解散を命じられるが、古暮先生は「教育はこれでもいいのか」と言って、悔し涙を流された。「六三制野球ばかりがうまくなり」という川柳が作られたのはこの頃である。

食糧難も深刻であった。入学した年の秋、京王多摩川へ遠足に出かけたが、帰りに近くの農家でサツマイモを分けて貰い、それぞれリュックに詰め込んだ。引率の教師は体操の吉住晋作先生で、帰りがけに「今日は楽しかったね。おイモも買え

て」と言われた。遠足というより買い出しに近かった。そのときの多摩川畔で撮った写真が残っているが、みんなイモの入ったリュックを背負って、ニコニコしている。江戸川の土手の学校農園にも農作業と称して狩り出され、イモの種苗を植えたことがあった。

昭和二十二年（一九四七）五月、新憲法が施行されたとき、その記念祝典にクラスから選ばれ、皇居前広場に行き、お立ち台の昭和天皇の近くで、万歳を三唱したことを覚えている。その年の夏の暑い昼下がり、市ヶ谷の極東軍事裁判の法廷へ傍聴券を手に入れ、教頭の清田榮一先生らと出かけたことがあった。社会科の勉強を兼ねていたのかもしれない。昭和二十五年（一九五〇）、朝鮮戦争が始まったとき、英語の太田浩先生から、「また原爆が落ちるぞ」と言われ、目の前が暗くなった。隣の商船学校を占拠していたアメリカ軍兵士たちの大半は朝鮮戦線でほぼ全滅した、とも伝えられた。彼ら若い兵隊たちはついこの間まで、越中島のグラウンドでアメリカンフットボールに興じていたのにと、索然たる思いになった。

三商を卒業した年、アメリカとの講和条約が発効され、日本は独立国家となった。ちょうどわれわれ十九期生が三商で過ごした丸々六年間は連合軍の日本占領期間に重なる。だから、その教育課程では自治会、ホームルーム、カリキュラムなどの戦後民主主義が施されたのである。ホームルー

ムといえば、こんなことがあった。社会科の時間に、「天皇制は是か非か」という討論会が催された。三商の応援歌の歌詞を作った多田宏君が天皇制反対論をブチ、護持論者がいなくて、「きみ、何でもいから賛成論に回れ」と、担任の先生から言われた。一夜漬けの勉強で、古代史学の津田左右吉博士の論文を読み、分らぬままに反対論の反対をした。今なら考えられないが、そんなことが当時は平気で罷り通った。

世間に出てから私は仕事の関係で、三商の先輩に当たる詩人の田村隆一、北村太郎の両氏とお付き合いする機会を得た。お二人とも戦後を代表する「荒地」派の詩人である。田村さんは大塚の鳥料理屋、北村さんは浅草のそば屋の息子。とりわけ田村さんは母校愛がつよく、酔うと私の肩に手をかけ、三商の校歌を放吟した。「江戸の誇りを継げる吾等」のくだりに来ると、腕を回し、ひときわ声を上げた。その田村さんも北村さんもうとうに亡くなられた。

昨年のある日、同期の増淵義昌君に誘われ、越中島の校舎を訪れた。入口で管理の人から何用かと訊かれたが、増淵君が「十九期の卒業生です。同窓会会長の木戸隆吉君と一緒にです。」と言ったら、すぐに通行を許された。木戸君はえらいんだなア、とあらためて思った。かつてグラウンドの整備につとめた河岸運動場も消え、往時茫茫、顧みて何もなかった。

十九期生の一部が毎月十五日に、同期の大関守君が営む両国のそば屋「大関庵」に集まる。今年から後期高齢者に仲間入りする年齢にも拘わらず、みんな元気で酒を飲み、そばをすすり、昔談義に興じる。といって、話の中身はいつも同じテーマの繰り返しだ。それが続くうちはわが三商は生きていく、と思っている。



1年生（旧制の最後）多摩川へ遠足【昭和21年秋】

恩師・先輩を語る

お逢いしたかった先輩

第十期 荻野 文雄



戦中戦後を、古き良き日本人のバックボーンをもって真摯に生き抜かれた、ひとりの先輩に敬慕の念をもっている。生前にお逢いしたかったと切におもう。

四期の吉田嘉七さんである。

昭和十七年春、太平洋戦争の緒戦の大勝利で日本中が沸いていた時代、既に三商を卒業して社会人になっていた私は、発表された二編の戦争詩に深く感動した。

一つは、ジャワ攻略戦に報道班員として従軍した詩人の大木淳夫の『戦友別盃の歌』である。

「言ふなかれ、君よ、わかれを、わが征くはバタビアの街、君はよくバンドンを突け、この夕べ相離（さか）るとも、かがやかし南十字を、いつ

の夜か、また共に見ん」

連戦連勝の戦局を背景に浪漫的声調をもった抒情詩は、戦争中に広く愛唱された。

もう一つは、「歩く、歩く、ただ歩く、夜も歩く、昼間も歩く……」という韻律で始まるジャワ敵前上陸後の歩兵部隊の行軍をうたった吉田嘉七軍曹の『歩兵前進』である。吉田さんは、岩波文庫の『万葉集』を唯一の書物として携え、出征したという。

ガダルカナル島は、餓島という呪われた名で、太平洋戦争下に生きた日本人の記憶から消え去ることはないであろう。米国と濠州を遮断する目的の作戦は昭和十七年八月から半年に及ぶガダルカナル島の攻防戦として展開された。劣勢な日本軍は制海権、制空権を奪われ、補給路を断られた。戦死者二万名。うち餓死一万五千名。生存者も殆んどがマラリア病に罹った。

もはや日本の敗色が濃厚になった昭和二十年二月、戦意昂揚の意図をもって『ガダルカナル戦詩集』が（前線にて一勇士の詠える）という傍題で毎日新聞社から出版された。詩四十篇、短歌九首から成る。作者は吉田嘉七曹長である。

絶望的な戦場で、防人（さきもり）の意気、戦

友への情義、家郷の回想が、雄々しく、潔よく、哀切にうたわれている。無謀な作戦への憤りが秘められていたとおもう。絶えまなき爆弾の雨がふるジャングルの中で書かれた悲愴で格調の高い詩集は、万葉時代の詩精神の復活を意味し、出征を待つわれわれ青年に与えた影響は深かった。

生還した吉田さんは自動車部品販売会社を興し、事業家として成功する。その傍ら詩誌『独楽』同人として、日常生活を淡々と詩に託した。主宰者は、「詩の中でしか自分のことを話さない。毅然とした古武士のような人だった」と偲ぶ。危篤に陥った後も医師が驚く生命力をみせ、最期まで気力が劣えなかったという。

平成九年九月五日逝去。享年七十九歳。

散文『ガダルカナル戦記』の跋文で斯く述懐される。

「私の詩は、戦争中は愛国の面が強調され、戦後は厭戦に焦点を絞って読まれているらしい。国民の士気を鼓舞する気はさらさらなかったし、今のような反戦的な考えは想像も出来ないことであつた。改めて読み返してみても感ずるのは、戦争のむなしさである。無惨な死の累積は何んのためであつたのだろうか。」

遺稿

隅田川・晴海運河の 流れ豊かに

本校・旧職員 第十期 竹田 一郎

去る五月二十三日（金）毎年恒例の吾が本校十期の同期会が、神田淡路町の料亭『萬代』（バンダイ）で盛大に挙行された。『萬代』は同期の太田泰治郎君の経営にかかる都内でも一流の料亭である。

太田君は旧姓・古田。古田君が何故「太田姓」に代り『萬代』を経営するに至ったかは此処では本論から外れるので触れない。ともかく十期会は同志の結束が極めて固く、例年、五月の第四週末を目的として世話役の一人、福田猛君の献身的な活動で友好的に消息を交歓し、同志の近況を報告し合っていて数年前まではこれも同期の山口正人君ゆかりの柴又「川甚」を会場として開催していた。ここ数年、会場を都心の神田に変更したのであるが、『萬代』の隣には之も有名な一流の『藪そば』があり、きわめて繁盛している。この程あと一年後と二年後に全員が齢満八十歳に達する。大正十三年生まれと大正十四年生まれの前生まれ組である。

敗戦の年、昭和二十年には丁度満年齢が二十歳に達して、組織的な壮丁検査があり、甲種合

格者と第一乙種の合格者が軍務に服し、陸海軍或いは航空隊の戦闘員として遠く支那事変に起因する太平洋戦争に従軍し、北は満蒙、南は印度支那半島、南洋群島の各地に転戦し、名誉ある戦死を遂げた同志も多く、留守家族は何度かの帝都空襲で無事であつても本人は還らず、逆に本人は無事帰還出来たが留守家族は全滅という憂き目を見た例も多々あつた事を茲に特筆しておきたいし、年老いた両親の一人息子でも陸海軍は容赦せず、軍役に狩り立てた。筆者には非常だつた。

一部例外を除いて十期生は、昭和十九年までに壮丁検査を受けている。年老いた両親の一人息子であつたかく言う筆者も昭和十九年秋、深川明治第二小学校で、第一乙種と判定され、昭和二十年二月五日、山梨県甲府市の“東部六十三部隊”に入隊を命ぜられ、帝国陸軍の文字通り最終末期の現役兵として応召したのである。父親が甲府まで見送りに来てくれて着用していた国民服を持ち帰ったが、前日の二月四日母親が新宿駅の列車ホーム迄見送りに来てくれて、この母子は抱き合つて駅で最後の別れをした。感極まつた筆者の母との今生の別離がここに在り、母は両掌で自分の顔を覆つて泣き出したのである。そして留守宅の深川扇橋三丁目十二番地の吾が家は一カ月後の東京下町の帝都大空襲で母は戦災死、砂町に土地勘のあつた父親（汽車製造会社の工場に勤めていた）もこの大空襲に起因して病を得て、新潟県妙

高山麓の実兄宅で遂に亡くなった。悲しい思い出である。親孝行できなかつたのが残念で心残りである。（次号へ続く）

三商の

職員室から見た教師像

第十二期 吉岡 鶴義

昭和三年創立から八十周年を迎え、初代吉澤校長を始め十七代柴田校長に至るまでに、その間、数え切れない程の教職員に支えられて今日の式典を迎えられた事も忘れてはならない。

小生は計らずも母校三商に昭和二十六年から昭和六十年まで三十四年間の長きに亘り、体育科教師として赴任、学生生徒としての五年間を含むと三十九年間もの間お世話になった者として、八十一歳の今日、感謝の気持ちと共に今迄印象に残る先生像を職員室の中から記述して見る事とした。同窓生の皆さんからは又、違った反面も発見されると想い、失礼とは思いますが、今は亡き故人を中心に記述して見たいと思います。

第二代 今村 直人 校長

今村校長は昭和十四年から二十九年に至る迄実に十五年間に亘り勤務され、初代吉澤校長の意志を継ぎ、その業績は高く評価されているが、昭和十四年初代吉澤校長が四月の入学式直前に倒れられ、急遽、京都市立二商より赴任されたのである。

初代吉澤校長は東京の下町にリトルジェントルマンを育成すると云う理想から、他校には無いユニークな教育方針でその成果の程は十一期までの卒業生が実証済である。処がこの指導方針は、職員室の中では必ずしも全員が賛成ではなかったと云う。その為、教員は校長派と反校長派に二分されてお互い反目し合っていたと云う。当時、東京府庁は、これを重視して今村校長赴任の時、約半数の教員を解雇又は転勤させたと云う。

この時の反省として今村校長は、府庁の命令に従うべきではなかったと晩年になっても述懐されていた。昭和二十年終戦を挟み米軍の空襲を受けたり大変な苦勞をされたが、次第に世の中も安定するようになり、初代吉澤校長発想で三商の隣接地を父兄の保護者特別会費として募金、二千五百坪を購入された土地を川岸運動場として整備活用した。昭和二十九年これを都に貸与自ら都立短大で長に就任した。短大校長停年退職後は千葉経済短大初代学長に就任、九十歳近くまで商業教育に貢献され、白寿（九十九歳）までの長命だった事は

良く知られている。

先生の生涯は常日頃、「人脈を大切にすると云う教えは、同郷の大先輩、荒木貞夫陸軍大将（当時文部大臣）の恩恵を受け、若くして中学校長とし活躍。その後も一貫して人脈の幅を広げられた方と推察される。小生が最も尊敬する恩師である。

第三代 伊澤 信治 校長

今村校長の跡を引き継がれた、伊澤校長は昭和二十九年から三十三年の僅か四年間と短期間であったが、同時に私有地として引き継がれた川岸運動場にプールを新設された。これは三商の歴史上面期的な事業で体育授業は勿論、水泳部も創設、クラブ活動は一気に活動の幅を広げた。

伊澤校長自身も水泳を得意とされ、完成時には六十歳と云うご高齢にも拘らず、水泳パンツ姿でドボンと飛込まれ、一気に二十五米をクロールで泳ぎ切られた事は、大変な驚きであり。深く印象に残っている。

第四代 石田 壮吉 校長

伊澤校長の後任は大物校長と云う触れ込みで都立五商から石田校長が赴任された。石田校長は都立一商在任時代から都の高教組（高等学校教職員組合）の委員長として活躍し教員の研修日（土、

日以外に自宅研修出来る日）を取得した人として有名、然し名門三商校長に赴任すると一変、全国の校長会から推薦されて、全商協合理事長、全国高校長会会長とトップの座につき飛ぶ鳥を落とす勢いであったが、三商内部ではワンマン振りを発揮、新潟県六日町に山寮創設等の実績は評価されるが、初代吉澤校長時代から積立てた資金で財団三商会創設、運転士付の自家用車を購入、私用公用に關係なく乗り回した事は職員室内からも批判された。

又、或る時期、校内連絡協議会（各部長で構成する主要会議）で自分の気に入らない決議に対し、用意された卓上の料理毎、全部足でひっくり返したと云うエピソードあり悪評を買ってしまった。しかし晩年退職間近くは大人しくなり職員会議の決定に従うようになったと云う。

第五代 清田 榮一 校長

通称ダッツアン。このニックネームの由来はよく分からないが、何事も「そうダツ」と断定したからと云う説は聞いたことがある。清田先生は富山県魚津市の出身、旧一ツ橋大学卒業後三商には戦前初代吉澤校長時代から在任、二代今村校長時代には教頭となり、次に台東商業校長に昇進、芝商校長を経て第五代三商校長として昭和四十年赴任された。三商校長としての在任期間は四年であ

るが、戦前からの在職期間を合計すると約十五年となり、最も三商を愛しく知る先生として有名である。

先生の記憶力は抜群で、生徒の名前を覚えるのが非常に早くその保護者の職業や、各生徒卒業後の就職先、会社名、職場での地位まで克明に記憶されているのには頭の下がる思いがした。然し石田ワンマン校長時代には、校長の姿勢に不満を持つ職員と、違う意見を持つ職員と職員室は完全に分裂してしまい、その後を引継いだ清田先生は大変な苦勞を負わされることになった。その上、都教育庁よりの指示で財団所有の自家用車は不許可、財団資金の利用法についても相当な制約を受けるようになったのである。

しかし、清田校長は持前のバイタリティーで職員をまとめ上げて行った事は高く評価される。又、三商校長時代は全商協会の理事長として活躍、三商退職後は専修大学教授、専大松戸高校長と歴任され八十歳過ぎまで教育界に君臨された事は良く知られている。

三商では戦前からの卒業生は数え切れぬ程先生のお世話になっており、没後は毎年の墓参会に数多くの卒業生が参加した。

三商卒業生で母校の教壇に立たれた教師像

六期 杉原 勇太郎 先生(商会計)

昭和十三年卒業以来定年退職まで終始一貫三商に在職、特に珠算会計に関しては若くから教科書始め単独で本を出版された秀才。特に珠算界では全商協会を通して有名人だった。ユウチャンのニックネームで愛されていた。実家は元日本橋箱崎町で回船問屋を営む生粋の江戸っ子育ち、宴会では良く端唄木遣り、踊りは奴さんが得意であった。

七期 星野 信吾 先生(商業)

商業簿記を教え、誠実真面目な先生だった。運動はあまり得意と思わなかったがプール完成後、物凄い早さで「抜き手」を泳ぐ姿を見て圧倒された。又晩年は社交ダンスに熱中し銀座前線座(戦前洋画館として有名)ダンスホールの常連でベランになられたと云う。

十期 竹田 一郎 先生(社会・地理)

ピテカンと云うネーミングは十二期古暮先生が人類の祖先ピテカントロプスに似ているからと云

う失礼な話であるが、竹田先生は別に嫌がる気もなく晩年は自らも呼称されていたと云うのは人柄の良さではなからうか。三商卒業後は東京海上と云う一流企業に就職されて将来を囑望されていたが、本人はどうしても教師になりたいとの願望から恩師今村、清田先生を頼って母校の教壇に立つ事が出来たと云う。晩年は管理職試験を受けて中学校校長にまで昇進した。又退職後同窓会報に寄稿された文章を読み、戦時中先生が軍隊に出征中、アメリカ軍空襲により両親を失い終戦後は親戚をたよって転々とした話を伺い苦勞の人生であった事に感銘を受けた。俳号静水としても活躍。

十一期 山本 敏明 先生(理科生物)

ニックネーム「カロチン」。非常に真面目で冗談一つ言わない先生だった。

十二期 磯川 運良 先生(商業)

磯川先生は明治学院大学卒業後都立赤坂商業を経て三商に赴任、商業科目の中、コレポンつまり商業英語を得意科目とし、英文タイプ部、登山部の顧問をされていた。山が好きでスキーも上手であった。

結婚は二度、前の奥さんとは晩年になってから離婚、三商在任の山口多華子先生と再婚。それま

で子宝に恵まれなかったが二人の息子を授かり至福と思われた。惜しむらくは退職後間もなく他界された。

小生（吉岡）とは性格の違いからか意見の合わない事が多く親しい交際は無くして終ったが彼の葬儀に参列して始めて彼が敬虔なクリスチャンであった事を知り愕然とした。地元地域に於て、教会の牧師からもその業績を高く評価され尊敬されていた事を知り当方は恥じ入るばかりであった。

十二期 古暮 正雄 先生（日本史、書道）

ニックネーム「パンク」。誰のネーミングか知らないが自分からもよく呼称していた。三商卒業後停年退職まで三商一筋。人生の総てを三商教師で過ごした超有名人。残念ながら平成十五年七十七歳で亡くなったが彼ほど多才な人間も珍しいと思つた。何時、何処からこの才能が生まれたのであろうか、考えて見ると、先ず生徒として三商在学中は剣道部に所属、めきめき強くなり三段にまで進級、学校代表として明治神宮大会（現高校総体）に出場し活躍した。その実績を買われて昭和十九年剣道助手として三商に残つた。処が間もなく終戦。マッカーサー指令で柔剣道は禁止された。仕方なく彼は別の道を模索、好きだった書道の道へ進みたいと当時在任中の恩師高橋昇一先生の指導を受ける一方、国学院大学二部へ進学、

日本史の勉強を始めた。終戦直後、誰も苦しい生活の中で彼も必死で生き抜く想いがあり、それ等が後々の大きな糧となったと想われる。

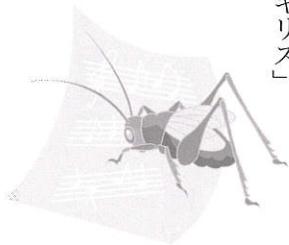
やがて日本も徐々に復興、柔剣道も復活されたが、剣道は体育の一科目に過ぎなくなり、大学卒業後、社会科教師の資格と書道即ち芸術の資格も取つて母校に定着した。

三商で教師としての生活は教え子との再婚と子宝にも恵まれ順調のものであった。教科は日本史と書道担当、クラブ活動は剣道部、史学部、書道部の顧問、多数の教え子達に慕われた。又自身も日展に六回入選する等努力を積み、職員室でも筋道の通つた弁論は高く評価され人気があつた。

一方無類の酒豪で身辺から酒瓶は離れ難い存在で、学校内書道室にも常備されていた。晩年健康を害したのも酒の為と本人も自覚していた。葬儀には多数の卒業生が参列し、少し早かつた去世が惜しまれた。更に没後の墓参会にも毎年三十名程の人が集るのも彼の人柄を表している。

辞世の句

「無念なり兜の下のキリギリス」



十二期 齋藤 克 先生（商業）

今年平成二十年一月二十一日齋藤先生は肺癌で亡くなった。八十歳と云う節目まだまだ活躍して欲しかった人物である。彼は三商の生徒時代、小生と同クラスで仲の良い間柄、どちらかと云うと私同様悪戯鬼で成績も良い方ではなかった。三商卒業後は横浜高商へ進学、卒業後は広島商業、都立赤坂商業を経て三商へ赴任、第四代石田校長時代は十二期卒が四人集まつた。

つまり磯川、齋藤、古暮、吉岡である。然し教科も夫々違うし性格も皆個性が強く、彼等は麻雀で言う東南北西で皆向きが違ふと職員室で批判された。齋藤先生はその後都研に入り立身出世して行つた事。その他のことは追悼記に寄稿、重複するので割愛させて貰う。

十四期 小暮 敏雄 先生（数学）

ニックネーム、チビグレ、三商では二人のコグレ先生が在任していた時代あり一人は古暮、一人は小暮である。何時の間にか職員生徒間では紛らわしいので「フルグレ」、「チビグレ」と呼び分けられていた。小暮先生は旧制東京高師出身の秀才、母校三商で教鞭をとるようになって真面目一本槍の性格は定評があり、後に都立墨田川高校へ転勤された折、その時代のクラス担任だったと前三商

十七代校長柴田哲氏から聞きこれも縁のある事と感銘を受けた。

墨田川高校から都立城東高校へ異動され停年まで教務部長等を勤められ退職されたが、近年亡くなられたと云う訃報を聞き残念に思う処である。

驚く事は、先生が定年退職まで私事で欠勤された日は僅か二日しか無かったと云う話。誠に教師の鏡と云うべき人であった。ロマンチックな一面あり。定年後TVに登場された事がある。それはあの豪華客船「飛鳥」に夫人同伴で一泊旅行されたと云うニュースを当方も拝見してビックリした。例え僅かでも億万長者の気分を味わせたいとの奥さん孝行な姿を見て、微笑ましく感じさせられた。

十五期 岡野 加穂留 先生(商業)

明治大学卒業後一時三商の非常勤勤務された事がある。後に明治大学学長にまで昇進し国際的にも活躍、母校三商で度々全校生徒の前で講演、職員生徒に感銘を与えた。何時も話の中に三商生徒時代に教えを受けた教師、先輩に感謝していると話し出世の基は三商と言う温床があった事を印象づけた。残念乍ら一昨年他界されたと聞きご冥福を心から祈りたい。

三商卒業後、母校に赴任された先生はその後、十六期稲田宏先生(英語)、十九期岩瀬源先生(商

業)、二十三期渡辺勝彦先生(商業)と続くが、渡辺先生を除いては未だ未だお元気でいらっしやる様子、失礼になるので今回は遠慮させて頂くこととする。何れにしても多くの先生方を輩出、バラエティに富んだ教科を見ても母校三商の土壤は素晴らしく他にも上智大学長、東大教授、筑波大副学長を始め有名大学教授になられた方も数え切れない程である。

次は小生が三商生だった昭和十四年からの恩師像と昭和二十五年から昭和六十年頃迄にお逢い出来たユニークな先生像を綴ってみた。先ず私の教科体育の先輩像から述べると、

高根沢 光位 先生

ニックネーム「オイホラ」初代吉澤校長は英国留学の経験もあつてスポーツも米国の野球は大嫌い、その代りにバレーボールを推めたと聞か、バレーボールも発祥地はアメリカでその辺の意味は良く分からない。

従つてバレーボール部の歴史は長く第一期生から存在していたと聞く。初代バレーボール顧問は高根沢先生であった。同窓日本体操学校(現日体大)の大先輩で戦前、体操の授業を受けた事がある、「前へオイホラ」と号令を掛けることからのネーミングと聞く。三商退職後は私立学校々々長を勤められた。

田中 勇 先生(体育)

高根沢先生同様日本体操学校(現日体大)の先輩、丁度私が赴任した時在任されていた。ニックネームは「田中商事」。戦後間もない頃は生活物資も自由にならず皆困っていたが、先生はその生活物資を方々から調達、主に職員室内で売捌いていた。授業する姿は全く見られず、左右の腕に五個程時計を嵌めていてパツと袖をまくり上げ、先生これはどう?とか今履いてる革靴を脱いで、先生これどう?と言つて歩くのが日常。

日曜日は食糧の買出しで地方へ出かけ農家で買付けた米を学校の小使室へ保管、皆へ売付けていた。当方はそんな先輩の姿に信頼の念は持てずいたが、とうとう最後は盗品故買で警察に捕まり免職となつてしまわれた。

吉住 晋作 先生(体育)

やはり同窓の先輩で当方赴任の際はすでに在任されていた。ニックネーム「高体連」で学校を休む日が多く、理由は何時も高体連の仕事と云うのでこのニックネームとなつた。授業を拝見すると、自身ジャージや体操着を着用せずスーツと革靴のまままで校庭に出て生徒の出席をとるのみ、従つて生徒の方も学生服と革靴のまま、出席を取り終えると後は自由、生徒は自分等でバツトとボールを用意、毎時間ソフトボールに興じていた。職員室ではエロ話の得意な先生で結構人気があった。

晩年は高校教科書陸上競技の部へ寄稿した実績を認められ、某大学の教授にまで昇進した。職員室では人気があったが当方に取っては自慢の出来る先輩では無く、むしろ反発する事も多かった。先生は家系的に長寿で九十歳過ぎても元気だった印象がある。

宇梶 公平 先生(体育)

出身は栃木県宇都宮市、戦前日体(現日体大)卒業後、福井県立北陸中学を経て東京の中野中学(現明大中野高校)から三商へ昭和十四年赴任、学生時代は陸上競技の選手として活躍したが、三商へ来てからは高根沢先生の後を引継ぎバレーボール顧問を担当、チームの力を向上させ、インターハイ、国体に出場にまで指導、一方東京都高体連バレーボール専門部から全国高体連専門部の創設に係わって活躍、その実績から日本バレーボール協合理事、三商から都立短大教授千葉経済短大教授まで立身、活躍された私の恩師でもあった。

晩年は体調を崩し七十一歳で亡くなられたが没後政府から叙勲を受け多数の教え子から尊敬され惜しまれた人生であった。

大下 徳治 先生(柔道)

終戦前まで三商勤務、やはり日体の先輩、当方は直接指導は受けていないが、終戦後は都立大森

高校教頭に栄進。講道館、日本柔道協会、国際柔道連盟理事として活躍された。

柳沼 長治 先生(剣道)

ヒゲの長さんと云うニックネーム、立派な顎鬚からのネーミングで有名、戦前から剣道の教師として活躍、当時柔剣道は必修科目、大きな声で指導を受けた印象は深い。終戦後は柔剣道禁止で一時的に異動、教員組合専従教諭として活動されたが晩年は自宅に道場を構え多数の優秀選手を輩出した。

宮脇 清自 先生(体育)

昭和三十年頃、日体大首席卒業と云う振れ込みで三商に赴任、専門はレスリングで学生時代は全日本選手権で活躍したと云う。又、高校時代は体操部だったと云う万能選手であった。果たせるかなその実力を見せられ到底小生が太刀打ち出来る相手では無いと思つた。その上性格は穏便、争い事は絶対に起こさないと云う完璧さは後輩ながら天晴れとしか表現の仕様がな人物。赴任当初は我々に遠慮していたがやがて三商にレスリング部を創設めきめきその実績を挙げ高校総体で優勝する選手を数多く育成した。

三商から先輩宇梶先生の紹介で都立商科短大へ転任、助手から遂に学長にまで栄進した。惜しむらくは停年退職後七十歳で天逝した。

広瀬 登美江 先生(英語)

通称ベチャマン、戦前小生入学時より英語の初級、主として一年生担当の若い美人先生。何時も着物、袴姿で楚々として美しかった。当時の三商は男子校、教師も男性ばかりの中唯一の女性先生として憧れの的であった。終戦後は関西方面に転任され後に大学教授になられたと聞いた。

グレイム 先生(英語)

女性イギリス人先生で昭和十六年日英米開戦まで初代校長の招きで教鞭をとっておられた。日英はお互いに敵国になる為イギリスへ帰国されたが、別れの挨拶を英語でスピーチされたのは印象に残るが当時の小生にはチンプンカンプンだった。

若林 兵吉 先生(中国語)

ニイメンチーブチー(你們去不去)は先生の口癖、生徒達は意味も判らずこの言葉は口に出て来た。後年中国語を勉強するようになりやっと意味を理解する事が出来た。授業中先生から聞いた話の中、当事先生は六十四歳と云う高齢と聞きビックリ更に今日まで小学校時代から学校を休んだことは一度もないと聞き又ビックリさせられた。戦前からグレイム先生や若林先生を招聘して外国語教育に力を注がれた初代吉澤校長の見識の高さには恐れ入るばかりである。

小菅 喜三郎 先生(教練)

ニックネーム「ポンテル」。名前の由来は不明だが陸軍准尉の退役軍人。厳しい筈の軍事教練であるが何処か易しい教官であった

山本 丁 先生(商業・英語)

ドブチュウのニックネームで親しまれた。教科は万能で何でもござれだったが、どの教科も自信は無かった様子だった。特に英語担当の時は何時も辞書持参で生徒の質問に答えていたのが印象に残る。後に大学教授になられたと聞く。

田中 尚 先生(芸術・書道)

三商創立当初からの先生、三商の校章をデザインされた方。書道も抜群、高橋昇一先生の恩師。何時も端正な背広姿が印象的であった。

北古賀 親芳 先生(数学)

明治時代九州の偉人江藤新平の孫と聞く、兄の江藤保定先生(国語)と一緒に同時期三商に赴任、スバルタ教育で有名。顔光鋭く怒った顔は鬼の様に見える、小生は苦手の数学、授業中は何時も震えていた記憶がある。答えが出来ない時は鉄拳は当り前、時には「お前は猿より劣る、猿は人間より三本毛が少ない」と生徒の坊主頭から爪を立て、毛を抜く特技の持主、然しその反面音楽を好み、その歌声はすばらしい廊下を歩きながらそ

の美声を響かせていた。又三商にプラスバンド部創設顧問として放課後遅くまで指導して成果を挙げた。

高橋 昇一 先生(書道)

日蓮宗の信者、自ら「ニツチュウ」と名乗り商業簿記も教えたが主として書道、商業学校で書道は重要科目、卒業時履歴書を書くのは全て筆書きであった。弟子に古暮先生を始め数多くの書家を育てた。何時も元氣よく澁刺、生徒に勇気を与えた印象が深い。三商から故郷栃木県佐野商業高校へ転任停年まで勤務された。退職後古暮先生が中心となり、高橋先生の個展を江東区文化センターで開催。百点以上の作品を展示されたが数多くの卒業生来場、忽ち完売、その人気の高さに驚かされた。

千葉 義美 先生(数学)

前頭部が薄く禿げてる処から「逆螢(ギャクボタル)」のニックネーム、真面目一本槍の性格で生徒指導に当った。新制中学制度発足時(昭和二十三年)墨田区立両国中学校長に栄進、中学校教育に貢献された。

志鎌 正雄 先生(国語)

三商在任中教頭として活動、文学作品等数冊出版。職員室では何時も暇さえあれば執筆している

姿は印象に残る。疲れるのであろうか良く居眠りするのにも有名。処がその居眠りに大きな軒(イビキ)が付いていて、処かまわず軒をかき、職員会議中も軒をかくので、周囲の職員も苦笑するが一向に平気、或先生が意地悪くその居眠り最中、教頭先生はどう思いますかと質問するとパッと目を覚ましキチンと答弁された時は流石にと舌を巻いた。又或時PTAの催しで浅草観音の見学の際、特別に本堂観音像の裏側に入室を許され、住職の説明中、軒の音が聞えて来た。志鎌先生は立ったまま居眠りの出来る馬の如き特技があると感心した。三商から中学校長へ栄進後、千葉経済短大教授となり停年まで教鞭をとられたと聞く。

田部井 孝則 先生(数学)

ニックネームは「デンベエ」。物理学校中退と聞いたがその後免許をとり三商へ赴任、持前の外交手腕で三商の就職部長を長く勤めた。高度成長期の波に乗り、多数の卒業生を一流会社へ斡旋した事は評価されるが、一方で金融業に興味を持ち、学校内で勤務時間中も株の売買、資産を残した。三商から都立一商定時制教頭へ昇進されたが、停年前に夭逝されたと聞いている。

横山 文夫 先生(芸術)

四国香川県出身。東京美術学校(現国立芸大)卒業、戦後間もなく三商に赴任停年退職まで長く

勤務された有名人。三商在任中、専門である木彫製作、日展へ毎年出品。遂に無鑑査の榮譽ある資格を取られた。等身大の作品多く、大部分は江東区その他公共建造物の飾りとして売却されたが、家は狭い為残りは学校内に保存されていた。四国香川県では特に有名人で高松美術館前には立派なモニユメントがあり修学旅行の際、バスガイドから紹介され驚いた事があつた。校内では美術クラブ顧問として数多くの生徒を指導、卒業生の中から著名な芸術家も多く輩出した。残念乍ら近年他界されたが現在も「三文会」と云うOB会は活動が続けられていて先生の意味は受継がれている。

山田 登喜松 寮長（六日町山寮管理人）

昭和三十七年財団三商会の資金で新潟県六日町に山寮が建設された。戦前の三商は千葉県市川に環山荘、館山に館山寮と二つの寮を持ち生徒の合宿、臨海行事に活用されていた。館山寮は戦時中軍の管理地区となつた為国に没収され、環山荘は理由は良く解らないが売却してしまつた。何れも初代吉澤校長から続けられた保護者会特別基金による私物であつた為の処置と推測される。

第四代石田校長は山寮の復活を唱え、春夏秋冬利用出来る寮をここ六日町を候補地と決定した。丁度スキーブームも重なり建設当初から学校のスキー教室を始め卒業生、教職員家族にも宿泊費格安の為大変喜ばれ活用された。又夏の合宿期には

県立六日町高校のグラウンド体育館を借用、運動部、文学部も多く利用されるようになった。

寮の初代管理人となつた山田登喜松氏は地元六日町で元「樵（キヨリ）」シノ夫人と夫婦で山寮の管理を委嘱された。一口に管理人と言つても百人も収容出来る建物の管理は容易では無かつた。然し山の斜面にポツンと建てられた寮を我が家の如く愛し人生第二の職場とし喜々として又誇りを持つて働き通した姿には皆を感動させた。

大の酒豪、晩酌は何時も八海山と云う地酒（今は超特級の名酒）飲む程に弁舌さわやか山の話、地域の話をよく聞かされる好々爺であつた。シノ夫人もやさしい素朴な人柄、大樽に沢山の自家製漬物で来寮客をご馳走してくれた恩人。

残念乍ら登喜松氏は六十歳を過ぎた頃体調を崩し逝つてしまつたが炊事場の奥に飾られた木樵時代の大鋸（ガンドー）二本が印象に残っている。

まだまだ語り尽くせない先輩は沢山あるが今回はこれにて筆を止める。これら偉大なる先人のお陰で三商の繁栄が続けられたと想うし、私自身も恩恵に浴した一人として永久に忘れることの出来ない恩人の方々であつた。合掌。



思い出の恩師像

第十二期 内藤 登

清田 榮一 先生

（セイタアツ・蕪ーかぶー風貌からの渾名）

五年一・二組生徒の就職の大部分が先生のお世話になつてゐる。その生徒の顔と名前もすべて記憶しているという伝説を持つ名物教師。遺言の中に「人生三万日」の言葉が有る。

木村 与吉 先生

（よきちつあんー読んで字のごとし）

「道は通ずるぞ」「寝ていて人を起こすべからず」の教えが記憶に残る。温厚の人だった。われわれが卒業後「保土ヶ谷化学会社」の勤務課長に転職。

江藤 保定 先生（？）

江藤新平の孫と言う噂有り、木銃（剣つき銃の刺突訓練用の木製銃）を片手に学校中をネメ付け回つていたコワモテ国語教師。

江藤新平のプロフィール

天保五年（一八三四）佐賀県（肥前）の下級武士の家に生まれ、貧苦に耐えながら藩校「弘道館」に学び、頭角を表し、累次昇格して三五歳にして正士に昇進、明治維新に際して江戸軍監に登用され、明治政府に認められ、三八歳太政官出仕、遂には従四位参議に上りつめ、明治刑法を作り、司法卿となり（三九歳）薩長土肥（前）の

出世頭になったが、性格剛直、熾烈で敵も多く、四一歳征韓論で下野帰郷し、佐賀で反政府の烽火を掲げるが、明治九年（一八七五）、大久保利通の姦計に陥って捕縛され、即日斬罪梟首の刑を受け四一歳を以って憤死した。まさに孫と噂される江藤先生の風貌を彷彿させる最期ではありませんか！

北古賀 親芳 先生（キタコガ）

江藤先生の弟または従弟と噂される。これまた厳しい数学教師。というよりは三商吹奏楽団の名物指揮者でありました。但し先生の指揮棒は音楽の後から付いてくるとは。卒業後海軍軍楽隊に入隊し、戦後アルトサクスの名演奏者といわれながら中年でこの世を去った海老原啓一郎氏が評した言葉である。

常名 銚二郎 先生（ぼじろう）

大学の先生にもなろう言われた英語教師。戦後米軍通訳にもなられたとか。小生（内藤）が、海軍経理学校を追い出されて転校という形で入校した。大倉経済専門学校（現東京経済大学）に臨時講師として教壇に立たれたことが有り、三商時代、英語を敵性語として忌避していた小生を名指してお互い大恥を書いた苦い思い出が蘇ります。

坪井 榮 先生（ツボタコ）

まだ敵性とはなつてなかった一、二年生時代の

英語教育は三商はまことに重視していたのだから、廣瀬（べちやまん）先生とか外人先生とか多士才さいであった坪井教師もその一人で、一年のリーダーはティンクルティンクルリトルスターと歌つてくれた姿は後に忌避した小生にも懐かしい思い出である。その先生が敗戦後の有る時期、銀座の黒田呉服店とか、フードセンターの揚げ方に立っていらつしやつた姿を思い重ねると何とも胸打たれた情景であつた。

高橋 昇一 先生（ニツチュウ）

半白の髪振り乱して怒る時は鬼の様でもあり、笑顔で語る時は仏の様に見え、怖れる生徒と、慕う生徒が別れる不思議な教師であつた。特に廊下の拭き掃除には厳しく、横着生徒には鉄拳もお見舞いしていた。

千葉 義美 先生（逆ポタル）

風貌のごとく、ごく少量の髪の間から禿頭が輝くダンディで長身の優しげな教師。一年時担任だった。日記の提出を怠つて、やかましく注意され立たされてどうにも困つたことが思い出される。

遠藤少佐・安彦少尉、（配属将校）

二代目今村校長になつてから、学校はにわかに教練が重視され、佐官級将校を招いたのが遠藤少

佐であつた。が、小駆短足、あまり風采の揚がらぬ佐官殿で、学校査閲の時、馬で登場したのは良いが、乗馬の際反対側に落馬したと噂され、あまり冴えた配属将校ではなかつた。かえつて安彦退役少尉のほう張り切つて指導していた様な気がする。いずれにせよ三商の教練はべらべらのコートの腹に帯革を巻いて前に二個の弾薬ごうを着け、腰にごぼう剣を吊るすというスタイルだから、余りカッコよくない。おまけに弁当などは黒い布袋を斜めに背負うのだから、お世辞にも勇壮な姿とは見られない。でも兎に角この姿で、街にも出て行くし、査閲時にも一同コート姿で分列行進なんて滑稽な軍列だったなあと思ひ返すが、あの当時はクソ真面目でやつたものだった。

初代 吉澤 徹 校長

二代 今村 直人 校長

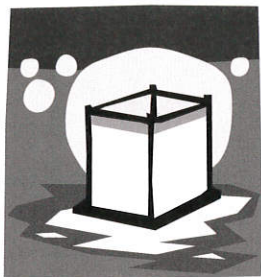
吉澤校長は三商の創立にあつて、生徒にヤングジェントルマンたらんことを念願し、校服を慶應帽に蛇腹を巻き、黒（夏はグレー）の背広に黒ネクタイ、一、二年生は七分の黒ズボンの制服を課した、これが東都の小学生の憧れの的となつていたのだが、いざ自分が着る身となつてみると、その珍妙さに辟易したものだ。今に残る当時の写真像を見ても実に恥ずかしげに映つている。

然し、我々の半ズボン姿を吉澤校長にお目にかけることができなかつたのは、真に残念だった。

今村校長になると、俄然、戦時色を反映、長ズボンにゲートルとなる。著名人を招かれ、生徒一同に講話を聞かせるのが趣味であった。

まあ、上の方は慶應帽に、背広は変らなかつたが、小生が海軍に志願入団した時、「その町人服は何処の学校だ」と年配の兵曹長に睨まれたのは屈辱だった。

余談に脱線しましたが、六十余年の昔ばなし、茫茫忘却の彼方に消えていきます。記憶の端に浮かぶのが、小曾根、三宮、箕浦、宇梶、大下、柳沼、由井、油井、若林など諸先生の顔、お名前を失念したが(花ちゃんー凶画)(Orちゃんー数学)(ごっさんー地歴) などなど若林先生の四声(中国語)も印象的でした。ヒゲの柳沼、弓道の三宮、宇佐彦 謹厳でした。小曾根の二天作の五、高瀬の白文、まさに年代物です。珠算一級の杉原勇太郎先生、もう皆さん故人になられてしまいました。この辺で思い出話は終わらせて下さい。合掌。



母校・恩師

第二十八期 水落 満

母校、そして恩師、何とも響きの良い私の好きな言葉である。

三商を受験したのはたとえ不合格でも三商なら仕方がない、と言う世評からであった。

合格した時の喜びは今でも明確に残っている。「やれば出来るじゃないか」と、もともと勉強嫌いな私が進学クラスを選んだ。母校での三年間は、部活、交友、受験勉強等まさに青春の凝縮であったし、今でも三商生であったことを、誇りとして

いる。

恩師、佐藤卓先生級友は佐藤先生と言わない。愛称「ピンちゃんで弾む」由来は卓球(ピンポン)の卓から来ていると思う。

そのピンちゃんの担任一番目に黒板に書いた文字が「連絡を密に」であった。「どんな小さな事でも連絡、相談しろ」そう話された。

その言葉は、学生生活、社会生活、家庭生活においても私の指針として有難い言葉である。数多い先生とのエピソードの中から先生のお人柄を、思い越した。

まず大学受験の時、成績の芳しくない私は、内申書に手心を加えてもらいたく頼みに行った。すると、先生は毅然とした態度で「水落!そんなこ

とをしたら、公文書偽造でこれもんだよ」と手首を前に併せる仕草を真顔でされた。でも所見の欄には歯の浮くような事が書かれていた。

何とか大学が受かると、母がお礼として商品券を先生に送った。すると先生は私を紀伊国屋に連れてその金額分の分厚い英和辞典と文法用例辞典を買ってくれた。先生の潔白さに驚ろかされた。

結婚式にもご参列願ひ、来賓のご祝辞をして頂きました。

「オーイ、今帰ったぞ」

「アラ、また飲んでいるんですか?」

「男は外に出たら七人の敵がいるんだ、ウイー」

で始まる祝辞は演劇部顧問の先生だけにユーモアたっぷりて宴を和ませ下さった。お酒も好きであったたようで、卒業後も三商に相談事があつて訪れた際に門前仲町の居酒屋でご馳走になったのが私の始めて口にした酒である。結婚後も結婚記念日の夜に何度か「上手くやっているか」とお電話を頂いた。結婚祝いにはトロピカルな魚の木枠に嵌め込まれた鏡を頂いた。「何故、鏡か考えるように」と添え書きがあつた。当時は「小さなジェントルマンであれ」という校訓に添って身だしなみに気を付けるように位にしか想い付かなかつたが、六十五歳を過ぎた今、その鏡に向かうと「五十歳を越えてからの顔は自分で造るんだぞ」と生き方の責任を論じているように思える。果たしてピンちゃんをご存命でいらして、今の私の顔を見た

らどう思うだろうか？

「連絡を密に」「潔白に」「責任を持って」今の世の中に失われつつある三つの教えを、有難うございます。

恩師と四十九年振りの旅行

第二十八期 岩本 栄輔

昨日、別府温泉から帰宅したところですが、昭和三十四年に修学旅行の途、別府を訪ねて以来四十九年振りです。忘れもしません当時、都立高校が規定の滞在時間を超えて九州（博多・別府・熊本・長崎）を訪ねる修学旅行は尋常ではなかった様です。石田校長始め先生方の説得と実施に大変な苦勞があつたと伺っています。思い出深い修学旅行でしたが、今回訪れた別府の街の激変に感慨深いものを感じます。

私たち二十八期生は「高校三年生」が大ヒットした昭和三十六年に卒業しました。前年には時代を揺るがした安保闘争があり、カラーTV本放送が開始されるなど時代の句読点に立っていました。

当時、私の学校生活の主流は「新聞部」での編集、発行する部活動でした。授業の休み時間となれば、すぐに部室へ駆け込むという始末でした。部室は

体育館を挟んで体育部系のクラブ室が集中している一角に新聞部がありました。暗くて汗臭い部屋でしたが、私たちにとっては梁山泊のような処でした。当時の部室はどれも同じ様に決してスマートではありませんでしたが、皆、部活動を通じて青春を謳歌していました。

そう別府を訪れて、思い出すことは私たち二組担任の竹田一郎先生のことです。

先生のお宅は当時、校庭を横切つて囲いを越えると在りました。とにかく声が大きく、出る言葉は前向きで、多感な学生諸君が聞くにはいささか抵抗感がありました。しかし今思えば含蓄のある内容でした。特に忘れられないことは、先生が時代の先端教育教材であつたラジオ放送（NHK）を利用した教育授業でした。ことあるごとに私たちに熱き思いいでアプローチしていました。今では当たり前前の教材ですが、結構付き合わされました。

私たち同窓も皆、今では介護保険証を持つ身となり、三商時代のエピソードにはこと欠きません。恩師竹田先生が先年彼岸へ行かれ。また寂しくなります。

私は今、温泉地づくりをテーマとすることに後半生の生きがいとして暮らしていますが、今回寄稿のタイミングが奇しくも別府からの帰京時でもあり、先生の遺徳を偲ぶよい機会にをいただいたと、大変感謝をする次第です。とにかく多感な十

代に経験した修学旅行の思い出は誰もが大切にしている一ページではないでしょうか。無事は吉祥。

私の趣味 日本画

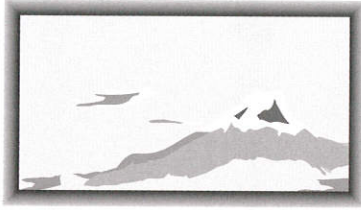
第二十八期 粕谷 安孝

家業のそば店の人手不足で、三時限目迄授業を受け、バイクを飛ばして下校し、店の手伝いをしていた。高校三年、かろうじて卒業出来、その後家業一筋、単調な仕事だけの毎日ではと考えていた矢先、社会人の日本画教室のポスターを目にして子供の頃から絵の好きだった私は、伊東深水門下の鈴樹由太郎先生の元へ週一度通い、四十五年の永い間教えを受けました。その間ボーリング、麻雀、ゴルフと友人から誘いを受けましたが、絵の勉強は時間がいくらあっても足りず不義理をしました。

でも、二人の子供も授かり、青春の思いが深い沢山の作品が残りました。今迄六回の個展を開き、見知らぬ方にも購入して頂き励まされました。又、店の中にも季節の作品を掛けてお客様にも喜んでもらえました。私の卒業した小学校（育英）の大先輩に杉山寧と云う日本画の巨匠がおりました。曰く「絵画は実在するものの再表現ではなく、実在するもの以上の生命感や美しさを創作しなけ

れば意味がない」と、私はこの師の言葉に改めて感銘を受けております。そしてこの生涯をかけても限りのない目標を趣味として持つことができ、若い時から学ぶことができたこと、幸せであったと想います。この良き趣味のお陰で辛い時も、胃瘍で入院した時も、写生用具を持ち込み退屈することなく、楽しく過ごすことができました。息子は私以上に商売熱心で三商の皆様にも引立てて頂いております。私も趣味と共に商売の方でも良い仕事をして、社会のニーズに応えて、残された人生を充実させたいと思っております。

こんな私ですがこれからも、よろしくお願い致します。



◆◆追悼記◆◆

斎藤 先生 追悼記

第十二期 吉岡 鶴義

出生は東京荒川区南千住、昭和十四年四月、府立三商へ入学、当時の三商は学校創立以来、初代吉沢校長のもと黄金期と云われた時代、吉沢校長の指導方針は東京の下町にリトルゼントルマンを育てる教育であった。従って創立時より小学校の成績優秀で、商家の息子を多く集める為の方策を取られたと云う。越中島は当時隅田川から東京湾へ出る埋立地、周辺は葦茫々の広っ原の中に超モダンな一見大学を想わせる校舎が聳え建てられていた。制服もユニークで背広服、当時公立学校では今までに無い制服とされ、最先端と考えられる三商に入学を許可された斎藤氏は、順調に学生生活を送っていった。然し初代吉沢校長は志半ばにして突然急死、急遽第二代今村校長へバトンタッチされていき、国家も次第に軍事体制へ変化していったのである。それでも三商のエリート意識は依然として存在、斎藤氏最終学年五年生時には遂にクラスを能力別に区分された。就職組を二つ、進学組を三つとしたのである。斎藤氏は進学組の最低クラス五組に属していた。つまり三商時代は

私同様あまり優秀ではなかった。然し卒業後の彼は凄く、一時終戦間際に予科練練習生に志願したが、終戦後は直ちに国立横浜高商（現横浜国大）へ入学、卒業後は広島商業、都立赤坂商業を経て三商へ転勤、小生と一緒に勤務することとなった。三商在任中は丁度六日町山寮建設と重なり一緒に建設準備をするようになった。山寮完成後は夏のクラブ合宿、冬のスキー教室と活用されたが、正月休暇中は教職員家族として斎藤氏の子息克己ちゃん、光昭ちゃんと当方の家族等も一緒に宿泊、楽しく越年したことが懐かしく想い出される。（この克己ちゃん、葬儀の時は医学博士として立派に成人されていた。）

その後も彼は終始一貫精力的に活動した為、石田校長から認められ、以来校長の鞆（かばん）持ちと悪口をたたかれたが小生とは生徒時代からの親友、お互いに助け合うことが多かった。石田校長定年退職後、彼は一時低迷していたが持ち前の気力で都の試験にパス、都立教育研究所の指導主事に抜擢された。それからの活躍は目覚しく都立高校全般を指導する立場となつて行った。次いで都立荒川商業の校長に栄進、商業高校のトップ都立芝商業高校々長にまで昇進した。その間全国商業高校々長会会長も勤め飛ぶ鳥を落とす勢いとなり、彼の恩恵を受けた人は数えることは出来ない程多かった。

芝商停年退職後は千葉経済短期大学教授とな

り、停年迄勤務したが、その間に政府より勲四等の叙勲もあり、多くの人望を集めた。

残念ながら本年一月二十一日肺癌の為逝去されたが、彼の庶民的で磊落な人柄は人々に愛され葬儀には教え子始め三百人以上の参拝者が参加、その別れを惜しまれた。葬儀の席で知らされたことは自身の死後、読経を願う住職そして葬儀委員長を生前から指名してあつたと云うから驚かされた。これも用意周到な彼の性格の一面を物語ると感嘆するばかりであつた。

法名 教導院徳譽慈道克励居士 合掌。

恩師 齋藤 克 先生

第二十六期 岩瀬 和子

私は二年の時工業簿記を教わりました。

私の親友が後ろの男子と写真を見ているのが、見つかり「出せ！」と云われましたが、彼女は渡りしませんでした。先生は怒り一ヶ月授業をしてくれませんでした。担任の伊東俊子先生が困られた事を思い出しました。

又、二学期の初め、舌たらずのようなべらんめえ調の声で「成績表の点に文句あるやつはいるか」と云われたので、私は咄嗟に手を上げてしまいました。「なんだ？」先生は驚かれたようにおっしゃ

いました。「私は、テスト十七点だったのに成績表は九十点になっていました」と云いました。

先生は「お前、嫁に行くとき、学校へ調査に来た時困るだろう」とおっしゃいました。

そのお陰でしようか、日本生命に決まりました時、先生を怒らせた彼女に「あいつ、よく日本生命受かったな」と云われたそうです。彼女は「彼女が出来ないのは簿記だけです」と言い返してくれたそうです。

とうとう簿記は級なしで卒業してしまいました。

町屋斎場で先生のご霊前に感謝の気持ちをこめて手を合わせて頂きました。合掌。

ありがとうございます。

故 齋藤 先生の思い出

(クラス会と叙勲祝い)

第二十八期 四組クラス幹事 吉野 和敏

二十八期(昭和三十六年卒)三年四組は齋藤先生の教えを受け、「仲良く、楽しく、元気よく」を合言葉にクラス会を毎年開催していますが、その輪の中にいつも、にこやかな先生がおられました。

先生の口癖は「俺より早く死ぬなよ！」でしたが、残念ながら、四名が先生より先に物故されました。

先生の思い出の一つに、平成八年十一月三日、新聞紙上に秋の叙勲者の記事が連載され、なんとその中に、我が恩師、齋藤先生の名がありました。「勲四等端宝章(当時)」で、先生の教職での貢献が高く評価されたものと思います。早速クラス会でお祝いをと、「記念祝賀会発起世話人会」を組織して、お祝いの会の準備をはじめました。そして、平成八年十二月二十一日(土曜日)秋葉原の「三友」で、クラス多数の出席により開催しました。

齋藤先生は当時七十歳、まだまだお元気で、お酒も楽しく飲んでおられました。神田囃子や、皆(欠席者はハガキで)のお祝の言葉、記念品の贈呈などで、時の過ぎるのも忘れてお祝いし、先生にも大変お慶びいただいたことが、今では懐かしい思い出です。また、その後もクラス会には毎回出席され、大きな身体で、学校時代と変わらぬばんからで飾らない人柄がクラス皆の人気でした。しかし、限りある人生、残念ながら平成二十年一月二十一日、満八十一歳で黄泉の国へ旅立たれました。

先生のいないクラス会は寂しいとは思いますが、「仲良く・楽しく・元気よく」の先生の教えを守り、今後も継続していきたいと思えます。どうぞ、これからは天国から、クラス会にご参加ください。クラス全員でお待ち申し上げます。

齋藤先生、ご指導有難うございました。ご冥福をお祈りします。

小暮敏雄先生の思い出

第二十八期 若月 健司

この度、八十周年記念特別同窓会報への掲載記事として「小暮敏雄先生の思い出」の依頼が小暮先生が担任された当時の三年七組のクラス会会長の鷺嘉雄君より小生にありました。昭和三十六年三月の卒業から今日まで四十七年ほどありますので、思い出と言われましても数多くあります。その中で今日までの五、六年間にいただいた先生独特の筆跡による賀状などを読み直しながら、在りし日の先生を思い出したいと存じます。

平成十四年の賀状

*当時の新聞報道における教師と父兄生徒間の相互不信を嘆かれる。

*クラス会のお礼（前年八月、深川牡丹町の二十八期上原一介君経営の「お好み焼き万年や」のクラス会のこと）

平成十四年六月の葉書

*パソコンメールにウイルスが侵入し、困った（先生と小生メール覚えたてで頻繁にやりとりあり）

*庭の草花の手入れが楽しい

*クラス会が待ち遠しい（奥様のご都合までを含めたスケジュールの記載あり）

平成十四年八月

*三年七組クラス会 暑い中、先生はお元気にござ

出席 於、万年や

平成十五年の賀状

*前年のクラス会のお礼

*次回から会費を受け取って欲しい

平成十六年の賀状

*前年の八月から十月まで腸閉塞で入院

お酒は我慢出来るが、少量しか食べられないのが寂しい（以降、体調が思わしくないようでした）

平成十六年六月 第二十八期同級会

*先生ご出席するも体調悪く途中退席

平成十七年一月の葉書

*奥様が前年十一月ご逝去された由

*先生ご自身も体調が万全でなく元気が出ないとのこと

平成十八年の賀状

*気力体力が衰えて熊の冬眠状態です

*花見時になったら、市川弘法寺の伏姫桜でも娘の介護を受けながら観たいものだ

平成十八年二月

*クラス会幹事でお見舞いの日時を設定するも先生の体調悪く延期となる

平成十八年四月五日ご逝去

平成十九年六月

*先生のおられぬクラス会 於、銀座「ブラッスリー・ロアジス」（クラス仲間吉野武夫君の勤務先経営）

平成二十年四月

*クラス会幹事で娘さんのご案内による墓参実施（鈴木孝一君、土屋勇君、寺崎正勝君、鷺嘉雄君、筆者）

顧みますと、ご逝去までの数年間、先生の体調が思わしくないので窺われたのにお見舞いにお伺い出来なかつたことに忸怩たる思いが残つたことです。幸いにも娘さんが我々の墓参を非常に喜んでいただいたことが、この忸怩たる思いを払拭したと勝手に解釈し、地下の先生にもまた、それをゆるしていただいたと信じております。

先生のご冥福をお祈りします。

恩師・磯川運良先生

ご逝去時の思い出

第二十八期 伊澤 宏祐

今思い起こせば、先生逝去の連絡を受けたのは、六年後輩の三十四期藤森怜さんより、平成九年六月七日の夕刻と記憶する。葬儀につき、相談したいとのこと、急遽ご自宅をお訪ねした。すでに先生のご遺体は病院より、戻られ、悲しい対面であった。晩年は癌と闘っておられるとお聞きしたが、安らかな、そしてふつくりされた、優しい顔で、いまにも目をさまされるかと、思われる永眠の姿が印象的であった。教会で葬儀を行うとの由

で、三十四期が中心になり、小生ら二十八期生は一部手伝いをさせて頂いたが、翌日八日の前夜式の弔辞をどうするか相談を受けた時に、咄嗟にクラス仲間の桑原浩記氏が最適と判断し二十八期に譲っていただいた。同氏は一年から三年迄、磯川先生が担任された八組で、先生とは深い繋がりがあつたと聞き及んでいたからである。

この葬儀から、早やくも十一年が過ぎようとしているが、昨日のように、思い出される。

【三商創立八十周年同窓会報記念特別号】に、同氏の三鷹教会での弔辞文をのせ、私共の磯川先生への思いを永く記録させて頂きたい。

弔 辞

昨年十月、四年に一度開催される同期会を品川で行なつた時、又、その二ヶ月後の十二月にクラス会を門前仲町で行なつた時も、先生は体調がすぐれないとの事で出席して頂けませんでした。そのクラス会の席上で、誰から言うともなく、「先生が来ないとやっぱ寂しいナー」。「先生今年七十歳になつたんだってヨー」。「それじゃあ、来年五月か六月季節の良い時に遅れ馳せながら、古稀のお祝をしようぜ」。「それは良い」。「そうしよう」。「と相談もすぐにまとまりました。今年に入り五月も過ぎ、「もうそろそろ幹事から連絡が入つても良いのにナー」と心待ちにしていた矢先、昨日その連絡の代わりに先生の訃報が入りました。

今は、突然のことで、驚きで胸がつまる思いです。先生と久しぶりに逢えることを楽しみにしていたのに、このような形で逢うなんて、とても残念でしかたがありません。

思い起こせば、三十六年前、遠い記憶となつた事も沢山ありますが、昭和三十三年四月、晴れて都立3商に入学し初めて先生に出会いました。一年八組男子ばかりのクラスです。皆、新しい環境に戸惑い、期待と不安を胸につめ込み緊張している雰囲気教室に漂っていました。先生も三商に赴任されて初めてクラス担任を受け持たれたとの事で緊張されていた様子でした。出席を取り、一人づつ名前と顔の確認が終り、クラス委員の選出です。先生は自主的に行なう様にと発言されました。誰もが無口になり、シーンと教室が静まりかえつたとき、皆を、なじめせようと、「明るい笑顔」と穏やかな話し方で「高校生にもなると各自、自ら自主的に行動を起さねばいけない事」この自主的に行動を起す事の大切さを、この時の説明で教わつたと思います。

少し日が経ち、皆も学校に慣れ、友達付き合いも始りかけた頃、巡ってきた自習時間。「校庭でソフトボールをやろうぜ」との声に、ある者はどこからともなくボールを調達し、ある者は学校の近くの実家からバットを取ってきて、一時間たっぷり遊び、友達付き合いが深まった事に満足しつつ意気揚揚と教室に戻ると、そこに怒つた先生が立っているではありませんか。多感な年頃の男子生徒を怒りながらも、愛情がこもつた態度で諭さ

れ、一同反省、この事が、先生と私達との最初の絆の芽生えでした。

その後もいろいろな生徒のいたずらや、事件に対しても何時も先生の誠実な態度と弟を諭す様な話し方、接し方は「先生と生徒」と言う関係より「兄貴と弟」と言つたような。お互い何でも話し会える素敵な雰囲気のあるクラスを育てました。

そして私共生徒は終始変わる事のない「先生の人生に対する誠実さとひた向きさ、人を信じて疑う事を知らない心を」幾度も教えられました。

卒業以後、今までもその事は私達の心の底に残り、これまでの歩みにいかされてきました。又、この事は沢山の教え子たちの人生にも大いにかかわり、役立っているものと確信しております。若く多感な時期に先生に巡り逢えて本当に幸でした。心から感謝しています。「先生有難うございました」。

ずっとお元気で。何時までもクラス会を続けて行きたかったです。まことに残念に思います。

先生どうか安らかに眠りください

先生の人を疑わない愛くるしい「まなざし」を私共は終生忘れることはないでしょう。

ご瞑福を、心よりお祈り申し上げます。

(第二十八期 桑原 浩記)

佐藤卓先生を偲ぶ

第二十八期 渡辺 邦晃 (旧姓今井)

佐藤先生とは昭和三十三年四月三商の入学式で初めてお逢いしました。

以来一年五組、二・三年九組と三年間お世話になりました。私の印象に残る先生は何時も愚痴っぽく「しようがねえんだよう」といつている姿です。特に九組は男子クラスで個性の強いクラスメートが多く、先生はいつも授業以外の問題を抱えていたのではないのでしょうか？

先生は戦中、戦後世代のため早稲田大学に2度入学されたと聞いています。学究肌の真面目な先生ですが、人情味溢れる語り口で我々生徒と同じ目線で接してくれる、暖かい先生でした。定年後、中野駅でボランティア活動をしているとき、旧制日大一中の同級生に出会い、「昭和女子大の英文学の講師をすすめられ、シエクスピアの講義をしている」と言った時の嬉しそうな姿は、今も鮮明に私の脳裏に残っております。我々のクラスはクラス会を「卓三会」と名付けています。先生は自分の名前が入っていることをとても喜んでくれたそうです。

その先生が平成三年に入院されたと聞き、早速クラス会を開いて見舞いに訪れました。時すでに遅く癌の転移があり、九月五日六時十六分亡くな

りました。先生の自宅へお邪魔いたしいろいろ話しをしていうちに江畑信治氏（やはり一年から三年まで一緒だった）が「先生の葬式をやつてあげようよ」ということになり奥様の許しを得て通夜、葬儀、告別式、繰り上げ法要と九組、旧一年五組の有志でお手伝いを致しました。卓三会のあり日しの先生の言葉や姿が走馬灯のように浮かびます。我が恩師は素晴らしい思い出をたくさん残してくれました。

佐藤先生の奥様が著わした『お茶の水橋』という歌集より先生のことを詠った歌を、抜粋させていただきます。先生を偲ぶすがにしたいと存じます。

一ヶ月ぶり背広となりて出る病院

わかりし病名告げざるままに

娑婆はいい ふかぶか座る息子の車

新宿の灯うつる退院

十年も前から自ら用意し写真

菊花の中にほほえむ

徳風会、日大一中、卓三会：

夫の喜ぶ生花が並ぶ

(土井あき子歌集より)

佐藤卓先生の思い出

第二十八期 片山 覚
(早稲田大学商学部教授)

我々二十八期生は、昭和三十三年に入学し、昭和三十六年に卒業した年度である。入学式の翌日、四月十一日の始業式に、第三代校長・伊沢信治先生が離任され、第4代校長石田壮吉先生が着任された。一年四組になり、担任は長谷川正男先生(商業担当)であった。佐藤卓先生との出会いは、二年九組の担任となられたときからである。三年次にも引続きクラス担任をしていた。佐藤先生は、早稲田大学を卒業され、我が母校に英語教員として赴任されていた。丸顔で小柄だが、エネルギーで口角泡を飛ばす、気持の本当に若々しい先生であった。新学期が始り、最初のホームルームで、開口一番、三つの約束「ほうれんそう」を守るようにいわれた。「報告・連絡・相談」を密にするようにと。

その時から、佐藤先生と我々生徒との長い間の交流が始った。「ピンちゃん」の愛称で我々は非常に親しみを感じていた。なぜ「ピンちゃん」と呼ぶのか、理由は判然としないまま、生徒同士では、親愛の情を込めて、そう呼んでいた。佐藤先生は、とにかく愛すべき人間性を備えたクラス担任であった。我々生徒を愛してくれた。男子ばか

りの悪がきを、心から信用してくれて、接してくれた。本当に温かみのある、人間味に溢れた、今考えると、あんな先生はあまりいないのではないのかと思う。この気持はクラスの仲間みんなに共通する感慨であり、佐藤先生が担任であったことを、しみじみ懐かしく嬉しく思う。

一度、我々が悪さをして、全員が校長室に呼ばれ、厳しい石田校長の前で小さくなっていることがあった。そのときも、佐藤先生は生徒の側に立って懸命にかばってくれた。二年の十一月十一日から四泊五日の日程での、九州修学旅行も良き思い出として印象に残っている。国鉄長崎駅で地元ブラスバンドの歓迎を受け、佐藤先生が満面の笑みをたたえていた。熊本の高原湾で、誤って岸壁から落ちた生徒に飛び上がるほど驚いていたり、早く就寝するようにと、各部屋を回っておられた。高輪プリンスホテルでの卒業謝恩会で、君たちクラスのことは一生忘れないと、涙を流してくれた。卒業後も、クラス会「卓二会」を開催するつど、万難を排して参加してくれ、必ず過分の配慮をしていた。佐藤先生の参加しない「卓二会」は考えられなかった。佐藤卓先生、我らが青春・人生を豊かなものにしていただき有難うございます!!

先生は、今でも我々の心のなかに若々しく生き続けています。



訃報

ご冥福をお祈り申し上げます。

齋藤 克 先生

(第十二期卒、元全国商業高等学校長
協会理事長)

平成二十年一月二十一日 肺がんのため
ご逝去されました。 享年八十一歳

都築 健一 氏

(第二代同窓会長、第三期卒 入船堂
本店創業者)

平成二十年四月二十六日 享年九十歳

山崎 順三 氏

(第十期卒 三商会計人会・木樨会同人。「やそじ会十期会報」発行代表者)

平成二十年一月十日 享年八十三歳

府立三商時代を想起する

第十六期生の三商生活

第十六期 高野 清

三商創立八〇年に際し、気まぐれに筆のむくま
まに第一六期生の三商の学校生活を振り返って書
いてみました。戦中から戦後にかけて（一九四三
年四月から一九四八年三月まで）の五年間の三商
の学校生活は、まさに激動の時代を背景にした特
異なものでした。先輩たちには昔の青春時代を思
い出していただき、後輩たちには未体験の歴史上
の事実を知っていただけたらと思います。遙かか
なたの記憶を思い起こし再現したので、細かい点
については思い違いがあるかも知れませんが、お
おすじは違っていないと自負しています。

一 私が三商へ入学した一九四三年（昭和十八
年）は太平洋戦争真っ盛りで、学校の制服制帽は
カーキ色の軍服に似た洋服と同色の戦闘帽（野球
帽のような帽子に顎紐がついたもの）でした。膝
から下の脚部にはゲートルという带状の脚絆を巻
き・靴は足首まである編み上げ靴を通学時に履い
ていました。

当時は、国民学校（現在の小学校）を卒業して
すぐに三商へ入学し、五年で卒業です。入学時の
競争率は二倍か三倍くらいだったでしょうか。私
が入学したときの三商は「東京府立第三商業学校」
でしたが、入学した年の七月に東京都制が布かれ
東京府と東京市がひとつになって東京都となり、
それにつれて「東京府立」も「東京市立」も、と
もに「東京都立」に変わりました。市立学校より
も格うえの府立学校に難しい入試をパスして入っ
たのに、市立と同格の都立になってしまい、寂然
としませんでした。当時は男女共学でなく男子校
です。

校舎はコンクリート造りの地階を具えた地上三
階建、建物中央部に大きな時計台が天高く聳えた
立派な建造物でした。本校舎の他に、講堂・体育
館・武道館があり、運動場の隅には土俵まであり
ました。当時の街には高い建物が少なかったので、
時計台は遠方からもよく見え、好天時にはJR総
武線（錦糸町・両国間の高架線上）の車窓から遠
望できました。

二 当時、通学の交通機関は路面電車の都電し
がなく、乗降する停留所は学校から指定されてい

て、門前仲町と木場一丁目がそれで、それ以外の
停留所での乗降は禁止です。違反することは許さ
れません。遠い停留所から歩かせて強健な身体を
作らせようということでしょう。朝の通学時に都
電から生徒が多勢降りると、その中の最上級生（五
年生か四年生、ときには三年生）が引率者になっ
て二列縦隊の隊伍を組み、校門まで早足で歩いた
ものです。歩行中に先生に会えば引率者が「歩調
とれ。かしら右」と大声で号令をかけ全員が一斉
に先生の方に顔を向けて敬意を表します。こうい
う状況が校門に入るまで続きますが、当身体が小
さかった私は皆の歩幅の大きいかつ早い歩調に合
わせるのが大変で、息を弾ませながら付いてゆき
ました。

三 始業時間になると、雨でも降ってない限り
毎日校庭で朝礼です。校舎内はもとより校庭でも
下足禁止で全員裸足です。真冬の冷たい校庭での
裸足はこたえました。またその朝礼時間の長いこ
とといったらありません。今村校長先生の訓話か
ら始まって、江藤先生（明治の元勳江藤新平の末
裔）の葉隠の解説やら北古賀先生の愛国百人一首
の解説や幕末時代の勤皇志士の話とかがあつて、
更に軍事教官から「近頃たるんどる」と長々と説
教があつたり、その他の先生方からいろいろな伝
達等があり、長いときは一時間目の授業がつぶれ
ることが何度もありました。朝礼中に真冬の裸体
操もありました。夏の猛暑時には、朝礼の途中で

生徒が何人も倒れ、先生まで倒れて大騒ぎになったこともあり。今でいう熱中症でしょうか。

四 今の教科と比べて一番の違いは軍事教練があつたことです。週に四こまくらいあつたと記憶していますが、現役または予備役の軍人数人（将校と下士官）が軍事教官として陸軍省あたりから学校へ派遣されてきて、将来の軍人としての素養を生徒に備えさせよう、という趣旨で軍事教育をするのです。軍人としての歩き方や隊伍の組み方更に木銃を持つての行進のしかた等々を教わるのですが、上級生には本物の三八式歩兵銃を使つての指導もありました。

雨天時の座学では、明治天皇の「陸海軍人に賜りたる勅諭」の解説があり、「我国の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にぞある。昔神武天皇躬つから大伴、物部の兵どもを率ゐ、云々」から始まるあの長い勅諭の暗記を宿題に出されたことがあり、音を挙げました。富士山の裾野での軍事教練の合宿があり、暑い直射日光下での匍匐前進と真夜中に起こされる非常呼集と粗末な食事とで疲労困憊でした。

生徒に厳しく威圧的だつた軍事教官が多かつたなかで、私ら担当の金井教官（たしか憲兵出身）は大変物静かな人で、生徒に鉄拳制裁することはめつたになく、訥々と理を説く立派な人でした。

五 一年生のときの先生で強く印象に残っている一人が、数学の島先生です。色白の若い人で東

京物理学校（現在の東京理科大学）出の秀才との噂でした。教え方が丁寧で大声を出すことなく静かな授業でした。大声で元氣よく授業する先生が多かつたときに、稀有な存在でした。その先生が急に応召され軍隊に入隊することになったので、私らのクラスだけで先生を交えて富岡八幡へ武運長久を祈願に行きました。その後の島先生の話は分かりませんが、あの若くて優秀な物静かな人が、その後どういふ運命をたどつたのか、戦野に散つたか或いは無事生還したかと、今でも思い出すことがあります。日の丸の旗を肩から斜めにかけて八幡さまへ行つた先生の姿が、鮮明に記憶に残っています。

変わった教科として中国語がありました。先生の名はたしか若林先生、その授業で教わつたもののひとつが満州国歌でした。五族協和を主旨とした満州国（中国東北部）の歌です。中国語は発音が難しく、四声といつて発音で語尾を下げたり上げたりまたまわしたりして、私らの手に負えない感じでした。

いちばん印象に残っているのは矢島先生です。同先生との付き合いは先生が亡くなるまで続きました。卒業後に「三商矢島会」を有志で作つて年に一回は先生とともに一泊旅行をしました。先生亡き後は私ら仲間毎毎年募参りをしています。

三商を語るときにどうしても避けては通れない先生は、何といつても清田先生です。生徒の名前

と顔を正確に記憶している抜群の記憶力と世話好きの親分肌、その巧みな話術は聞く人をひきつけてやまない名物先生です。同期会で先生の話聞くのが楽しみでした。

六 三商入学後に、山本五十六連合艦隊司令長官が戦死し、その死を哀悼するための国葬が営まれたとき、同長官の柩を迎えるため、四谷見附付近まで学校中へ出かけたことがありました。隊列を組んで道端で長い時間待たされたのに、柩は一瞬の間に通り過ぎてしまい、あつけないことでした。

遠足はありましたが、交通機関を使わない徒歩旅行です。例えば新宿から甲州街道を歩いて調布市の仙川まで歩き、また渋谷から三軒茶屋を通じて多摩川畔まで行つたこともあり。徒歩でも身軽なら楽ですが、決められた重量の砂などを詰めたりリュックを背負つての遠足です。上級生になるほど重量が増すわけで、強健な肉体と強固な精神を培うためです。軍人になるための準備といえます。

戦況がますます厳しさを増してきた昭和一八年後半以降から、陸海軍省あたりから派遣されてきた将校たちが学校へ来て、全校生徒の前で聖戦完了を唱え若者よ君らを待つていと獅子吼して、私らの心を高揚させました。それに釣られてか、上級生の中から軍隊へ志願入隊する者が続出し、志願した上級生たちが毎週のように朝礼台の上から全校生徒に入隊の挨拶をしました。海軍の飛行

予科練習生（予科練）志願が多かったようです。そのなかには特攻隊の要員になった人もいます。です。何人志願して何人戦死したか詳細は分かりません。私らは年齢がまだ足りないため志願の資格がありませんでしたが、同期生のなかにその後陸軍幼年学校や少年戦車兵学校へ入学した者がいました。私も入学資格ができたら軍の学校へ入ろうと真剣に考えていました。

七 一九四四年には、戦争遂行上必要な造船産業に携わる人材を育成するとの趣旨で、造船工業学校が併設されました。私らの同期生から造船工業学校へ転校した者もいましたが、その多くは他の都立工業学校からまとまって移動してきた生徒です。同じ校舎に三商の他に工業学校が併存するという変則的な学校になりました。その後の二年間の生徒募集は造船工業学校のみで、三商の募集はなかったと記憶しています。なお、戦後に造船工業学校は閉校になり、同校の生徒の一部は三商へ転校してきました。

八 若者がどんどん戦場へ狩りだされ、軍需物資と農産物の生産に支障をきたすようになったため、昭和一九四四年の秋に私も学校から工場へと動員されました。学生から工員になったわけです。私の動員先は、深川の扇橋にあった東京船用金物という町工場です。船舶用の機械器具を製造していました。単純な作業でしたが、失敗することも

多くだけ役に立ったのか今でも忸怩たるものがあります。東京大空襲でその工場が罹災したので、動員先が枝川町にあった日本開発機製造という工場へ変わり終戦までそこで働きました。月給はたしか三〇円で、月給の全部を貯金していましたが、空襲で貯金通帳を焼失してしまい、そのまま無駄にしてしまいました。

九 一九四五年三月の東京大空襲では、学校はかろうじて戦災を免れました。宿直の教職員の消火作業のお陰で講堂のカーテンが焼けた程度の被害で済みましたが、生徒の多くは下町住まいが多かったため、家屋その他の財産を焼失する被害を受けたばかりか多くの死者を出しました。教職員と生徒を合わせた犠牲者は一〇〇名を超えます。犠牲者といえばそれより前の一月にも、JRの有楽町駅や神田駅が爆弾の直撃を受け、多数の市民が犠牲になりましたが、そのなかに私らの同期生がいました。彼は友人二人とともに日劇そばの有楽町駅中央改札口から駅構内へ入ろうとしたときに、近くに落ちた爆弾によって即死、友人二人も重傷を負いました。これは彼のすぐ隣にいて重傷を負った友人の証言です。動員先から自宅へ帰る途中の出来事です。米国の爆撃機七二機が武蔵野市にあった中島飛行機工場をターゲットに飛来したが、雲が厚く垂れ込めていたため目標が分からず、爆弾を搭載したまま都心まで飛行して市街地に爆弾を投下したのです。これはそのとき重傷を

負った友人のその後の調査によるものです。

私のところも東京大空襲で家屋焼失、家族が名前を呼び合つて命からがら逃げ回るのたいへんでした。日用品はリヤカーに積んだものの、逃げる途中でその荷物とリヤカーが足手まといになり捨てて逃げました。広い明治通りが右往左往しながら逃げ惑う避難民で溢れかえり、強風にあおられた火焰と熱風が明治通りの避難者に吹きかかると、彼らはばたばたと倒れてそのまま動かなくなります。まさに阿鼻叫喚の地獄絵を見ているようです。こんな状況でリヤカーを引っ張って逃げるのが困難になったので、荷物とリヤカーを放置したわけです。身軽になったのでコンクリート造りのJRの駅舎へ逃げ込もうしましたが、中はすでに満杯の避難者で隙間がなく入り込む余地がありません。やむなく他の安全な場所を探して、翌朝まで町中を徘徊しました。右駅舎に避難した人たちのほとんどが犠牲になりました。私ら家族は大きな怪我はなかったものの、一夜にして家屋その他の財産のほとんどを失いました。

あくる朝、路上に重なったりまたは散乱している犠牲者を避けながら小岩の親戚へ歩いて避難しました。後日、隅田川その他の河川へ逃避したひとたちが溺死者になって引き上げられ、川岸に山積みになっているのを目撃しました。ひと晩で一〇万人が犠牲になりました。

十 空襲後の東京は交通機関がダイヤどおりに

は動かなかったり不通になったりすることが多く、徒歩で学校や動員先まで往復したこともあり、また。罹災後にいちばん困ったことといえば、住む家もそうですが、食べ物や物資に少ないことと着替えがまったくないことでした。物資不足のため経済統制が布かれていたので食料や日用品は正規な方法では自由に買えず、本当に困り果てました。沢山の子供を抱えた親たちの苦労は、今考えて並大抵のものではなかったろうと感無量です。罹災後は時計もラジオもなく時刻が分からず、隣家へ時刻を聞きに行くありさまです。母親は朝の起床時刻を付近を走る総武線の一番電車の音で察知していましたが、ときには終電車と一番電車を間違えて終電車時に起床したこともありました。食事する箸にも事欠き、木の小枝を折って箸代わりにしたこともありました。

十一 終戦時の天皇の放送は動員先で聞きましたが、ラジオの雑音がやかましくて正確に聞き取れません。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」の部分の聞き取れたので、てつきり我慢忍耐しながらの戦争継続かと早合点しました。先生方も分からなかったようで、要領を得ないままその日は解散になりましたが、帰途の車中での周りの人たちの会話を聞いて、はじめて敗戦を知りました。硫黄島や沖繩まで占領されて最前線が本土の目の前に迫り、連日のB二九による本土爆撃や艦載機による機銃掃射、それに近海を遊弋する米軍艦艇

からの艦砲射撃を浴び、更に原子爆弾まで落とされては、戦局の有利な転換などできるわけがないのですが、戦況の本当の事実や残された軍備の貧弱さを正確に知らされていない国民にとつては、特に私らのような軍国主義一色に染め上げられた愛国少年にとつては、まさに青天の霹靂でした。天地がひっくり返つたような衝撃でした。

十二 終戦により動員令が解除され、私らは工場から学校へ戻りました。学校の校舎や設備はしばらく見ないうちに相当に荒れていました。空襲で罹災した近隣住民の避難所になっていたためでした。窓ガラスのほとんどが破れトイレは詰まって汚水が溢れています。こんな状況のなかで戦後の教育が始まりました。教科書もノートも不足し筆記用具も満足にありません。真冬の教室では破れた窓を補修した板からの隙間風の冷たさに震えました。

大きな問題は、価値観の大転換が始まったことです。現人神で実権者だった天皇陛下は自ら神性を否定し人間宣言をして実権のない単なる象徴になり、政治形態は軍部の上級官僚の独断政治から英国型民主政治へと激変しました。白が黒になり黒が白になりました。身近な例では敵性語ということで排除してきた英語が校内に氾濫し、あらゆる部屋の出入り口に英語で書かれた掲示板が掲げられました。正門にも英語の看板「THE TH IRD TOKYO METROPOLITAN

COMMERCIAL SCHOOL」が取り付けられました。

軍隊や軍の学校から三商へ戻ってきた上級生が十数人いました。この生徒たちは気が荒く校内で喫煙したり飲酒したりして、先生方を悩ませていたようですが、少しずつ改善されました。

教科は徐々に充実してゆきました。新しい憲法の説明があつたり、英字新聞を使った実用英語の時間もありました。戦中時代との大きな違いは、生徒自治会とクラブの創設でした。自治組織として生徒会が発足し、五年生のときには大谷君（後の上智大学長）が生徒会長を務めました。運動部では当時の流行の野球に圧倒的に多くの生徒が集まりました。柔剣道は軍国主義につながるのとこととで禁止されました。学芸関係では英語とか演劇とか文学に人気がありました。私は珠算部に所属して、先輩でもある杉原先生に師事し、お陰さまで東京都競技会で三位になったことがありました。同じ珠算部でもとにも勉強した後輩の中野君は後年全国競技会で再三優勝しています。

終戦直後は石炭不足から停電が多く、期末試験等の準備をするときには泣かされました。毎晩決まったように停電し翌朝まで停電が続きます。ろうそくを点しての読書は暗くて目が疲れやすく長続きしません。友人のなかには近くの駅で勉強した者もいたそうです。駅はめつたに停電しません。学校の近くの商船大学には米軍の騎兵隊が常駐していました

が、こういうところは停電がなく不夜城のようにいつもこうと電気が点いていました。

全校で野球大会があったときに、商船大学に駐留中の米軍の将校が突如校庭に入ってきて私らに加わり、予期せぬ日米親善野球になりました。その将校が野球大会終了後に朝礼台から挨拶しましたが、近いうちに米国に帰って大学に入り勉強の道へ進む旨を話し、これからの日本は君たち若い人にかかっているから頑張つて欲しいという趣旨の挨拶でした。忘れられない光景です。

十三 卒業をまじかに控えて、学校制度の大きな変更がありました。いわゆる六・三・三・四制の新設です。私らは旧制の商業学校卒として五年で卒業するか、もう一年在学して新制高校卒になるかの選択を迫られたのです。旧制のまま卒業すると将来新制大学の入学資格がなく、進学の道を閉ざされるとのことで、いずれは機会をみて進学したいという気持ちもあつて大いに悩みましたが、我が家の経済事情を考えてやむなく旧制で卒業して就職する道を選びました。進学希望者は新制高校三年生になる方を選択しました。私は学校の紹介で財閥系の化繊会社に入社となりましたが、偶然にもその会社には今村校長先生のご息子がいて、その後何かとご息のお世話になりました。一九四八年三月に卒業式と謝恩会があり、私の三商の学校生活は終わりました。

その後三商の校名の存続について危機がありま

した。校名にナンバーを付けるのは封建的であるとの占領軍司令部の意向を受けた当局から、ナンバーを削除した校名に変更するようにとの要請が各学校にありました。都立一高が日比谷高校になり都立三高が両国高校になったように、多くの学校がこれに従いましたが、今村校長先生をはじめとする商業学校関係者はこれに反発し、先生方のご尽力でことなきを得ました。

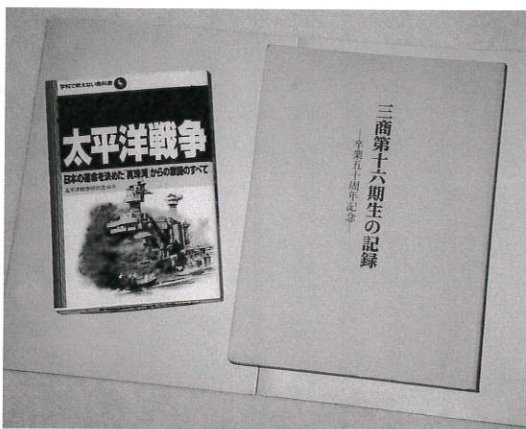
十四 私らの三商時代は戦中戦後にまたがり、その間に敗戦を契機に国政や社会の根幹部分が大きく軌道修正されました。戦時下の思想言論の自由がない人権無視の時代を経験し、戦中戦後の食糧や生活物資の極度の不足等のため惨めな暮らしを体験しました。そればかりか戦争の悲惨・残酷・恐怖を身をもって体験し、更に価値観の根本的

な転換や学校制度の改革もあり、時代の流れに激しく翻弄された不幸せな年代という思いがありますが、しかしこのような歴史上の大きな節目に立ち会えたことの幸運を感じることもあります。

最後に、亡くなった教職員や同期生たちのご冥福をお祈り申し上げます。これらの人たちの面影が走馬灯のように頭のなかを駆けめぐり、感慨無量です。

あとは余談ですが、私ら一六期生は一九九七年一月に「三商第一六期生の記録―卒業五〇周年記念―」を発刊しました。

先生方や同期生から寄稿を仰ぎ、それに若干の資料を加えて六〇〇ページにも及ぶ大冊にまとめたものです。先生方や同期生らの思いや体験が十分に満喫できます。三商や公立の図書館に蔵書として保存してありますので、機会があつたら是非ご一読ください。(二〇〇八年一月記)



府立から都立へ

第十四期 出口 吉昭

(はじめに)

私は神奈川県三浦半島の三崎から東京に出てきた父が、築地市場内で鮮魚仲買業を営んでいたの
で、その後継者となる準備のために京橋区立築地
小学校（現在は中央区）から東京府立第三商業学
校へ昭和十六年（一九四一）四月に入学し、昭和
二十年（一九四五）三月に東京都立第三商業学校
を卒業した。

(学校生活)

小学校と違って、三商ではいろいろな初体験を
した。

まず、全校生徒が集合する朝礼で、私たち一年
生と二年生以上の服装が異なっていることを知っ
た。私たちは戦闘帽に褐色の国民服なのに、上級
生は丸帽にグレイの背広でネクタイ、二年生は半
ズボンで、三年生以上は長ズボンと、同じ学校の
生徒なのに、私たちと比較して非常に格好がよ
かった。後でわかったことだが、私たちが入学し
た時から、全国の男子中学校生徒の制服が国民服
乙号で定められ、帽子も戦闘帽となったためであ
った。

朝礼の前にはクラス全員が一行に並び冷水摩擦
を毎日行った。風邪気味の者は乾布摩擦をした。

月曜日には校長先生の話があったが、話は総じて
長く、生徒（稀に先生も）が失神して倒れたり、
一時間目の授業に食い込んだりした。

三商への通学は、一人で初めて乗る市電を利用
していたが、ほどなく、地図上で学校から半径二
キロメートル以内に住む生徒は徒歩通学と決めら
れたため、ほぼ半径二キロメートルの線上に家の
あった私は待望の市電通学を断念させられ、徒歩
通学となった。その上、ある時から往復の通学時
にゲートルを着用することが決められた。靴の上
から膝下まで巻いたゲートルは歩行途中で崩れて
しまい、通学途中でゲートルを何回か巻き直した。
千葉県館山市の学校の研修寮があり、夏期研修
でそこに宿泊した。昼は館山湾で水泳練習をし、
夜は一人で定められた場所まで、順番に暗い道を
辿る「肝試し」などが行われ、楽しい思い出をつ
くった。

一年生の秋が終わる頃に、雨天体操場に軍隊が
入ってきて駐留した。そして、我が国が十二月八
日に英米両国に宣戦布告をしたことがラジオで報
道された。また、新聞・ラジオの天気予報・気象
報道が中止となり、さらに、英・米の映画は上映
禁止となった。くわえて、毎月八日が大詔奉戴日
となり、校長先生が全校生徒に開戦に当たつての
勅語を奉読するようになった。

十八年七月に都政が実施されたため、東京府が
東京都となり、東京府立第三商業学校も東京都立

第三商業学校と改称された。

(授業)

教室では、背の高い順に後から前に席が定めら
れ、最後列の左端と最前列の右端にはクラス委員
が座った。毎年クラスの編成替えがあったが、私
は背が高くなかったので常に前から二列目の位置
にいた。小学校では、学期ごとに級長・副級長を
選挙したが、三商におけるクラス委員は先生によ
る任命制であった。個性豊かな先生による授業
は楽しかった。

珠算では、小学校の時から塾に通っていた友人
の指の動きの早さと、暗算の確かさに驚いた。算
盤（そろばん）を使った割り算で、もたつてい
る私を見かねて父が「弐、壱、点作の五」と教え
てくれたが、私の習っている方法と違うので、父
から教わるのは断念した。先生は私の算盤の速さ
を熟知されていて、加減算は四桁、暗算は一〜二
桁の授業始めの部分で私を指名してくれた。それ
から、加減算は三〜六桁、暗算も一〜四桁以上に
進むが、私の指と脳はそれに追いつけず、ただ呆
然としていたと思う。

簿記は普通のノートにGペンで赤線を引き、会
計帳簿をつくった。そのため、常に指先が真っ赤
になった。貸方と借方を理解するには長い時間を
要した。

習字では、授業の始めに宿題を忘れたり、硯と
筆がきれいに洗えていないと、顔に髭を書かれ、

そのまま授業を受けた。そして授業が終わると洗面所に直行した。

数学では、先生に質問されて答えられないと、授業中立たされた上に髪の毛を三本

抜かれ「お前は猿だ！」と言われ、授業が終わると人に戻った。

音楽は謡曲で、教則本が「鞍馬天狗」だったが、私が期待していた当時著名な小説家大仏次郎の「鞍馬天狗」ではなかったので失望した。それなのに、今もヨーロッパ歌曲のメロディを覚えてるのは、昼休み中に流されていたレコードのおかげである。

英語の授業時間数は上級生と比較して半減したと聞かされたが、後にアメリカに留学した際、意思の疎通が思うようでなかったのはそのためかと、自分の不勉強の言い訳としている。ベースボールが野球、テニスが庭球、バレーが排球と改称されたように、英語名は身辺から姿を消した。戦争を続けるに当たって不適切だと思われる教科書の部分も墨を塗るように先生から指導を受けた。

軍隊から配属された軍人の先生による教練は厳しかった。まず、教室内では軍人勅諭を暗唱させられた。小学校のときに暗唱した教育勅諭や歴代天皇の名前より長いので、始めの方しか出来なかつたので、よく立たされた。教室外で必ずゲートルを巻き、三八式の銃を持って行動した。四列縦隊の分列行進の練習も行ったが、身長の高い

順に列を作るので、先頭の背の高い生徒がいくら歩幅を短くしても、後ろの私のような背の低い生徒は大股で付いて行くのがやつとだった。特に分列縦隊が曲がるときは、縦隊の外側の生徒は駆け足でないといっていて行けず、私の肩の上で銃が踊った。教練で、一番苦しかったのは、防毒マスクを着けて駆けたときで、マスク内に空気が流れてこないのが息苦しく窒息しそうになった。

富士山麓の滝ヶ原兵舎、板妻兵舎で軍事訓練があった。同級生にラッパを吹ける友人がおり、私たちは先生の命令でその音に合わせて歩調をとったり、銃を携帯して行進したが、駅から兵舎までかなりの距離があり、途中で何回も休憩をした。兵舎では就寝用に三枚の毛布が与えられ、二枚を折りたたんで敷き布団にし、一枚でそれをくるんで、その間に身体を滑り込ませた。ときに、就寝中に非常点呼があり、衣服を着用して集合させられた。ある時、食事中に宿舎の出入り口から大きな軍馬が侵入してきたので、慌てた私たちは自分の箸と食器を持って反対側の出入り口に殺到した。しかし、ラッパを吹いていた友人が落ち着いて軍馬を宿舎の外に誘導してくれたので、事なきを得、食事を続けることが出来た。

三年生の時は短期間ではあったが、時々学校外での勤労奉仕を科せられた。これは、十六年十一月に国民勤労報国協力が公布されて生じた勤労奉仕義務によるものだと後で知った。

授業中に戦況を熱心に解説してくれる先生も、戦争は度外視した授業のみの先生も、若い先生から中年の先生まで徐々に出征して学校から去っていった。

四年生になると、学校で授業は行われずに、日本ソーダという会社の鉄鋼部門の工場に配属され、旋盤を扱う部門に入り、高射砲の砲弾の外側を作るようになった。工場に行っている間は授業は無かったが、教練のみ、先生が工場に出張して行われた。

(戦災・卒業)

開戦初頭の勝ち戦が、何時、負け戦になったかは、私たちにはわからなかったが、身の回りの厳しさを徐々に感じるようになってきた。鮮魚仲買業が廃止され、統制会社ができただけで、父も統制会社の社員となり、家の収入も激減した。

私たちは都立三商を四年で繰り上げ卒業することになり、卒業後の進学・就職について、学級担任の先生から希望を聴かれた。父からは大学を受験しろと言われたが、授業料のない東京第三師範学校を受験した。この間、フィリピンで二人の叔父が相次いで戦死した。

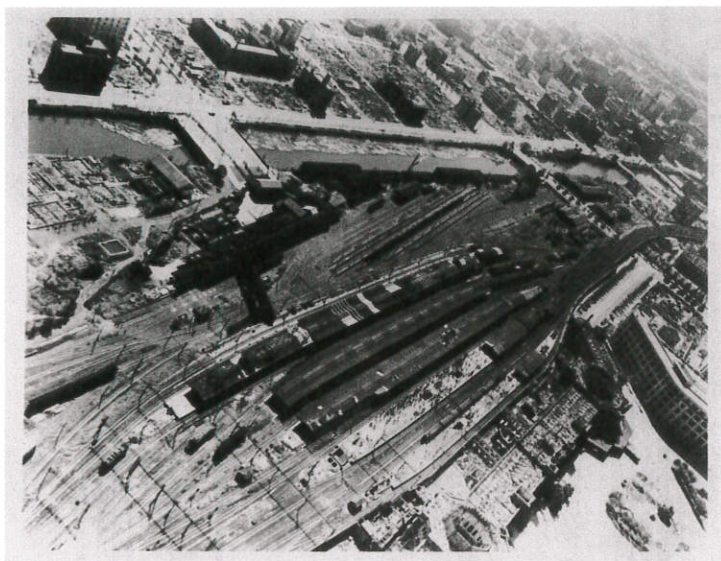
卒業年の二十年三月十日に空襲で家が焼けたため、埼玉県越生に引っ越した。これにより、それまでの私の書類による記録はすべて消滅し、脳裏に残るもののみとなった。名目上は都立三商を卒業したが、進学した学校から連絡があるまでは従

来の工場に通っていた。しかし、工場内で左足の小指を骨折したため、二ヶ月ほど歩行困難となり、師範学校へも他の生徒に遅れて入学した。

この年の八月十五日にわが国は英米両国が主体となっている連合国に無条件降伏し、戦争は終わった。

(終わりに)

その後、師範学校を卒業し、小学校に就職したが、理想と現実の差を埋めきれず、教員生活を全うすることはできなかった。戦争後しばらくたって鮮魚仲買業が復活し、家業も元に戻ったので、



1トン爆弾が投下された国鉄東京駅 (太平洋戦争研究会 提供)

再度、家業を継ごうと思い、日本大学農学部水産学科に編入学した。しかし、大学四年生の時に国家公務員試験六級職(水産)に合格したため日本大学助手に採用され、鮮魚仲買業は弟が継いだ。大学教員時代に、学生を引率して埼玉県水産試験場に行った際、埼玉県を管轄していた椎名啓一検事が同級生であったことが分かり、それ以降の我々に対する試験場での待遇が良くなった。同じ同級生で、(株)日本鋼管常務取締役を経て(株)鋼管鋳業社長になった友田八郎氏からは鮭鱒養殖研究を委託され、貧窮の研究室財政の援助を受けた。また、ヨーロッパ養殖学会に出席した際、(株)東都水産社長の関本幸也氏の紹介で、ノルウェイの養鱒場を見学する機会を得た。さらに、東京都海洋公園審議会に学識経験者委員として出席した際、都会議員選出の宇田川芳雄委員(後に衆議院議員)と会った。その後、十四期の同期会に出席したところ、家業を継いでいる者を含め、弁護士・公認会計士・(株)三井物産常務取締役ほか、政・官・財界の各分野で活躍されている方々のいることを知った。私も努力はしたが、その目標に到達せず、その時々々の環境に強い影響を受け、今日に至った。

最後に、今後も東京都立第三商業学校が将来有為な卒業生を社会に送り出すことを祈念している。(日本大学名誉教授・日本水産学会名誉会員)

卒業論文をご返却します!!

旧制五年生当時のご卒業生の皆様へ。

暦年のOBの皆様の御執筆になられた卒業論文は、その一部を当図書室に於きまして永年保管中ですが、経年劣化により、その保管方法にも際限が到来しております。特に効果的な保存方法もなく、次第に朽ち果ててまいりました。

そのため、今般、母校での保管を解除いたしますので、ご返却を希望されますご卒業生には、一度母校図書室へお出向き願ひ、ご返却をお申し出下さい。概ね卒業期の順に保管されてはおりますが、一部、戦時中の被災の際の焼失または侵食、腐食の著しいものもあり、執筆者の判別に困難を来たします場合もありますので、ご承知置きください。

卒論は論題を定め、諸先生の指導の下に研究調査を行い、その成果をまとめて提出することとされていたように、提出の最低基準として、

自家営業の者 二〇〇ページ
就職の者 一〇〇ページ

でありました。中には一、〇〇〇ページを超える大作もあったようです。

論題としては、家業に関するものに、「繊維染色」、「旋盤・鍍金」、「為替・手形割引」、「食品水産加工」、「木樺」など様々で、墨東地区の伝統産業である代表的な製造業の技術史として記録の保存版として留めておきたいし、金融(質業)等の、云わば「手順書」もどきの論文が保管されています。おそらく製本と背表紙は学校側にて施されたものと思われれます。

なお、執筆された生徒ご自身以外の同窓生各位の作品も、内々には閲覧可能で、文献として一見の価値ありと申し上げたいほど貴重な資料です。

以上、同窓会事務局からお知らせいたします。

「お問合せ先」… 母校図書室

電話 〇三(三六四一)〇三八〇

《額田王賞》受賞まで

出雲 正明 (元三商教諭)

暑さには強い方だと、自分では思っていました。が、桁違いの今年の暑さには、さすがにお手上げでした。それよりもつと参ったのは、年明け以後、一首の歌の収穫も無いことです。腰痛、パーキンソン病の症状が目に見えて進み、利き腕に突然、痛みが走り出したのも大事件でした。体調の不良化と体力の大後退は、単純に年のせいにして笑ってなどおれない大事件でした。

私の近況につきまして、平成十七年に受賞した『永井隆平和賞』の論文受賞から、一昨年(平成十八年)の十一月三日に受賞した「三輪山まほろば短歌賞額田王」賞に至るまでの経緯、動機を申し上げますと、永井博士とは、その生前お会いする機会こそ逸しましたが、人生の共通項が幾つかあり、深い親近感を抱いていました。私の受賞作「世界平和への願い」は、畏敬する永井博士への抑えがたい親愛と追慕の情が書かしたものでありました。思いがけない「平和賞」の受賞が私に元気を吹き込み、以後、先のように短歌の入選受賞が相次ぎました。

(当会報第四十五号に「世界平和への願い」を掲載いたしました。事務局より)

○平成十八年三月二十一日

「第二回 出雲ほむら(炎)短歌賞」秀作に入賞

シヤラポアの

直に伸びたる 四肢美し

発止と返す 決勝の球

(篠弘 選)

唯一度

登りし富士が 足なえし

老いの心の 今を支ふる

(篠弘 選・今井陽子 選)

○平成十八年六月十日

「与謝野晶子短歌文学賞」入選 (入選率七%)

暁闇の

冷気を三度 吸いてより

今日の読書の灯をともしなり

(河野裕子 選)

○平成十八年十一月三日

「第三回 三輪山まほろば短歌賞」最優秀賞受賞

(「額田王賞」受賞)

行くほどに

音高まれど 目に迫る

万緑は滝を隠し抱けり

(前登志夫 選)

〔前登志夫先生から頂いたご批評を次に〕

万緑に包まれた滝を歌った一首であるが、構成が見事であり、山河自然の靈気がおのずからのしらべとなり、迫ってくる。上の句の動きにつれて、万緑の中の滝の響きが聞こえ、結句で、「隠し抱けり」となつて、ついに姿をあらわさない絶妙の情趣にうたれる。」

最後に、私の短歌作品のために御紙の貴重な紙面をご提供くださったことを感謝します。

この度、同窓会理事としてご苦勞なさつていらっしゃる編集子に声援を送り、併せて三商のますますの発展と同窓生のご健勝を心からお祈り致します。

新同窓会会則

第1章 総 則

第1条 本会は東京都立第三商業高等学校同窓会と称する。

第2条 本会は会員相互の親睦を図り、東京都立第三商業高等学校の発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するため、必要に応じ、次の事業を行う。

- (1) 会報の発行
- (2) 奨学援助及び進路指導に対する助成
- (3) 各種研修会、見学会及び講演会等の開催
- (4) 会員名簿の編纂・発行
- (5) その他必要と認める事業

第4条 本会は本部を東京都立第三商業高等学校内に置く。

第2章 会 員

第5条 本会の会員は、下記の資格のうちの一つを有する者とする。

- (1) 名誉会員 本会に功労があり評議員会が推挙する者
- (2) 特別会員 東京都立第三商業高等学校教職員であった者
- (3) 正会員 東京都立第三商業高等学校の卒業生

第6条 本会は東京都立第三商業高等学校在校生をもって本会会友とする。

第7条 (1) 正会員は終身会費を納入しなければならない。会費については1万円とする。

(2) 同窓会入会同意書は、入学時に提出する。

第3章 役 員

第8条 本会に理事30名以内を置く。

理事及び監事は評議員会において選出するものとする。
選出された理事の中から、下記の役員候補者を互選する。

- (1) 会 長 1名
- (2) 副会長 若干名
- (3) 会 計 2名
- (4) 事務局 事務局長を含む5名以上
- (5) 監 事 3名以内
- (6) 評議員 各期2名以内(原則)、但し議決権は1期1票とする。

第9条 会長、理事及び監事は評議員を兼ねない。

副会長、会計及び事務局は理事会において理事の中より互選する。

評議員は各期毎に、その正会員の中より選出する。

第10条 会長は本会を代表し、会務を統括する。

会長は理事会の議長となる。

副会長は会長を補佐し、会長不在のときはこれを代理する。

第11条 理事は理事会の決議または本会則の規定により会務を掌理するほか、会長、副会長共に不在のときは互選によってその職務を代理する。

第12条 監事は事業及び年度会計・財産の監査を行い、年次定時評議員会においてその結果を報告する。

監事は理事会に出席して所見を述べることができる。

第13条 会計は本会財産の保全、年次予算の策定・執行とその決算報告を行う。

事務局は本会の運営に関わる諸業務を掌理する。

第14条 評議員は同期会員の意見を総括し、それを評議員会において提議すると共に、評議員会の構成員として、その役務に努める。

第15条 役員の任期は2年とし、任期の起算日は評議員会において選出後に就任し、2年後の年次定時評議員会の終結時までと

する。

但し再選を妨げない。

役員は任期満了後も後任者の就任まではその職に在るものとする。

補欠者の任期は前任者の任期満了時までとする。

第16条 理事会は第8条規定の理事で構成する。理事会は第3条規定の事業及び第13条規定の諸業務を立案し、評議員会の承認を経てそれを執行することの外、評議員会の委任による事項を決議し執行する。

但し、緊急の場合は、評議員会の速やかな事後承認を条件に、理事会の決議をもって評議員会の決議に代えることができる。

第17条 評議員会は第8条規定の評議員で構成する。議長は出席評議員の中より選出する。

評議員会は第9条規定の外、理事会より提出された第3条規定の事業、年次予算案、年次会計報告及び其の他必要事項を審議し、決議する。

第18条 本会は理事会の決議を経て、顧問及び参与を置くことができる。

第19条 理事会は会長が必要と認めるとき、または理事5名以上の請求があったとき会長がこれを招集する。

評議員会は毎年1回定時に開催する。但し第28条に定める事項が生じた場合は、その都度臨時に開催する。

第20条 理事会はその全員の2分の1以上の出席をもって成立し、議事は出席員の3分の2以上をもって決定する。

評議員会はその全員の3分の1以上の出席をもって成立し、議事は出席員の2分の1以上をもって決定し、可否同数の時は、議長がこれを決する。

両会の表決は予告事項については委任状または代理人によることができる。

第4章 総 会

第21条 定時総会は特別な理由なき限り2年毎に開き、臨時総会は理事会が必要と認めるときに開くものとする。

第22条 総会は会長がこれを招集する。総会の目的、期日及び場所の通知は書面をもって行う。但し本会会報でこの通知をなすこともできる。

第23条 下記の事項はこれを総会に報告しなければならない。

- (1) 前総会以後の年次収支決算
- (2) 直近の財産目録
- (3) 事業報告

第5章 会 計

第24条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日をもって終わる。

第25条 本会の経費は会費、寄付金及び其の他の収入をもってこれに充てる。

第26条 毎会計年度の収支は収支均衡を旨として策定された予算に基づいて厳正に管理されなければならない。

年次収支予算及び同決算は評議員会の承認を要する。

第6章 附 則

第27条 本会の事務に関する細則は理事会において定める。

第28条 本会則の改定及び本会に関わる重要事項については評議員会の議決に付きなければならない。

第29条 本会則は平成20年5月10日より有効とする。

以 上

特別会報の発刊に寄せて

同窓会長 柴崎晴雄

母校三商は、この一月に創立八十周年を迎えたことを機会に、「創立八十周年記念誌」も刊行されました。私どもの「三商同窓会報」も昭和三十一年（一九五六）年の復刊後、今号で第四十七号を数えることとなりました。この周年行事に因み、同窓会の歩みと致しましても、特別会報として同窓生の皆様にご寄稿をお寄せ願ったところ、記念誌に準じた編集方針をもって志向いたしました。

ひと口に八十年と云いまして、三商の開校期が昭和恐慌の真つ只なかで、統制の時代を経て、戦禍を決死にくぐり抜け、さらには敗戦後の復興期より奇跡的に経済基盤が蘇生し、早期に国際化への冠たる地位を占めた後も、折にふれて通貨変動や近隣における戦禍やテロなど、波乱要素を対岸に垣間見ながらも幾多の激動の時代を体験して今日に至りました。今回寄せられた多数の投稿にも、まさに激動の時代における諸先輩方のご苦労とその足跡を、あたかも昭和史の映像を見ているがごとくに感動させられるものがありました。

八十年は決して短い年限ではありませんが、次代の九十周年、百周年へ至る一通過点に過ぎません。この伝統ある同窓会を如何にキープし、継承していくべきかを思考しますと、先ず《結束》あるのみです。当会報を通じての情報交換や「総会交流会」（来る十一月七日開催予定。別掲）を通じて進取の気風に満ち、明日を先取りする等の気概をもって前進したいと思えます。

なお、この新年度にあたり、同窓会理事会の中に「東京三商会委員会」を組成いたしました。同窓会の先輩諸氏からの引継ぎ事項かつ、悲願でもある財団の価値ある運用を視野に入れ、このためには未来を拓いていく上でのキーワードとして「温故知新」の考え方を再認識し、確信をもって進めて行きたいと考えております。

このたびの「特別会報」の編集刊行にあたりまして、同窓会会員の皆様のご努力ご支援に対しては重ねて御礼申し上げます。

以上

編集後記

今年も七月一日に発行出来ませんでした。出来た物を見て、お許しただけだと思います。

会長と事務局長が印刷代を節約するため、フロッピ―に入力し印刷所へ渡すのに、寄稿が多かったので、大変なご苦勞でした。

岩瀬 和子

偉大なる、母校の伝統と歴史の八十年。それを弛む事なく築き上げてきた、教職員と諸先輩の同窓生に、これからもさらに栄光あれとの願いでの特集号。大切に誇りをもって胸を張る。

三浦 康二

猛暑、酷暑の言葉では足りない暑さが続くなか、よく頑張りました。

想像以上の会報が出来ました。

三商同窓会の熱いものを感じました。

ただ今年も発行が大幅に遅れました。

これで来年の課題がはつきりしました。

杉本 光男

記念誌発行に少しでも協力できたことに感謝！

八十才になったのですから後期高齢者なのです！

第三商業高校を皆で守って育てましょう。

ぜひ九十周年記念誌（もう十年後のこと）見たいものです。

九十周年記念事業の会計もスタートしました。（会計担当ですから！）

田端 彰

三商創立八十周年記念同窓会会報四十七号「特別号」は、最初八十頁以内に収めて、発行の予定でありましたが、寄稿が次から次へと届き、爆発的な関心が寄せられました。これも、母校愛の気持ち懐旧文となつて、青春の謳歌と、エネルギーの発散となつての文章が見受けられます。ご寄稿下さった諸兄に、厚く御礼申し上げます。ご参考までに、私が同窓会会長に就任した平成十五年四月に、近所に在住（松戸市矢切）の小暮敏雄先生より、お祝詞を戴き、大変恐縮いたしました。一文を記念事業に因みご紹介いたしご冥福をお祈り申し上げます。

「同窓会会長の御就任、おめでとう御座います。しかし御祝詞を申し上げると同時に、何よりもご苦勞様ですという、犒いの言葉をお掛けしなければならぬような気がする。貴君の能力と熱意ならば、きつと上手くいくと思うが、是非頑張つて下さい。また、健康管理には十分な御配慮をお願いしたい。略」

木戸 隆吉

医療法人社団 **飯ヶ谷内科クリニック**

理事長 **飯ヶ谷 清**
医学博士

(第22期)

千葉県鎌ヶ谷市東道野辺5-19-15

TEL 047(445)8881

祝 母校三商創立80周年
心よりお喜び申し上げます。

28期同期会(12代生徒会)

伊澤宏祐・鳶嘉雄・大木貞

尚、9月21日(日)12時より芝パークホテルにて
28期同期会を開催する予定です。

祝80周年
おめでとうございます。

 **日本原色印刷工業株式会社**

代表取締役 **高久三男**

〒131-0043 東京都墨田区立花1-34-4
TEL 03(3618)5601 FAX 03(3618)5602
E-mail: info@genshoku.jp
http://www.genshoku.jp

八重洲富士屋ホテル

四季旬菜
霞ヶ関別荘

桂

霞ヶ関・弁護士会館地下1階
〒100-0013 東京都千代田区霞ヶ関1-1-3
TEL (03)3504-1222 FAX (03)3504-1263
E-mail: k-katsura@yaesufujiya.com
http://www.yaesufujiya.com

税理士
社会保険労務士
行政書士

石川 昭

石川昭税理士事務所
石川社会保険労務士事務所
行政書士 石川昭事務所

〒224-0001 横浜市都筑区中川1-18-11皆川ビル4階
TEL 045-911-5454 FAX 045-911-5396
Eメール akira-ishikawa@tkcnf.or.jp
自宅 都筑区中川1-2A801 TEL 045-912-5056

魚河岸

海老、貝仲卸

土方商店

土方敏之(第29期)

〒104-0045 東京都中央区築地5-2-1
電話 & FAX 03(3541)8408

TCA1973年9月創立

東京クラシック愛好家協議会

代表 鈴木 重行(日比谷高校(財)星陵会理事長)
主任解説員 柴崎 晴雄(都立第三商高 25期卒)

♪ 毎月例会を上野・東京文化会館4階会議室

にて開催しています♪

事務局 市川市南八幡 1-19-1

馬場事務所内

お問合せ先: 電話/FAX 03-5681-1398 柴崎

両国に集う...



T H E
H O T E L
B E L L E
G R A N D E


ザ・ホテルベルグランデ
宿泊・宴会・レストラン

ご予約、お問合せ

TEL03-3631-8111 FAX03-3631-8112
東京都墨田区両国2-19-1

(JR両国駅西口前)

ベルグランデ

検索 



卓球部 OB
ゴルフ同好会
さんたごクラブ

会長 山中 忠司郎 (24期)

- | | |
|---------------|---------------|
| 尾坂 富美子 (24期) | 宝 寄 浩 一 (25期) |
| 杉 本 光 男 (26期) | 早 川 嘉 一 (26期) |
| 後 藤 文 夫 (26期) | 井 田 和 孝 (26期) |
| 岡 本 節 三 (26期) | 岩 瀬 和 子 (26期) |
| 川 島 謙 次 (28期) | 小 林 慎 典 (28期) |
| 田 中 稔 (28期) | 長 堀 慎 治 (28期) |
| 野 村 卓 二 (29期) | 安 藤 松 男 (29期) |
| 鈴 木 正 之 (29期) | 杉 浦 清 (31期) |

この世に、これほど気の置けない笑いのたえない会はない
“體”が草書体になっても気持ちは明朗楷書体の莫逆の衆!

★さんたごクラブ=三商卓球ゴルフクラブ

小型生コン製造販売
日本工業規格表示認定工場
小野建材工業株式会社
代表取締役 小野 雄久
(第二六期)

事務所 東京都江戸川区平井七丁目二番二十九号
電話 〇三(三六一七)四一一(代) 〇三番
FAX 〇三(三六一七)四一一 〇六番
〒132-0035 東京都江戸川区平井七丁目七十二番一
電話 〇三(三六一一)五〇四〇番



双六会

第26期
ゴルフ同好会

- | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|---------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|---------------------|
| 飯 神 杉 高 前 宮 大 井 岩 加 市 | 田 山 本 橋 田 川 類 田 崎 納 川 | 富 英 光 駿 恒 澄 博 和 三 秀 守 | 男 治 男 輔 昭 男 司 孝 郎 紀 正 | 石 後 瀬 早 増 山 星 清 小 海 猪 | 井 藤 川 川 田 岸 野 水 川 老 瀬 | 達 文 起 嘉 一 進 秀 光 哲 正 | 義 夫 美 一 郎 行 男 博 英 栄 進 | 岩 佐 高 平 松 三 清 小 岡 河 宮 | 瀬 藤 橋 野 本 木 田 野 本 野 森 | 和 光 一 義 伸 孝 田 澤 節 孝 啓 | 子 正 郎 郎 悦 実 光 三 司 之 |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|---------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|---------------------|



新館 市川市新井三ー十七ー十七
ヨイシナ
〇〇四七(三五七)四一四七(代)
本店 千葉県浦安市猫実四ー二一十六

浦安 功德林

● 駐車場完備

◇ ご宴席(十名〜百二十名)

まごころの味 老舗の心

仕出し料理・各種折詰

鈴木 佐一郎 (第26期)

「らんぷ」の仲間

☆第十代生徒会役員のおも50周年を迎えました☆

橋本宣一(27) 片山千代子(27) 塚本博子(27)
根岸秀満(27) 山中夢か子(27) 能田博子(27)
鎌形泰央(27) 樋口昭男(27) 鈴木久美子(26)
吉本舜(26) 藤村栄三(26) 鶴岡恒夫(26)
会長 古田勝一(26) 副会長 志村泰男(26) 書記長 豊田紀雄(26)

演劇 出前します
現代美術 絵画 プロデュースします

現代制作舎 演劇美術部

〒121-0823

足立区伊興3-6-3 豊田紀雄(第26期)

TEL 090-2203-0343

FAX 03-3899-4714



株式会社 早川商会

代表取締役 早川 嘉一

第26期 (卓球部)

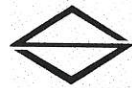
〒123-0873 東京都足立区扇1-45-22

TEL 03-3898-3336・6996

FAX 03-3889-6909

hayakawa-s@tokyo.email.ne.jp

特殊製袋加工・印刷 紐付巾着袋・フィンバッグ・手提バッグ
テープハンドルバッグ・LD丸底袋
LDジャケット袋・ファイル用袋各種



株式会社 杉本好二商店

代表取締役 杉本 光男

第26期 (卓球部)

〒130-0002 東京都墨田区業平1-17-5

TEL 03-3623-2185

FAX 03-3623-1859

砂利・砂・セメント・碎石
生コンクリート・アスファルト 販売店

有限会社 みのる不動産

東京都宅地建物取引業協会会員

代表取締役 三川 廣志

(第34期)

■亀戸店 東京都江東区亀戸7丁目11番12号京葉道路面
TEL(3684)5851代 FAX(3684)5850
E-mail:mk@e-minoru.com

■本店 東京都江東区北砂7町4番3号環状四号面
TEL(3644)7537代 FAX(3640)2543

おしゃれエプロンメーカー

有限会社 篠崎

取締役会長 篠崎 清 (第22期)

〒272-0021 市川市八幡4-17-33

TEL047-334-5027 Fax047-334-5432

梱包・輸送・倉庫業

日祥梱包倉庫株式会社

代表取締役 有坂 祥一 (第22期)

本社 〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤4651
TEL 0466-48-5641 FAX 0466-48-8533

東京営業所 〒108-0072 東京都港区白金5-11-17(株)有坂梱包内
TEL 03-3441-1362 FAX 03-3440-1444

<http://www.nisshokonpo.com> E-mail:info@nisshokonpo

トステム・YKK・不二サッシ
ラス・アルミサッシ・スチールドア工事
都知事許可(般-13)第36530号

 今村 ガラス

(第22期) 今村 輝男

〒110-0012 東京都台東区竜泉3丁目9番7号
TEL 03(3873)5927(代)
FAX 03(3873)6369

三文会

中 一 訓

16期

〒二四一〇〇三二
東京都北区王子本町二一四一
電話〇三(三九〇九)四一〇七

杉本千賀子

ガーネット
GARNET

東京都港区新橋3-21-7 松本ビル3F
Phone:03(3433)2327

32期 高橋 浩

東京都江戸川区西篠崎
22-19-4

電話/FAX 03-3678-6067

十九期 中野 貞三

三商一九(OB)会『歩く会』会長
都内・近隣史跡めぐり・隔月十九日開催

〒133-0056 江戸川区南小岩七ノ三十八ノ十一
TEL 〇三・三六五八・六三三四
FAX 〇三・三六五八・六三四〇

公認会計士・税理士

金 井 一 夫

事務所 八千代市八千代台東六―九―一
〒276-0032 TEL 〇四七四(八五)七五七五
自 宅 八千代市八千代台東六―一〇―一
〒276-0032 TEL 〇四七四(八五)六五二一

有限会社 大石商会

リサイクルショップ
てるてるぼうず

取締役 大石 傑 一 郎
取会

曳舟本店 〒131-0032 東京都墨田区東向島2-14-1
TEL 3616-2434 (代) FAX 3610-0849
千駄木店 ☎5685-9530 (代) 東向島店 ☎3616-2430
自宅 〒111-0051 東京都台東区蔵前4-28-5 ☎3861-0084
携帯 090-7836-6060

旨い 安い
下関ぶどう地鶏ちゃんに

鳥 義

30期 氏家 賢

本館/墨田区石原3-18-4
電話 03-3626-4466

別館/墨田区石原3-17-3
電話 03-3622-8343
FAX 03-3622-8349

<http://e-sumaida.gr.jp/toriyosi/>

母校の更なる発展を祈ります

25期

若 水 会

50年間集いを続けています。

弁 護 士

公認会計士

高 野 清

(第16期)

事務所 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2丁目4番地
フクヤマ第三ビル47号
電話 03-3291-7241 ファクス 03-3291-7229

日本橋
酒席



☎03-3271-2939
☎03-3275-3050
東京都中央区日本橋3-3-3
<http://www.idumiya.info/>

和生菜子



深川

伊勢屋

本間 莊 一 (第22期)

本 店 東京都・深川不動尊前
平野町店

夢をかたちに・・・



バッジ
 カップ
 トロフィー
 楯
 メダル
 旗
 各種記念品

「お客様の笑顔」
 それがわが社の
 テーマです。



【営業品目】 ●バッジ ●カップ ●トロフィー ●楯 ●記念品

GKō 三興徽章株式会社

〒135-0031 東京都江東区佐賀1-7-10 三興徽章ビル TEL03-3641-4426
 ファクシミリ 03-3641-4414

両国ショールーム

〒130-0011 東京都墨田区石原3-15-4 ダイアパレス 錦糸町第五101号

古田 勝一（第26期）、古田 純代（旧姓齊藤・第28期）

江戸蕎麦打處



あさだ

江戸時代より続く
伝統のわざと味

二階座敷二〇名、椅子石一〇名にて
クラス会等にご利用頂いております
コース料理、鴨なべ、鳥すき等
揃えてお待ちしております

定休日 日曜日 第一・第三土曜日

台東区浅草橋二・二九・十一

江戸通り浅草橋と蔵前の中程

電話 〇三(三八五一)五四一二

(第二八期) 粕谷 安孝

あさだHP <http://www.asada-soba.co.jp>

生活空間応援します

土地建物の賃貸・売買・仲介
不動産管理

戸建・マンション分譲
住宅リフォーム

清掃事業までの一貫業務

ご売却査定・お住み替え・賃貸管理・その他
不動産に関することなら何でもご相談ください!!

(社)東京都宅地建物取引業協会会員 東京都知事免許(11)26577号 土地建物売買仲介管理

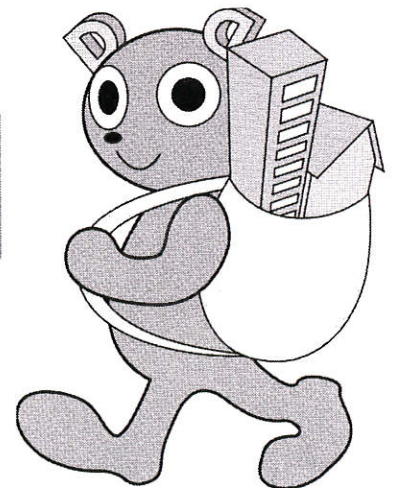
大雄開発株式会社

代表取締役 松岡雄治 (第26期)

〒136-0072 江東区大島2-41-17

TEL:03-3636-3111(代) FAX:03-3636-3115

URL <http://www.daiyukk.co.jp> E-mail matsuoka@daiyukk.co.jp

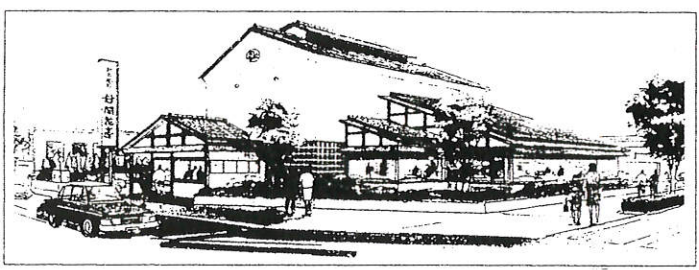


スズキテクノスは
パンチングメタル、エキスパンドメタルの
得意分野にチャレンジしています！

- パンチングメタル
- エキスパンドメタル
- 金網
- 金属加工

スズキテクノス株式会社

URL <http://www.suzuki-tkns.co.jp>
〒130-0014 東京都墨田区亀沢2-20-7
TEL.03-5611-7561 FAX.03-5611-7570



ベーカリーレストラン マルコ
MARUKO 3656-5211
しゃぶテキ亭 3656-5629
春江店 5677-0101
葛西店 3689-0101
柴又街道 花炎亭 3677-8601
八千代村上とんかつ大和楽 047-405-5110

昭和36年卒28期生
代表取締役 田中 稔

当店では、ご宴会・ご会合・法事や各種
パーティー等人数・ご予算に応じて承っ
ております。

営業時間 AM11:00~PM11:00

お食事処  **開花亭** 葛西店

Law  Office

一橋法律事務所

TEL 042 345 2722
弁護士 越路正巳(22期)

荻野会計事務所

税務・経営相談

http://www.d3.dion.ne.jp~zei_ogi/

税理士 荻野弘康
(昭和30年卒 簿記部)

事務所 東京都荒川区南千住5丁目25番14号
〒116-0003 TEL 03 (3803) 2 3 2 8
FAX 03 (3805) 2 0 6 9
E-mail:zei_ogi@d3.dion.ne.jp
交通:地下鉄三ノ輪・JR南千住下車

本格 中華料理

◆創業昭和5年(1930)◆

RAKU RAKU



25期 中島弘敏

〒135-0004 江東区森下3-13-2
(森下文化センターならび)
☎ 03-3631-1300

CD・レコードショップ

株式会社 蓄晃堂

代表取締役

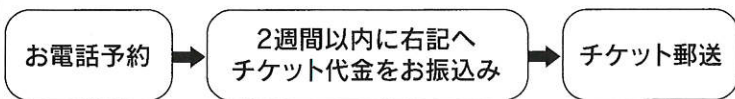
木村純枝

〒110-0005 東京都台東区上野6-12-16
TEL 03-3832-0540
携帯 090-1500-1745

●チケットのお申込みは (株)日本交響楽協会 ☎03-5721-4621 まで!(土・日・祝日を除く10時~18時)

※ダイレクト・メール見た!とお申し出下さい。受付の際には封筒記載の登録番号が必要になります。

お申込の流れ



チケット代金お振込先
三井住友銀行 恵比寿支店 (普)0956496
カ)ニホンコウキョウガクキョウカイ

※このダイレクト・メールは、当社取扱いのチケットをお買い上げ頂いた皆様にお送りしております。今後登録を変更・抹消なされた場合は、お手数ですが当社までご連絡をお願いいたします。

アーティスト & コンサート マネージメント
株式会社 **日本交響楽協会**

〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南1-3-6 Cビル4階 TEL.03-5721-4621(代) FAX.03-5721-4624
Artists & Concerts Management
JAPAN ORCHESTRAL SOCIETY,LTD. <http://www.nikkyo.jp>
C.I.Bldg.4F,1-3-6 Ebisu-Minami,Shibuya-ku,Tokyo 150-0022 Japan TEL.03/5721-4621 FAX.03/5721-4624 E-mail:information@nikkyo.jp



『両国の駅のおそばの大関庵
味も良ければ盛りもよいよい』

そば処 **大 関 庵**

19期 大 関 守

JR両国駅西口
国技館通り中程 TEL.03-3631-0728

親切に、お客様第一に業務を行います。

公認会計士 **浅野 修一**
税 理 士

(第21期卒)

事務所 〒110-0015 台東区東上野1-24-4 丸千第二ビル
電話03-3835-2233 FAX03-3832-7175

都立第三商業高等学校

創立80周年 おめでとうございます 益々のご発展を祈ります
東京魚市場 三水会

会 長	藤 枝 精治 (24期)	幹 事	土 方 敏之 (29期)
副会長	鬼 澤 好男 (25期)	〃	宇 田 川 武志 (31期)
会 計	加 藤 晋一 (28期)	〃	中 村 一好 (32期)

[三水会の歴史]

昭和25(1950)年発足	平成 2(1990)年10月20日 ホテルメトロポリタンにて創立40周年開催
40(1965)年10月17日第一ホテルにて創立15周年開催	12(2000)年 スエヒロにて創立50周年開催
45(1970)年10月18日椿山荘にて創立20周年開催	22(2010)年 創立60周年開催(予定)
55(1980)年ハ9月27日東京會館にて創立30周年開催	

9期 小川 博敏(小川久)	23期 井上 武久(て良)	28期 加藤 晋一(佃亀新)
13期 今関 隆一	24期 内山平八郎(大内)	28期 谷島 隆
14期 内田 旭(丸 辰)	24期 加藤 守宏(加藤)	29期 土方 敏之(土方)
15期 干場 常雄(米 恵)	24期 藤枝 精治(尾藤)	31期 宇田川武志(カネキン宇田川)
16期 小川祥太郎(小川兼)	25期 鬼沢 好男(伊勢由)	32期 高田 敏雄(高清)
18期 北原 郁夫	26期 深谷 和男(手源)	32期 中村 一好(増分)
19期 桐ヶ谷正保(ツ尾清)	26期 渡辺 照雄(渡福)	
20期 栗原 秀郎(越虎)	27期 伊藤 隆悠(西保)	

理容の先駆け 銀座の創業から100年

BARBER ヨネクラ

東京駅八重洲口

東京建物ビルB1階 昭和4年11月26日開業

～東京駅東口(当時)オープン40日前に先んじて
開店した当ビル第1号テナント～

電話 03(3275)3588

どじょうすくい踊り教室

読売日本文化センター 錦糸町 (第1&3日曜日)
10:00~11:30

朝日カルチャーセンター 千葉 (第2&4金曜日)
13:00~14:30

講師 後藤省三

(第28期)



安来節保存会 踊師範 (大利根支部)

〒272-0033 千葉県市川市市川南1-1-8-808

TEL&FAX 047-321-0786

THE 'DUBLINERS' IRISH PUB

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-18

ニュー虎ノ門ビル1F

TEL. 03-5501-1536 FAX. 03-5501-1022

E-mail: sali6532@sapporo-lion.co.jp

URL <http://r.gnavi.co.jp/g008215/>



東天紅

TOH - TEN - KOH

第一ホテル両国店

店長 岩田 和行

株式会社 東天紅

〒130-0015 東京都墨田区横網1-6-1

第一ホテル両国2階

Phone: 03(5608)1015 Fax: 03(5608)1018

e-mail ryogoku@totenko.jp

URL <http://www.totenko.co.jp>



TSURUGAYA

鶴ヶ谷建設株式会社

〒132-0014

東京都江戸川区東瑞江1丁目26番13号5階

代表取締役 鶴ヶ谷 仁志

電話 03-3679-2121 (代表)



Woody-art-hosoda

細田木材工業株式会社

代表取締役会長 細田安治

〒136-0082

東京都江東区新木場 2-15-28

TEL 03-3521-8701 (代)

FAX 03-3521-8708

e-mail: ceo@woody-art-hosoda.co.jp

<http://www.woody-art-hosoda.co.jp/>



みっま

三ッ政 名物
祭天神 坂蕎麦
河童 蕎麦
錦糸 蕎麦
蕎麦

住所：
東京都墨田区江東橋
4-20-4
TEL：
03-3631-5850



(墨田区銘品名店会)

定休日：
土曜及び祝日です

河西紀道 (第25期)



20期

代表取締役

茂 呂 雅 之

株式会社 東京フロダグツ

本 社 東京都墨田区千歳2-12-7 〒130-0025
Tel.(03)3633-6601 Fax.(03)3633-6776
工 場 千葉県八千代市小池 90 〒276-0001
Tel.(047)488-8531 Fax.(047)488-8533
URL : http://www.topro.tv



20期

代表取締役 社長

天 野 弘 治

株式会社 ピアット

http://www.piatto.co.jp 〒335-0034 埼玉県戸田市笹目1-41-4
E-mail:info@piatto.co.jp TEL 048-422-0081
FAX 048-422-0080

丸 喜 株 式 会 社

20期



代表取締役会長

河 原 啓 介

本 社
〒111-0032 東京都台東区浅草6-4-12
Phone:03-3876-1751 Fax:03-3875-6168
http://www.maruki-net.com
E-mail:k-kawahara@maruki-net.com

Keiyou Advance Distribution
京葉アドバンス物流株式会社

26期

取締役会長

小 宮 邦 彦

Keep Up With The Times
時代と共に進む

〒132-0001
東京都江戸川区新堀1-42-10
Tel 03(3678)3011
Fax 03(3678)3013
e-mail k-komiya@3k-kad.com



心 掛けプロジェクト
Keiyou Advance Project
http://www.556.3k-kad.com/

創業 文久年間

素材の良さと伝統の味を守り続ける老舗



割烹 とうだ

東京都中央区日本橋室町1-12-3
http://www.n-toyoda.com

電話 03-3241-1025(日・祝日休み)
橋本 敬(20期)

あいうえお順

山 柳 茂 松 増 庭 富 高 清 澤 河 天
口 川 呂 本 野 野 岡 山 水 橋 原 野
繁 眞 雅 隆 好 鶴 輝 明 保 康 啓 弘
夫 郎 之 治 生 三 彦 雄 治 夫 介 治

祝 都立三商80周年
20期有志一同

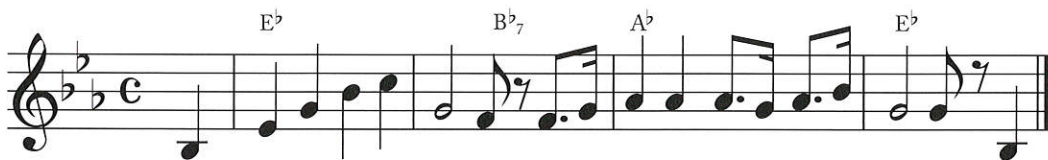
校歌

作詞 前田 夕暮
作曲 山田 耕作
編曲 脇 則之

都の空は明けたり今
希望は燃ゆる若きわれら
都立第三商業、ここに拠るや
日本の富を担ふわれら

富岳の雪を望む窓辺
理想は高し 若きわれら
都立第三商業、ここに居るや
都の栄えを築くわれら

東都の海の門にありて
心は潤し 若きわれら
都立第三商業、ここに立つや
江戸の誇りを継げるわれら



み や この そ ら わ あ け た り い い い ま ー き
が く の ゆ き を の ー そ む ま あ ど お べ ー り
お と の う み の か ー ど に あ あ り い て ー こ



ほ お わ も ゆ る わ ー か き わ ー れ ら と
そ お わ た か し わ ー か き わ ー れ ら と
こ る わ ひ る し わ ー か き わ ー れ ら と



り つ だ い さ ん し ょ う ぎ ょ こ こ に よ る や ー に
り つ だ い さ ん し ょ う ぎ ょ こ こ に お る や ー み
り つ だ い さ ん し ょ う ぎ ょ こ こ に た つ や ー え



ほ ん の と み を に ー な う わ ー れ ら ー ふ
や こ の は え を き ー ず く わ ー れ ら ー と
ど の ほ こ り を つ ー げ る わ ー れ ら ー

応援歌

作詞 多田 宏
作曲 池内 友次郎
編曲 青山 政憲

見よ三商の旗じるし

T・C・Sの行くところ

旭日洗ふ波がしら

ここに刻む若人の

勝算すでに吾にあり

頑張れ三商、頑張れ三商

(ふれっ・ふれっ・振れー)

開け三商の底ぢから

T・C・Sのはた風は

歴史が語るその誉れ

受け継ぎ来たる若人の

命の誇り吾にあり

頑張れ三商、頑張れ三商

(ふれっ・ふれっ・振れー)

見よ三商の鉄の陣

T・C・Sの旗の下

正義に結ぶ和のこころ

明るく強き若人の

凱歌はすでに吾にあり

頑張れ三商、頑張れ三商

(ふれっ・ふれっ・振れー)

軽快に

みきよ ささん しょうの のは たじり しらん
 ティーシー エースの ゆく とか こせ ろきよ
 ティーシー エースの は た の せ も はと せ
 じしき つがに あかむ らたす うるぶ なそわ みの がほこ しまこ られる こうあ
 こけか るつる にぎく ききつ ざたよ むるき わわこ うどう のの しょうい が
 うさちの すほす でこで にりに わわれ ににあ りりり がんば がい がん がん
 れれれ ささん しょう がんば れれれ ささん しょう
 れれれ ささん しょう
 ふれー ふれー 振れ 三商

三商同窓会報第四十七号

〔創立八十周年記念特別号〕

平成二十年九月一日発行

発行者

東京都立第三商業高等学校同窓会

発行責任者

三商同窓会報委員会

発行所

東京都墨田区業平一の一七の五

都立三商同窓会事務局

杉本光 男

電話〇三(三六二三)二二八五

FAX〇三(三六二三)一八五九

印刷所

日本原色印刷工業株式会社

